K工6F1-1　35-191

三餘學寮編纂

博物新辭典

大阪　田中宋榮堂發行

明治
40 1 17
内交

例言

一 本書は、中等教育程度に於ける動物學、植物學、生理學、鑛物學等の教科書中につきて、あらゆる題目を選擇し、これに簡明なる解說を加へ、これを五十音順に配列したるものなり。

一 題目の中、古來、一定の充字なきものは、編者の私見を以て、これを定めたるものあり。又、題目の下には、英語、若くは、學名を挿入したるものあり。

一 題目の中、古來、用ゐ來れる充字にして、二以上あるものは、いづれも、これを掲げて、參考に供したり。

一 搜索を容易ならしめんがために、卷尾に、必要と思はるるもののみを限りて、單簡なる字引索引を附したり。

一 本書は、倉卒の間に稿を了へたれば、前後入違ひたる所、活字組版の誤れる所など、固より免れざるべし。これ等は、他日を期して、必ず、訂正すべし。

一　本書の編纂は、主として、都築穆君の熱心なる執筆によりて成れり。記して、その勞を感謝す。

明治卅九年十月

三餘學寮の書齋において

編者・誌す

博物新辭典

三餘學寮編纂

あ

あえん（亞鉛）鑛 Zinc　黄白色の金屬にして、その表面錆び易ければ光澤なし。天然に産するものにあらずして、閃亞鉛鑛より採る。屋根を葺き、箱を作り、その他、種々の器具を製す。

あかがひ（魁蛤）動 Arca inflata, Reeve,　軟體動物の鰒鰓類にして、海産なり。殼は殼貝にして前後の兩肉柱は略同大なり、食料とす。

あかざ（藜）Chenopodium album,　蓼科に屬する草本なり。花は、小にして帶綠色、葉は、卵形にして食料に供し、原野に生ず。

あかめふご（アカメ河豚）動 有毒河豚中の、劇毒性なり、皮膚は刺を有せず、腹部は、散在せる結節狀物を供へ、眼は、口邊に開き、頭は全身の三分の一を占む。背部は橙黄色を、褐色の中色にして、腹部は、白色なるも、結節狀物は暗色なり。また、腹側には、點々暗色圓形を有せり、その産卵時期は、凡そ、二月頃なり、卵巢は最も劇毒を有し、肝臟、睾丸、胃、腸心臟等これに次ぐ。

あきれすきん（アキレス腱）解 Tendon achillis　脛部の筋にして、此目魚筋の下端と相合し、下は踵骨の後端に連る、全身中最大、最強の腱なり、歩行、飛躍等の運動を司る。

あくきがひ（惡鬼貝）動 骨貝を見よ。

あけび（通草）Akebia quinata　木通科の草本なり、蔓生にして葉は食し、また茶に製す、果實も甘し、蔓は細工に用ゐる。

あごあし（顎脚）Maxillipedes　動 海老の口邊に

ある三對の脚にして、食餌を口へ運ぶ用をなし、脚の周圍に、發生せる短毛は、觸覺を司る。

あこう(蔦松)Ficus wighiana, Benth 植蕎木にして、果實は橘の如し、材質は軟にして、生長の度遲く、枝は多く分岐す、氣根は枝上より繩を垂する如き狀をなす。幹は灰白色を帶び、分裂する事なく、癒着力強きは、特獨とす。燃料及び用材に用ゐる。

あさ(大麻)Cannabis sativa 植大麻科の草本なり。風媒花にして雌雄異株なり、花は單性にして、種子は胚乳を缺く、普通十尺の以上に出てずと雖、伊國産の如きは、二十尺に達するものありと。莖の中央に髓あり、莖を圍繞せる、維管束の靱皮纖維は製して、織物、繩等に用途極めて、廣し。

あさがほ(朝顔)Pharbitis hederacea 植旋花科の草本一年生なり。莖は蔓性向日性にして、花は雌雄多し、觀賞に供す

あさくさのり(淺草海苔)Porphyra laceurata 植アマノリともいふ藻類にして、海中岩石等に發生す、紫黑色を帶び、柔軟扁平なり、食用とす東京名産「アサクサノリ」と稱するもの是なり

あさみ(蘇)Cirsium. 植山野に自生せる藥料植物にして、其種類極めて多し。葉は欠刻ありて絲尖れり、莖、葉とも軟密生し採るべからず。

あざらし(海豹)Phoca foetida 動哺乳動物の鰭脚類なり、容貌犬に似、頭圓くして體軀長し耳は外殼を有せず、後肢は後方に向ひて相對す。體色は深褐色にして光澤あり、常に海上を游泳すと雖、時に陸上に息ふ然れども海上の如く運動活潑なる能はず、魚類等を常食とす、性柔順にして群居す、水中に入る時は鼻孔、耳孔は、一種の裝置にて、閉らる、鳴聲奇にして哀なり。肉は、北海道土人の食用に

供せられ、皮は衣服雨具又は、船を張るに用ゐ、油は多く燈用とし、骨、血液等皆變つべきなし。

あし(足)Foot 動人類の後肢踝より以下をいふ

あし(脚)Leg 動人類の後肢全部の稱なり

あし 植よしと同じ。

あじあぬいべう(亞細亞鼠猫)Y, Gibella 動東印度に産し、稀に亞剌比亞、亞米利加に野生す。猫大にして、鮮褐灰白色の有し、褐色又は黑色の斑點或は帶を表はし、喉部は白色にして、その各側に黑線あり、背には極微些なる斑を有し、尾には、黑白相交りたる、九乃至十個の輪を表したる短毛を蔽ふ。この獸は、盛内より麝猫膠を産す。

あせ(汗)Sweat 動汗は皮膚全身二百五十萬の汗線より分泌する、排泄物にして、百分九十九は水分を含み他は、少量の尿素と鹽分とより成る。成人一晝夜の分泌量は、平均三合强なりと雖、氣候、飲食、勞逸の度によりて、差あり。体溫の調度を司る。

あたすく(アタンク虫)Ank 動節足動物の壁蝨類にして、米粒大なり、蚌の頭等に寄生す。

あち(鰺)Caranx 動硬鱗類の、海産魚にして七八寸に至るものあり。背、臀及び腹なる三鰭の前部は、無節の硬棘を以て支持せられ、體の側面中央には、一行の硬鱗あり、淺綠色を帶び、肉亦美味なり。

あぢさゐ(紫陽花) 植莖の中央に髓あり、葉は缺刻ありて大なり、複花頭にして、青白色の花を開きて美なり、觀賞に供せらる。

あづき(小豆)Phaseolus mungo 植豆科の一年生草本なり。虫媒花にして、淡黃色の花を開く、子粒は、飯に混し、餡を製す。

あつしUlmus montana 植桑科植物にして、纖維に富む、あつしと稱する織布はこれより製するものなり、アイヌ人常衣とす。

あとしざり（悪蟲）Chelifer 動蜘蛛類にして体軀扁平なり、腹は十一環節より成り、諸肢の狀況蠍類に類似すと雖、氣管を以て呼吸し尾端には紡績線あり。書箱、反古等の間にあり、他の小蟲を捕餐するを以て、益あり。

あなぐま（貉）Meles 動狸大の食肉類にして、体肥大なり、脚は短く、前肢には穿掘爪を具へ、淡黄色の長毛密生し、尾は短し。冬季及び、晝間は穴中に眠り、夜間出でゝ、果實、草根、蟲虫、鳥虫其他禽獸を捕食す。歐羅巴、北部亞細亞及び我國にも産す。肉は食用とし、毛皮用に供すに足る。

あなご（海鰻）Congaanuraena 動鯱鰻類にして、形鰻に酷似す、体長は一尺五寸以上に及ぶものあり、口は大にして、眼邊に及び鰓は紫挑なる鰓刺を以て支持し、背鰭は鰓孔の上或は直後に起る、體色は黑色なり、近海の泥底に住む、味美富せらる。

あなはなす（鳳梨）Ananas Sativus Sinal 顯鳳梨科植物にして熱帶に産す。果實は毬果の如く多漿なり、味酸味を帶びて甘し。葉の纖維よりは、織物、繩を製す。

あは（粟）Setaria Italica Kanth 顯禾本科草本にして、葉狹長、花は複穗狀の花序に排列し、果實は穎果なり、種子は粘力に富み、餅、菓子を製す。

あはうどり（信天翁）Diomedes 動水禽類中の長翼類なり、海鳥にして、太平洋に産す。嘴は長く、先端鈎狀を為す。全体白色なりと雖翼は黑色なり、尾は短し、翼は幅狹くして、甚だ長く一丈五尺に達するものあり、飛翔力強大にして又極めて巧なり、性怯懦にして、他物の攻擊を受くれば抵抗することなくにして、直に海に逃る。洋上の島上此の鳥を以て敵はるゝ所あり。介魚及び海中の小動物を食餌とす、羽毛は裝飾し密毛は褥用とし共に價

貴し、肉は殆んど食用に適せず。

あはび（石決明）Haliotis gigantea, Chem 動腹足類にして、介殼は不規則卵形をなし、中央に少しく突起す、外面の後方に不規則の渦卷狀線條あり、一側には塊狀の腫起ありて、殼端に至るに隨ひて低し。殼には内外を貫通する呼水孔四五個あり、殼の外面は褐色、又は蒼裝色を帶び、内面は真珠色にして光澤あり。海底岩石に付着し、大き幅五寸長六寸に達するものあり。海藻を常食とす。伊勢、伊豆、相模、安房、上總の産を第一とし、東海道沿岸潮流良好の所に産す。あだか、めかい、くろ、の三種ありて各殼形、肉色を異にし、生食、煮食、干乾にも各適否あり。

あひる（鴨）Anas Boschas, Linn 動水禽類にして鴨の人爲的變種によりて、現生したるものなりといふ。羽色は種々あり、嘴は淡黄色にして、扁平なり、齒は嘴の外緣に凸凹するもの

これなり。脚は後方の位置に偏在して短く、歩行緩漫なり、趾には蹼ありて游泳に適す。この禽は卵を自から孵化せしむることをなさず。肉は脂肪に富み、卵は雞卵より大なれども共に味雞肉、雞卵に及はず。

あぶ（虻）Tabanus 動雙翅類なり。頭は球狀にして、觸角大なり、また大なる複眼を具へ胸は三環節相固着し、口器は剌螫に適し、翅は前翅一對あるのみ、翅は膜狀にして透明なり。腹部は七節より成り、長大にして短毛を生ず、脚は三對を有す。幼虫より完全なる變態をなす。人畜の血を吸取するものにして、種類極めて多し。

あふむ（鸚鵡）Psittaci 動攀木類にして、毛色は純白なり、頭圓し、嘴は紅色を帶ひ、美なり、上嘴は短大にして釣曲す、頭骨と相接緩するを以て、能く動く、下嘴は短小なり、舌は肉質にして肥厚す、これを以て人語を摸し

得るなり。足は鰭緣に巧にしてまた物を捉收するに適せり。果實若くは穀類を食とし、樹洞或は巖洞に巢を作す。專ら亞米利加及び濠洲に產し、其種類頗る多し、これを籠中に飼養して愛玩す。

あぶりかれいべう(亞弗利加 猫) V. civetta 鼬亞弗利加並に歐羅巴の南部に產する動物にして、狐より大なり。喉部には褐色の三角形の斑點を有し、背部より尾頭まで鬣を具ふ、尾は長毛を生じ、其色黑にして白色の斑紋あり。埃及、アビシニヤ等にては家畜として飼養す、この獸より靈猫膠なるものを採り、種々の用に供す。

あま(亞麻) Linum usitatissimum 鼬亞麻科一年生草本なり。葉は披針狀をなし、花は紫碧色、萼片、花瓣共に五片にて、雄蕊も亦五個ありて春時開花す、かつ子房五室より成るものとす。この纖維より布を織るは遠く希臘時代より始まり、其種子よりは藥用、工業用の油を製す。

あまがへる(雨蛤) Hylarlorea, s. 鼬兩棲類中の蟇類類なり。體長七八分にして、體色背は綠色、腹は白色、指趾の末端に圓形の吸盤を具へ、巧に樹木に攀緣す。鳴囊は左右の兩囊中央に於て相接す、先づ鳴かんとするや、囊中空氣の共鳴により音聲を大にせんがために、空氣を囊中に充滿せしめて後聲く、これ琴、三味線の洞內の空氣が振動して共音を發すると一理なり。かつ此の蛙の鳴聲にて降雨を豫知するといふは、蛙が空中の濕氣を感じて鳴聲するを以なり。

あまくさ(甘草) Glycyrrhiza glabla S 鼬豆科の草本なり、葉は羽狀をなし、複葉なり、花は淡紫色を帶ぶ、莖及び根は甘味に富む、所謂カンゾこれなり、多く藥用とす。

あまも(大藻) Jostera Marina S. 鼬眼子菜科

植物にして水媒花なり、莖根より砂糖を製す。

あみいば Amaeba 鼬單細胞より成る下等動物にして、体軀極めて微小、顯微鏡を用ひて始めて之を見ることを得。体は主に蛋白質より成り、かつ內外二層に分る、外層は無色澄明にして收縮性を有す、內層は顆粒に富み外層に比し、一層流動性なり。かつ一個の球狀核及び數個の空胞を藏す。空胞の一は著大にして、時々收縮す、其內容は体質中に生ずる排泄液にして、一縮毎に、これを体外に壓出す、其体質は、位置を定めずして、任意に指狀の假足を伸縮、變形す。かつ徐々に匍匐し、食餌となすべき、微小の有機物に觸れば假足を出して移動せしめ、內層中に埋沒して消化す不消化部分は、その体面の何所何部分を問はず排出することを得。分化極めて低く機關と稱すものなく、消化、循環、排泄、神經は一般全体面の營る所なり。生殖は、單一の体法にして、核は先づ二分し、尋て体質に緊縮を生じ、終に縊斷して各一核を有せる二個体となる。靜止せる淡水中の草木、塵芥に付著す。

あむひすべな Amphisbaena 鼬蜥蜴類にして無脚蛇形なり。頭上及び喉部の外は無鱗なりと雖、体面に溝線を有し、舌は短小なり。地中に棲息す、水邦に產なしと雖、歐洲及び南米に產す。

あめ(雨) Rain 鼬昇騰せる水蒸氣は、冷氣に觸れ、凝結して細微なる水滴となり、集りて雲を爲す。漸次集りて滴粒をなすに及びて、空氣中に浮游する能はず。これが落下せるもの即ち雨なり。

あめはんめう(葛上亭長) Cpicauta gorhami 鼬鞘翅類に屬し、暗黑色にして、体長十五乃至十八密迷位、腹は五節より成り鞘翅は白色の

縱線を表はし、頭部は赤褐色にして、鰓に類似す。大豆の莢を食す、本邦にては、多く上總に產す。

あめりかだてう(亞米利加駝鳥)Rhea 鳥走禽類にして製極めて小形にして飛翔せず、走脚極めて長大なり。頸亦長し、腰帶の下部は左右相會合して以て走脚の基礎を堅固ならしむ。駝鳥と異る所は、三個の趾よりなると、其羽毛の灰褐色にして、南米に產するとにあり。

あやめIris Sibirica var Orientalis Thumb 圖蒸尾科多年生草本にして、水邊に生ず、葉は細長、かつ先端尖りて中助なし。特徵とするものは、外圍の花蓋の基部に斑紋あるにあり花狀奇異にして美麗なるを以て、栽培して觀玩す。

あゆ(鮎)Plecoglossus 魚喉類中の有腹鰭類にして、性敏捷急湍を快泳す。川河に孵化し、漸く長して一寸五六分に至れば、海中に下る、次年三四月頃二寸以上に成長して川流を上り、八月頃には五六寸に達し、淺瀨の岩礫中に產卵す。細鱗を有し、鰭は雄大なり、背色は黃、腹色は白なり、川底と色別する能はず、これ自衛のための自然淘汰の結果なりとす。食餌は水中の細虫及び藻類を食ふ、本邦に於ては大抵產せざる所なし、岐阜長良川、武藏球磨川及び山城桂川の諸川有名なり、肉は固有の香氣ありて美味なり。

あふりかだてう(亞弗利加蛇鳥) 駝鳥を見よ

あらびやとむ(亞剌比亞護謨)Gum-arabic 圖熱帶に產する、豆科植物の液汁より製したるものにして、普通固塊を成す、粘着に富み、物を付着せしむるに効あり。美術、工業、藥用に用ゐる。

あられ(霰)Hail 圖降下しつゝある雨が零度以下の冷氣に遇ひ、急劇に氷結したるものなり。

あり(蟻)Formica Myrmica 鳥膜翅類にして、巨萬群棲して、一種の社會を成し、巢は地中或は材木に營む。その一社會中雌雄蟻及び職蟻の別をなし、その職掌を分擔す。職蟻はその數多くして、幼虫を保護し、食物を運搬しまたは巢を造營するを主として職蟻の掌る所なり。稀には、頭大なる職蟻ありて、攻擊、防禦を司り、或は幼虫を捕獲し來り、成長せしめて奴隸に使役す。或はアリマキと稱する虫を保護飼養して、その分泌する甘液を取る等の奇性あり。職蟻は生殖器發達せず、終身勤勞を事とし無翅なり冬月巢中に眠息し越年す雌も亦職蟻と共に越年し、春產卵す。幼虫は俵狀の繭を被りて、蛹に變じ、終に職蟻或は有翅の雌雄に發生す。その雌雄は飛翔して、空中に於て交尾し、已にして雄は忽ち死し雌は地上に下り翅を失ひ、他の職蟻に誘はれて舊巢に歸り、或は新社會を組織す。食餌は甲蟲又は鱗類にして、巢中に貯へ冬日籠居の糧に供す。

ありくひ(食蟻) Myrmecophagus 鳥哺乳動物中の貧齒類なり。口吻は圓管狀をなして、齒なし、舌は圓長にして、長く口外に出すを得常に粘液を貯へ、群蟻を誘て食ふ。前肢には穿掘爪ありて、後肢は全蹠を以て地を踏み、體長六尺ありて性は愚鈍なり。口及び耳小なるものにて、滿身に長き茸毛を被る南米の產なり。

ありしよくぶつ(蟻植物) 圖植物體の、花、葉に甘味を分泌し、蟻を呼誘し、他蟲は蟻を恐れて、その植物體に接近せず、以てその蠹食の害を、免るゝものをいふ。山櫻等なり。

ありすひ Lynx 鳥啄木鳥類の鳥類なり。

あるこほるはつかう(酒精醗酵)Alcohol Fermentation 圖糖分をアルコホル及び、炭酸瓦斯琥珀酸、グリセリン質に變化せしむる釀母菌

の作用をいふ。

あるまじろ(狀絲) Dasypus tricinctus 動貧齒類に屬するも、小圓管形をなして上下に交互せる齒を有す。體長五寸乃至一尺三四寸あり。体は肩甲、腰甲及びその中間に位し、互に運動し得べき數多の環甲を被る、頭及び尾にも甲を被むるものあり、その形鎧を着たる如し、これ自衛防禦の具なり。かつ、体を前方に屈し頭足を縮入せることを得、殆んど龜の如し。前肢には尖端曲れる穿掘爪を供へ、穴を掘りて、その内に棲息す、舌は尖銳にして伸出することを得、耳廓大なり。その性溫順にして、夜間出て、蟻、白蟻を捕へ食す、南米に產し、肉は味美なり。

あるみにうむ(アルミニウム) Aluminium 鑛銀白色の光澤强し延性、伸性を具へ比重二、五八、赤熱に遇へば、溶解するも、蒸發せず、空中に熱するときは、僅に變化を來す、その

澱片を、酸素瓦斯中に熱れば、鮮光を放ちて燃燒す、硝酸に作用せられず、種々の器具に製し、俗にアルミさいふはアルミニウムと銅の合金なり。

あゐ(藍) Indigo。 圖蔓科植物にして草本なり。莖は結節を有し、葉は互生、花は小しく瓣狀なり。貴重なる染料にして、多く織布用の糸を染む、本邦にては、阿波の產を上とす。

あをきり 梧桐) Sterculia Platanifolia 圖梧桐科の落葉喬木なり。幹皮は全體に青色にして紫火なり。支那、朝鮮、本邦に產し。皮の纖維は白色にして、强張なり、繩を製す、多く遊園に培植せらる。

あをだいしやう(黃領蛇) Elaphis Virgatus Schl. 動爬虫類中の濶口類なり。體長四尺に達す。齒は皆同大同形にして鋸齒なし、背には班紋あり。

あをもりとどまつ(青森樅) Abies Mariesii. M

ast 圖松杉科植物にして、丈け十五間位、高山に生し純木を交へずして林を成す。青森八甲田山に產するを以て稱あり、用材に供す。

あんくいす Anguis 動爬虫類にして、舌短く、かつ厚し、末端は多少叉裂す、また體に鱗を被り、四肢を缺きその狀蛇に似たり、歐洲に產す。

あんこう(華膊魚) Lophius 動硬鰭類に屬する海魚なり。頭大にして、体は裸皮を被り扁平なり、殆んど杓子の如し。口は大にして、鼻と共に上向す、細微なる齒は、美麗に排列せらる、肉は美味なり。

あんさいがん(安山岩) Andesite 圖安山岩は富士岩とも稱す。灰色或は褐色に黑色短柱形の結晶と白色のやゝ、四角狀結晶体とを散點す、黑きは輝石にして白きは斜長石なり、二者を石基といふ。緻密なる結晶の集結したるものなり、輝石に代り、雲母、または角閃石

を含むものと、これを合せて含むあり。皆火山より噴出するものなり。建築用材とす。その含有する鑛物により、名稱を異す。角閃安山岩、雲母安山岩、石英安山岩、輝石安山岩にして、後者は我國にて普通見るものなり。

あんちもにー(安質世尼) Antimony 鑛六方晶系の半面像にして、粒狀または塊狀にて、顯る、色は錫白色にして、性脆し、硬度は三、〇乃至三、五、比重は六、六乃至六、七五なり。燒くときは、無臭の濃煙を發散す、天然に產するもの少なく、大抵輝安鑛より採る、輝安鑛はアンモニイ及び礦黃とを含み、色鉛に似る空氣中に放置すれば、次第に光澤を失ふ、質軟く、かつ碎け易し、柱狀の結晶をなし細き堅條ありて條目より割り易し。輝安鑛はポゝミヤ及び端典等に產すと雖、本邦伊豫新居郡市の川のものは、世界中稀なる大結晶をなす。精製して、たの金屬と合金せば性を

堅くし、光澤を美ならしむ。染料に供し、鉛と合金として、印刷用の活字に用ひ、錫と合金して、食器を作る。

あんもにやはつかう(アンモニヤ酵) 圖尿素をアンモニヤ及び炭酸瓦斯に變ぜしむる酵作用なり

い

いうかちゐいしよくぶつ(有機体植物 Coromophyte 圖眞に、莖、葉、根を區別し得べき、植物をいふ。

いうきくわちぶつ(有機鑛物) Organic Minerals 圖地球構成して、空氣清透となり、氣候亦温和となるに及びて、地球上に種々の生物を生じ、その遺体或所に、堆積して、遂に、鑛物に化生したるものをいふ、金剛石、石墨

石炭、石油、琥珀等これなり。

いうくわ(雄花) Staminate Flower 圖雄花のみを有する花をいふ。

いうくわんるゐ(有環類) Annulata 動蜥蜴類の一亞目なり。この類に屬するものは、無脚蛇形にして、頭上及び喉部の外は無鱗なりと雖体面は横行及び縱行の溝線を有し、舌は短し歐洲及び南米に產するアムヒスナベはこの類なり。

いうきうるゐ(有爪類) Onychophora 動節足動物の一類なり。体軀延長、蠕蟲狀にして、頭及び軀幹の二部より成る。頭は觸角、單眼、顎等各、一對を具ふ。軀幹は數多の環節相聯接して成り、環節毎に一對の疣狀脚を具へ、毎脚その末端に二約爪を生ず。氣管系あり以て吸呼す。胎生なり。本綱目には唯ペリパートスの一屬あるのみにして、濕地に棲息し、これを南米、喜望峯、西印度、新和蘭に發見さ

れたることあり。

いうしようれつぱい(優勝劣敗) 動植生物界に於ける、生存競爭の事なり。生存に適合せるものは、繁榮し、然らざるものは、範圍を縮められ、遂には枯死するものなり。

いうすゐるゐ(游水類) Cetacea 動海洋中に棲息する魚形の哺乳類にして、概れ巨大なり。皮膚は裸出し、前肢鰭狀をなし、皆後肢を闕く、尾は水平に擴張し一種の尾鰭を形成せり耳は外數なく、眼は小形にして鼻孔は頭上に開く、これを噴潮孔と名く、齒は全く闕如し或はこれあるも皆同形同大にして、大抵脫更することなし。動物質若くは植物質を食す、性群居を好む、海豚、鯨の類なり。

いうせい(遊星) Planet 圖星の位置常に變じ日光を受けて、光るものを遊星といふ。すべて太陽の周圍を同一の方向に周行するものなり、我地球の如きも、亦その一にして、太陽に近

き、水星より始まり次第に遠かりては金星、地球、火星及び二百五十餘個の小星、木星、土星、天王星、海王星等なり。

いうせいせだい(有生世代) 圖一定の時期に達するときは、雌雄の兩性器を生し、卵子を生する等、の時代をいふ。

いうたいるゐ(有袋類) Marsupialia 動体制上一穴類と、有胎盤哺乳類との中間に位するものにして、顎に眞正の齒を生じ、鎖骨及び烏喙骨の形狀は高等哺乳類と同一にして牝は長形の乳房を有す。体軀の狀形は食肉類、或は食蟲類に類似し、また齧齒類、若くは有蹄類に似るものあり。その習性、齒列等も種々ありて、一括して名狀すべきなしと雖、要するにこの類屬は、皆二袋骨を有し、牝は必ず、育兒の爲に皮囊を具ふ。胎兒は胎盤を闕き、母体内にありて、營養を受くること能はず。故に頗る微弱の有様にて產出し、直に育囊に入

り、乳房を含みて、成長す。現世界にこの類を產する地は濠洲、南洋諸島、並に南北米の溫暖地方なり。袋鼠族、更格盧族等これに屬す。

いうているゐ(有蹄類) Ungulata 動哺乳動物中の一類にして、これを奇蹄類、偶蹄類に區別す。(各項參照)

いうどくるゐ(有毒類) 動蛇類の內區にして、上顎には、通常齒を有せずして、毒腺を有す毒牙は居常鞘中に收むるも、一時怒るときは直にこれを裸出す、その根底には、毒線ありて、毒液を分泌す。頗屬さの類多くして、草間に潛伏するもの、或は樹上に蟠蟄するものあり。水邦の產にしては、蝮蛇、飯匙倩等これに屬す。

いうはいるゐ(有肺類) Dipnoi 動鰓狀の魚類にして、覆瓦狀の鱗を被り偶鰭は糸狀或は樹葉狀を爲し、骨骼は不完全に化骨す。鰓は鰓蓋を以て蔽ひ、鰓は食道と交通し、その作用を變じて肺と成す。その類は卽ち二樣の呼吸法を營むものにして、雨季節には、鰓を以て水を呼吸し、乾燥季節には、土中に埋沒し肺を以て空氣を呼吸す。その肺の存すると共に鼻腔は口腔と、開通し。心臟もまた複雜の構造に成り体制一般に兩棲に近似す、四種あり、パラムンダ、プロトプテス等これに屬す。

いうげんくわじよ(有限花序) Definiteinflorescence 圓花軸の上部より 花咲き初め、次第に下方に及ぼし、または、內部の花咲き初め、外部に向ひて、及ぼすものをいふ、左に區別す。

- 有限花序
  - 無柄
    - 輪繖花 例ツタ
    - 圓繖花 例ホトケノザ
    - 岐繖花 例ハコベ
  - 有柄
    - 卷繖花 例タビラコ
    - 密繖花 例ニレ

いうげんねくわんちく(有限維管束) Definite Bundle 圓單子葉植物の維管束をいふ、靱皮、木質部間に、形成層(新成層)なく、維管束は或度まで、發達せる後は、以上の、增大を見す。

いうこうぢうちう(有鉤條蟲) Taenia mesipcum. ellata Kiichm 動扁蟲類に屬する、蠕形動物にして、人腸に生する、一種なり、大さ、無鉤條蟲に、劣らず、頭は、四個の吸盤の外に、なほ、許多の、鉤を有す、この種の幼蟲は豚肉にあり、本邦にては、甚だ稀に、存在す。

いうせいせいしよく(有性生殖) 動雌雄の兩生殖物相合し、或は、また單に、雌性生殖物により、新個体を發生せしむるものをいふ、これを、雌雄生殖、單爲生殖にわかつ。

いうびるゐ(有尾類) Urodela 動必ず尾を有する、兩棲類にして、その尾は縱扁なり。体は長くして、皮膚は裸出し、時々表皮を脫換することあり。概れ四脚ありて、その頸を永存すると、然らざるとあり。水中に栖息し、時々水邊を匍匐するものと、山間落葉の間に棲息し、水に入らざるものあり。魚形類卽ち鯢魚等、蠑螈類卽ち蠑螈等これなり。

いうふくきるゐ(有腹鰭類) Abdominales 動喉鰭類中の魚類にして、特徵は腹鰭を胸鰭よりも、後方に具ふ、鰮魚、鮭、鯉、泥鰌、鮗魚等普通なるものなり。

いうへいやう(有柄葉) Stalked leaf 圓葉と莖との間に多少の柄條ある葉をいふ。

いか(烏賊) Decakoda 動軟体動物の頭足類にして体は稍、扁き圓柱形をなし。頭部及び軀幹判然に區劃す。頭の兩側に大なる眼ありてよく發達し、前端に於ける口の周圍に十本の長觸脚を環生す、內二本は長し。脚には、豬口狀の吸盤を具ふ。觸脚を以て能く游泳しかつ伸縮して、食物を捕ふ、腹面の頭と軀幹

の間に、一個の管ありこれを漏斗といふ。呼吸の際に、外套門を入りたる水は鰓を以てこの入口を閉ぢ、漏斗より噴出せしめ、体は爲に後方に進行す。尾端に一對の鰭を有し、游泳を助く、かつ、イカノカウと稱する、長形にして小舟に似たる殼を、背部の体壁中に藏す皮膚は色素を包める無數の小胞を藏し有生の間は小胞の變形により時々變色して自衛保護す。口は球狀の咽頭に通す。これその中に上下の兩顎、並に齒舌を藏す。兩顎は俗にカラストンビと稱するものこれなり。黑汁藏と名くる一種の腺を肛門に接して開き、敵襲を蒙むるときは、漏斗より厚暗濃黑の汁泌液を噴出し、周圍を晦しその害を避くる一種の保護裝置なり。アセビと稱する繪具は、該黑汁より製す、スルメイカ、ヤリイカ、マイカ、等ありて乾腦、煮、生食せらる。

いがひ(貽貝) Mytilus 圖軟體動物の瓣類に屬する貝にして、介殼は三角形狀をなし、外面淡黑、內面眞珠色なり。水管は短し、足絲を以して、夥しく海中岩石に付着し、運行することなし。佛國にては、人工飼殖するといふ、肉美味にして食すべし。

いくわじゆせい(異花受粉) Allogamy 圖他花の、花粉を受け、胚球成熟するをいふ。

いし(石) Stone 圖普常石と稱するものは、岩石の破碎して、塊片となりたる鑛物なり、流水の運搬に用を受けざるなり。

いしがめ(水龜) Clemmys 圖龜鼈類に屬し、最普通なるものなり、その背甲、十三枚の小甲より成り、尾短かきも、能く歩行すかつ爪長し、多く水邦の池河等に產し、魚、虫、水草を食す。

いしばひのせいはふ(石灰の製法) 圖石灰を製造するには、多く石灰岩または介殼等を燒く、窯に谷燒、七厘燒等の別あり。谷燒は土地の

凹みたる場所を擇び、石片を積み、粘土の長き屋壁を以て圍み、下方より薪を燒き、烟は石間を通して上方の窓より出す法なり。七厘燒は崖の頂に圓穴を穿ち、穴底は崖の下部に開かしむ、これに石片、無烟炭を相互に積み下部より熱す。然るときは白色の粉、塊を得なほこれを永く空氣中に曝して粉末とし始めて石灰を得べし。

いしわた(石綿) Chrysotile 圖蛇紋石の割目に白、淡綠、褐色にして綿の如く、柔なるものあり、一種の纖維をなし、一々分ち易し、これ石綿なり。また石絨と稱す。絹糸光を帶びて屈曲すべし、蛇紋石の分解より成りたるものなり。耐火力大なるを以て、防火布に織込み蒸氣罐に用ひ火熱を防ぎ、活字製造の用に供する等、瞬用廣し。肥前、肥後、磐城に產す

いすか(交喙) Loxia 圖燕雀類の鳥類なり。頭脊背赤色にして、腹赤紫色なり、脚色は黑し嘴は上下相齟齬す、即ち下嘴は、右に反旋して、上嘴は、左に鈎曲し、交叉十字形をなす埋沒せる、樹木の種子を堀りて棲み、食するに適す。人世萬事齟齬するの意を交喙の嘴といふは、これに拠すく。

いせえび(龍蝦) Palinurus JaPonicus Gray 圖甲殼類中の十脚類にして、世人の能く見る所のものなり。體長一尺四五寸、蝦類の大なるものなり。蝦茶色の環節甲を被り、頭は一甲より成り多數棘を生す、大小二對の觸角を具へ大觸は甚だ長くして、著點に近く環節あり、また棘を生す、四方に回轉して、觸覺を司る、小觸角は大觸角の內側より生じ、先端にて二分し、一方には纖毛を生じ、嗅覺を司る、眼は頭尖甲突起の下にありて、柄あり常に回轉す、また小觸角の根著部に、多數の纖毛とかつ、砂を容れたる孔あり、砂の動搖によりて、纖毛に感じて、聽覺の用をなす、口

の周邊に三對の頭脚ありて、食餌を口に送るときは口には大なる頭ありて、食物を粉碎す、水を口側の裂孔より送り、頭に酸素を供す、腹部は六個の關節より成る、備朔するに、毛を有する、五對の脚あり、胸甲側より生す、腹部關節の間よりも撓脚を生じ、游泳中動かし、運動を助く、体の末端に三片の軟甲の如き鰭ありて肛門はその下部に開く、急激に運動せんとするときは、腹部を折り、再び直平する反動により後背に飛ぶ、海底水清なる所に栖す、多く東海の沿岸近海に產す。

いそぎんちやく(英名 Anemone and. Actinia) 動腔腸動物の多放線珊瑚虫類なり。海濱の岩石上に付着せるものにして圓筒形をなし底部少し大なり、上部は平たくして、中央に向ひ皺をなし、端の口を占めたるが如し、單体にして、骨骼なく、口も肛門も同穴にて用を爲す、口の周圍より多數の觸手を出し、食餌を捕へ口に送る、体色綠色のものと朱色なるものとあり、繁殖法は芽生または分裂なり。

いそまつ(磯松) 圓海岸に產す、葉は托葉にして、種子は胚乳なし、栽培植物として、愛せらる。

いたち(鼬鼠) Mustela Itasi, Tem 動食肉類なり、毛色黃、頭部比較的小なり、体細長、四肢亦倭小なり、性頑固にして、人に馴れず、極めて敏捷なり、嗅官も聽官ともによく發達す、この獸は肛門の下に一線ありて、敵襲に遇へば、その線より惡臭ある液を分泌して、敵を近けず、天井、床下または溝に栖み、多く夜間出て〻動物を捕へ、血を吸ひ、肉を食す、毛質柔軟、毛皮はその品質佳良なり、海道に產するものは、冬時中白色に變色す。

いたとり(虎杖) Polygonum Cuspidatum Sei Z 圓蓼科にして、葉は黑綠色を帶び、蓼葉ともに煙草に似、嫩葉を食用とすべし。

いたやがひ(牛邊蛸) Pecten Yessoensis, Jay. 動軟体動物にして二枚貝なり、習性、形体ホタテガヒに類して小形なり、体を砂中に埋め、夜間遲緩なる運動をなす、介殼は杓子に用ひ、肉は食す。

いちりゐゐ(異柱類) Heteromya 動双柱類の一種にして、前柱は後柱に比して、その形甚少さく、足も亦小なり、足絲を有し、稀に水管を供ふるものあり、貽貝、玉蟲等これに屬す。

いちげづゐゐ(一穴類) Monoeremati 動哺乳動物なり、この類は体制上蹠に、生殖法に於て、鳥類若くは、爬虫類に近似するものにして、排泄腔あり、即ち、泌尿、生殖器は共に、肛門内に開口するなり、鎖骨及び鳥嘴骨は、能く發達す、これ鳥類に似る所なり、かつ口吻延長して嘴狀をなし、眞正の齒は全く闕如せり、眼は小形にして、瞬膜あり、耳に外殼を具へず、四肢短く、指趾五ありて、銳爪を具有し、以て地を穿つに適す牝牡共に袋骨を有し卵生なり、乳線は乳房を爲さずして、直に皮面に開在す。濠洲及びその近島に產し、たゞ、鴨嘴獸、ハリモグラの二屬あるのみ。

いちゐんとん(一年根) Annual root, 圓一年生植物の根をいふ。

いちゐんせいしよくぶつ(一年生植物) 圓種子萌發し、成長發育して、花を開き、實を結び、後終に枯死する間の生活一年を越へざる植物なり、多くの草本は一年生植物なり。

いちはつ(鳶尾) Iris tectorum, maxim 圓鳶尾科植物にして、東北地方にては、多くこれを屋根葺に植へ、大風の茅屋を破るを防ぐ、葉は淡綠色にして針狀をなす。

いちゐ(櫟) Taxus cuspidata, S.et z. 圓公孫樹科に屬す、葉は短小なり、樹は赤褐色にして、高山に混生す飛彈國位山に產する上とし。木曾山にも生す、建築用材に適し、多く器具を

製す、笏を製するものは即ちこの材なり。

いてふ(銀杏) Gingo biloba 圖銀杏科植物なり 葉は扇形をなし、葉柄長し、花は單性なり、雄花は穗狀をなし、柄短し、かつ二個の花粉囊を具へ、受精の際は二個の精蟲を生ず、雌雄異株なり精蟲の發見は近時平瀨作五郎氏のなせる所にして、爲に併て、銀杏の名海外に高し。

いなご(蝗虫) Mecostethus 動昆虫類の直翅類に屬し、口器は嚙咬に適し、絲狀の觸角を有す、後肢は長くして、飛躍に適す、土中に產卵して、次夏發生す常に稻に栖し害を爲すと雖、稻と同色にて色別する能はず、これ保護同化の一例なり、炙りて食する地方ありさいふ。變態不完全なり。

いなむし(蝗) Oedikoda 動直翅類にして、体形イナゴに類似す、亦觸角絲狀にして、跳脚を有す。

いぬ(犬) Canis familiaris, S. 圖食肉類なり。家畜にして、性快濶にして、能く馴る、毛色も種々ありて、体長亦一ならず口吻は突出し、鉤爪鈍くして、出入せず、かつ走行に響を發す、嗅感非常强し、その種類によりて毛色、体長 習性 効用等を異にし、玩犬、番犬、獵犬、軍用犬等あり、皆主命を守り、忠實なり、皮は大皮三味線の胴を張るに用ゐる。

いぬがらし(蕓薹) Nasturtium montanum. Wall. 圖十字科の草本なり、花は小にして、黃色なり、山野に漫生し、春時開花す。

いぬつげ Ilex crenata Thunf. 圖冬青科にして濕木なり 枝茂く葉圓し、山地に維木す、水邦の特產なり。

いぬまき(槇) Podocarpus macrophylla, D Don 圖公孫樹科にして、互生葉なり、先端尖れり、葉裏は青白色なり、材は水に强し、小道具を作る。

いね(稻) Oryza sativa S 圖禾本科にして、その種々品種多くして枚擧すべからず、その重なるものは白玉、九洲中國に產し、都、山口縣に、關取、細粒にして美味鮨米と稱するものなり伊勢、尾張、美濃に產す、神力、分殖力非常に盛なり、白石及び大和錦も良品なり。糯米等あり、四月頃種子を蒔き、六月苗の植替をなし、十一月頃收獲す。

莖は圓形にして中空なれども、硅酸を含めるを以て、質硬し、高き結節あり、果實は穎米なり、葉は細長にして、並行線を有す、互生なり、水田、陸田に栽殖す、數多の花蕊より成り、左右二枚の穎を有し、花はこれに包まる、蕊は二ありて、六個の雄蕊は雌蕊の周圍にあり、雌蕊は圓き子房と毛とを具ふる二個の柱頭を有す、生殖は風媒による、米は東洋人の常食品にて、一日も缺くべからざるものなり、その他菓子、餅を造し、酒造の原料とし、藁は製紙の原料、帽子または種々の細工に用ひ、莚、繩に製す、モミガラよりは染料を製すべし。

いねとうじ 圖一種の害蟲にして稻の一穗中に二乃至三を有す、深黃綠色にして、その胞子は飛散し、苗の成長と共に發育して、稻の穀粒中へ浸入す。

いはたけ(石耳) Gyrophora nalla Ach 地衣類にして、岩石に付着す、食すべし。

いちるみ Picea Ibicolor waye 圖松杉科に屬す、小枝は赤褐色を帶び、樹皮は灰褐色にして、鱗中形の小紋あり、日光山、富士山に產す。

いるか(海豚) Delphinus 圖游水哺乳動類にして、頭は小なり口吻嘴狀をなして突出す、背部は黑色にして、齒は上下共に五十六枚を具へ小にして、圓錐形をなし、頭部の上に、一の噴水孔を開く、背鰭、胸鰭、腹鰭あり、背鰭は半月形をなし背の中央にあり、尾鰭は水

平に扁く、性群居を好み活潑なり、魚類、軟體類を食ひ、常に貪婪するものなり。

いろ(色) Colour 鑛光線が鑛物中に入るときはその一部分鑛物中に吸取され爲に鑛物に種々なる色を顯す、これを金屬色と非金屬色とに大別す

非金屬色は雪白、乳白、草綠、藍青、酒黃、燈黃、肉紅、血紅なり

金屬色は銅赤、銀白、鐵黑、鉛黑なり

いわし(鰮) Clupea melanosticta schleg 喉鰾類に屬する魚類なり、長さ六寸位の小魚にして、鱗薄く脫離し易し、背は青色にして、腹部は白色光澤あり、常に群を爲して、沖海を游泳し、一群鯨に一呑し終らるゝことあり、到る所の海中に產するも、九十九里濱の產有名なり、食用、肥料とす、

いんくわしよくぶつ(隱花植物) Cryptogamia 圖無性生殖をなすものにて、芽胞によりて、蕃殖するものなり、花を有せず、變形菌類、苔蘚植物、菌類植物に分つ。

いんこ(鸚哥) Parrot 鳴鳥類にして、鸚鵡に酷似するところあり、羽色美麗にして、上嘴は鉤曲し、頭骨可動的なり、第一趾は、第四趾と共に第三四趾と相對し、物を握取するに適す、中央亞米利加に產し、飼養せらる。

いんとろ(咽頭 Pharynx 圖口の奥にして、鼻腔、口腔、氣管、食道に通するのみならず、耳の內部にも連絡し、空氣、食物も共に通行する公道なり、鼻より來る、空氣は前なる氣管に入り、口より來る食物は後なる食道に入り、二者の通路は咽頭內にて交叉す、食道も氣管も、常に入口を閉ぢ、他物を侵入せしむるなし、而してその下方は喉頭と連る

いんどれいべう(印度鼠猫) 鳴食肉類なり、他の鼠猫に比して、体格小、毛色は黃灰白色を帶び、尾は体と同長なり、尾根に毛を生せず

印度及びさの諸島に產し、小禽、小獸若くは果實を食す、靈猫膠を產す。

う

う(鵜) Phalacrocorax 鳴膜足類にして、全体黑色なり、上嘴は尖端銳にして鉤曲し、翼亦長からず、脚は短くして、趾は悉趾內方に向ひ、他の三趾と共に蹼を以て、相連絡す、この鳥は水中に入り魚類を捕ふること巧なるを以てこれを飼養して、魚獵す。

うがいとつ(烏喉骨) Coracoid bone 鳴鳥喉骨は人体にありては、肩胛骨の一突起に過ぎざるも、鳥類または爬虫類にありては上膊骨の基部より、胸骨の上部に連り、頗る重大の骨なり、これ飛翔力を强 ならしむる爲に、鳥類に於て能く發達せるなり、これ卽ち翼筋は、胸骨より上膊骨の基部に向ひて連絡するものなれば、烏喉骨が其兩骨を堅牢に位置せしむるの必要より生ずるなり。

うきぶくろ(浮袋) Air bladder 鳴魚類体腔中に、具ふる、運動器にして、背部にある、空氣囊なり、魚類が、沈まんとするときは、體を收縮し体の比重を增加し、浮ばんとするときは反對の方法をなす。

うぐひす(鶯) Cettia 鳴燕雀類に屬する小鳥なり、背色蒼黃色、腹部淡蒼色なり、嘴、短小、初春梅花開く節、山家に近き林中に來り、優美なる囀聲を發す、秋季に至れば鳴聲を發することなく、山中に入る、鳴禽として飼養せられ、優等なるものは價貴し。

うさぎ(兎) 鳴齧齒類に屬する哺乳動物にして飼兎L. Cuniculus, L. 野兎、Lepus brachyurus Temm, の二種あり、野兎は茶色、飼兎は白色なり、その產地と氣候とにより一定せず、

一般に耳長くして頭部の上に出づ齒は上下に共に門齒各二個づゝを具へみなその前面のみ琺瑯質を被る、遊離緣は鋭綫を呈して、鑿の如し、上顎二両齒の直後に更に小形の二齒あり、眼は突出し、尾短し後肢は前肢より甚だ長く峻坂を登走するに適すと雖、急速に降る能はず、背淋、北海道に產するものは、雪中に白色に變ず、これ自衛の保護色なり、山野に栖し、草根樹皮を食ふ牝兎は一歲にて孕み、一回五六頭位を產出す、生兒は分娩の時、既に眼を開き、全体に生毛しあり、肉は美味にして、毛皮は、帽子、手袋、毛は織物とす。

うし(牛) Bos 動反芻類に屬し、毛色黑、茶あり、頭上には、表皮の變形したる角あり、上顎に門齒を闕く、胃は反芻に適し、四袋より成る、第一なる瘤胃は最大にして食物は先づ瘤胃に入り、良久しく沼潤して内面に網狀の襞襞を具ふる、蜂巢胃に入る、然して食物は再び口腔に逆還して、細に咀嚼されたる後、復び食道を下り、その下端に連る一溝を傳ひて、重瓣胃に入る、重瓣は内部に瓣狀の襞襞あり、次ぎてまた内面に皺ある、皺胃に入りて後、腸に下る、その腸の長きこと動物中比類なし、尾は末端に長毛あり、性柔順にして能く人類の勞働を助く、肉、乳は食用とし、骨は細工、肥料とし、皮は製革して靴等を製し、血液、脂、屎、尿、蹄等一として棄つるものなし。

うじ(蛆) Maggot 動蠅の幼蟲をいふ、蠕蟲に類し、多く、腐敗物中に生ず。

うぢく(羽軸) 動毫を見よ。

うつぼかづら(猪籠草) Nepenthes Rafflesiana 圖猪籠草科にして、葉は一半、壺の如く、小動物その中に落ちて死するときは、これを養料とす、種類多し。

うづら(鶉) Coturnix 動鶏雞類に屬し、その体小、全身、黃褐色にして、黑白の斑を雜ゆ、活潑にして、原野に生息す、これを籠養す。

うで(腕) Arm, 四人体の上肢の一部にて肘より手頸の間、尺骨、橈骨の筋肉に蔽るゝところなり

うと(土當歸) Aralia Cordata Thumb 圖五加科の草本なり、莖は節あり、數多の綠葉を生ず、一種の芳香ありて食すべし。

うなぎ(鰻) Anguilla Japonicus Ses 動喉鰭類に屬し、体長三尺に至るものあり、体形は圓筒形にして、細長く、尾に近く次第に扁なり、体色は種々あるも大抵、青黑、褐色にして、腹部は白色なり、頭は扁く口吻少しく突出し、口大なり、齒は鋭にして錐狀をなし、鱗は軟にして、皮膚より膠液を分泌す、腹鰭を闕き、尾鰭は上下あり、河川湖沼の泥土中に隱れ、夜間食餌を求む、生殖期には、海に下りて產卵す、兒魚は体色卵色にして鱗なし、特有の味ありて食用とす。

うに(海膽) Echinometra 動棘皮動物なり、淺海の岩石間に栖息す、その形栗の果實の棘皮を脫せざるもの、如し、淡紫色の石灰質棘多數を具へ、棘はその著點に於て動かすことを得、口は下方に開き、肛門は上端中央にあり、口内より細き膜足を出して、運動す。その卵巢を採り、醬丹を製す。

うにとしる(一角) Monodon 動鯨類にして、上顎に突出せる二齒ありて、右一齒は螺縮すと雖、左一齒は能く發達し、前方六尺餘も挺出し角の如し、この角狀齒には螺施狀の溝を有す、角は非常に强く、能く船側に深く突入することを得、これ保護器なり、雌は兩齒ともに螺縮す、頭形、海豚似てかつ半月形の噴水孔を有す、体長二十尺内外、体色は、黃白色にして褐色の斑紋を散點す、角齒狀は一角と稱し、質象牙に類似す、藥品として、貴重

せられ、肉は食用に供す。

うにるゐ(海膽類) Echinoidea 動棘皮動物中の一類なり、球形、圓盤形或は心臓形にして、石灰板の接合に因りてなる殼を具ふ、殼の上面中央より下面に亙る十帶あり、即ち五條の歩帶及び、同數の歩間帶を交互に見る、兩種の帶は各々石灰板を二行に排列し、その歩帶に屬する板は歩足の出する小孔を通し、歩間帶に屬するものは、稍大にしてかつ無孔なり、上面に於て、諸帶の輻輳する一點には概ね、十個の特別なる石灰板ありて、花紋狀に排列す、その内歩間帶に對する五個の生殖板は、皆生殖門を開く、就中一個は生殖門の外に數孔を穿ちかつ少しく、腫起す、これ即ち穿孔体なり、また歩帶に對する五枚は、稍小にして各小眼を具ふ、故に眼板と稱す、体面に長短を異にする硬棘を生ず、この物諸板面にある疣狀隆起上に粋白關節を爲し、その運動は大にこの類の移動を助くるものなり、また棘に混じて所謂叉棘を生じ、その數は口の周圍に殊に多し、口は下面の中心若くは、側心に開き、これを經て、食道あり、この部は周圍に強壯なる、五齒を具ふ、各その尖端を口外に突出す、自餘の消食器部分は管狀にして體腔中を回施し、腸間膜と稱する膜によりて体壁内面に懸著す、肛門は上面中心、或はその側心に位し、時に口と共に下面にあり、呼吸は鰓狀したる歩足、並に消食管の一部を以て營み、また往々口の周圍に五個の口鰓と稱するものを生じ、專ら該作用を爲す、生殖器は通常体腔歩間帶毎に存在し、彼の生殖板に穿たれたる小孔により外通す、專に海水の淺處に產し、小動物を食す。

うばばみ(蟒蛇) Python 動蛇類の巨大なるものにして、頭比較的小なり、口は豁大に開き牛馬を捕食するものあり、肛門の兩側に後肢を有したる痕跡を存す。印度に產す

うま(馬) Equus caballus L. 動有蹄類に屬し、口吻突出し、切齒三三、臼齒六/六、牙齒微小にして、多く牝に發生す、頸長く、頭小長し、四肢は、强健、疾走に適し、蹄は、大なるもの一個あり、馬は、三趾を有するも、組先は五趾ありき、常に前肢を以て、地を搔く性あり、性亦活潑、能く、騎用、挽車用、農用等に供せられ、人力を助く、その植物性を食するものなるは、齒によりて、これを證し、この屬の、異なは、尾根より、長毛を有するにあり數種あり、亞刺比亞產を、その最さし、本邦に於ても、家飼、または、放牧す。

うまはへ(馬蠅) Gastrophilus equi F. 動双翅類に屬し、大形の蠅なり、頭大、眼黑く、体全面に、白色細軟毛を生じ、胸部灰色、腹部淡褐色に、淡黑色の紋あり、夏日、馬体に、五百以上群集し、馬舌の及ぶ所に、産卵し、馬これをなめ、胃中に嚥下す、孵化して、蛆となり、胃中に寄生し、後肛門より、排泄せらる、これをムケノコムシといふ、被膜を破りて、成蟲となる。

うみかめ(蟲龜) 動爬虫類にして、赤蟲龜、Chelone Caouanna 綠蟲龜 Chelone viridis Schneeid, あり共に体長六尺に達し、砂中に產卵す、本邦近海に產し、その肉美味ならず、綠蟲龜は甲紋十五を有し、赤褐色を呈す、赤蟲龜は甲紋十三にして、小笠原島にこれを盛漁す、その肉美味にして、卵も亦食ふべし。其甲、脂肪有益なり、

うみじた(Antecton Actinometra 動海百合類なる棘皮動物にして、その五腕は各相分岐し恰も、多數の腕を具ふる如し、その兩側に小枝を列生するを以て、羽狀を爲し、その質至りて脆弱なり、幼時は有柄にして、外物に固着すと雖、老成後は無柄なり、本邦近海に生

す。

うみへちま Chalina 動海綿動類にして、圓柱形なり、上面中央に大なる主腔を開く、有生の時は淡紫色を帶び、乾燥したる骨骼は、淡黄色にして、強直なり、本邦沿海に多生す。

うみやじ(海椰子) Nipa fruticans Wurmb 極めて、短大の幹を形成し或は無幹なるものあり果實は大なり、この花より一種の酒及砂糖を製す、馬來群島に產す。

うみゆり(海百合) Metacrinus 動棘皮動物なり、長柄の尖端に小枝を生ず、以て羽狀をなす、終生柄を以て深海底に樹立し長さ二尺余に達す、我相摸洋に一種を產す。

うみゆりるる(海百合類) Crinoidea 動棘皮動物なり、体軀球狀、或は猪口狀にして、石灰質小板を以て覆ひ、上に口を開き、下は可節の長柄を以て海底に固着す、但し或る類は幼時に於てのみ柄を有し老成に至れば之を失ひ自在に移轉す体軀の周圍に有節の五腕を有し每腕更に分叉しかつ小枝を列生す、歩帶は溝狀を爲し、口より各腕の基に達し肛門は口の側に開く、現世に栖息するはウミシダ、海百合の類のみにて、その種類少しと雖、地層中に化石は甚だ多し、

うもう(羽毛) Feather 動鳥類の、翼及び、全身を蔽ふ、綿毛の總稱なり、共に上皮の所生物にして、翼の羽を、翅といひ、綿毛を擬といふ、共に、硬と稱する、一部を以て、皮膚中に、挿入す、(翅、擬參照)

うもれぎ(埋れ木) 鑛仙臺地方に產する樹幹が火山の破裂に際し、水の爲に押流せられ、木材、灰砂の下、岩石中に横はりて、埋沒せられ、上部の壓により、扁平となりたるものにて、黑及褐色にて燃燒すと雖、火力弱くして、煤多し、函根山より發掘する神代杉もこの一種なり。

うらじろ(裏白) Gleichenia longissima Bl, 羊齒類なり、地下莖にして、內部は一帶の柔軟組織をなし、數多の維管束を散在す、葉は裏面白し、新年の〆飾とするものこれなり。

うるし(漆) Rhus Vernicifera 圖漆樹科の落葉喬木なり、花は淡綠色にして、雌本と雄本とあり、樹より漆を採る、子實よりも蠟を製し支那にも產す。

うろこ(鱗) Scale 動魚類の外面に被る角質透明の薄きものにして、覆瓦狀に整列すると、個々緣接するもの、種々ありて一定せざるも皆環層あり、これ植物の年環の如く、以て年齡を推知すべし、硬骨類の被るもの圓鱗はその周邊圓滑なり

櫛鱗はその質稍厚くして前緣櫛齒狀の刻あり

齒質鱗は骨質にして、琺瑯質を被るものあり

概れ形斜方形なり、

楯鱗は骨質にして、頭粒突起あり等なり要するに上に陳たる如く、皮膚の眞皮中に生じ、深く埋沒し、その一端を覆瓦狀に排列するもの、また薄き膜を被むるもの、或は只に側緣を接して並行するものとあり。

うろことげ 圖苔類なり、ゼニゴケと共に能く人の知る所なり

うんせきど(運積土) 圖岩石の分解作用によらず、また水の運搬作用によらずして、手然に運搬され、堆積して生じたる土壤をいふ

うんどうしんけい(運動神經) 圖全体の運動を司る神經にして、脊髓より出て、末端は筋肉に終る。

うんも(雲母) Mica 圖單斜晶系にして、片狀、板狀、鱗狀をなし、透明にして、撓性を有す、光澤は眞珠光なり、色は銀白、綠、黃褐なり、底面の劈開不完全なり、硬度、二三比重二、七三、酸類に侵蝕されずして、炭酸アルカリと共に熱すれば分解す、耐火性なり

花崗岩等の岩石中に存す、甲冑、奚渡の産良品なり、壁紙、扇、暖爐の窓、または發電機の絶縁体に用ふ、種類多くして、黒雲母は黒色にして褐色或は綠色を帶ぶ半透明なり縞体亦多し、蛭石、金雲母、褐雲母、鐵雲母等なり、蛭石は褐色の小粒をなし火中に投すれば一方に延長し奇なり、また紅雲母は櫻赤色、血赤色にして飛彈に産す、黒雲母の近江日上山に産するものは結晶大なり、殊に大結晶にて顯るゝものは西比利亞産の白雲母にして、家屋、船舶の窓硝子に代用す。

え

えいきうじ(永久齒) 獣乳齒の脱換後に代りて生ずる齒にて永久脱せざる齒なり

えうぎぶる(腰推) Sumbar Vertebra 獣上は胸推に連り下は蹠骨に接する五個の推骨にして、胸推より大なり、

えうたい(腰帶) Welvic Girdle 獣骨盤の稱にして、肩帶の對言なり。

えうちう(幼虫) Larva 動卵より孵化して、蛹に至るものなり(變態參照)

えきが(腋芽) Axillary bud 植葉と莖幹との間に生ずる、新芽をいふ、

えじのき(瘠墩果)Styax JaPonica, Set I, 植種子は、黒褐色、油を製し、山雀これを食す肥料とすべし、材は、白色緻密、玩具、細工に用ゐる。

えとま(荏) Perilla ocimoides 植唇形科の草本なり、白色の花を生ず、その葉及び香氣はシソに似たり、種子より油を採り雨傘に塗る。

えぞまつ(蝦夷松)Picea azanensis, Fesh 植松柏科に屬し葉の裏面白色なり、材質は優等ならず、北海道に産す。

えのき(榎) Celtis sinensis 植葉帶植物にして、種子は胚乳を闕く、高四丈周七八尺に達するものあり葉は染料とす、樹は中心紫色をなし水理美なり、器具に製し、稀に建築に用ゆ。

えびるる(蝦類) Macrura 動甲殼動物中の十脚類なり、腹は能く發達し頭胸よりも長く、かつ尾鰭あり、また長く觸角あり、イセエビ(龍蝦) クルマエビ(斑節蝦)シバエビ(草蝦)ヌマエビ(沼蝦)等なり。

えふにん(葉緣) Margin 植葉の周緣なり、鋸刻鋸齒等、葉緣の形狀を表はす。語なり。

えふきゃく(葉脚) Base 植葉身の基部をいふ、圓形、楕形、心臟形、箭形、耳形、戟形等の種類あり。

えふきゃくるる(葉脚類) Pigllopoda 動甲殼類の一目なり、概れ、明に環節分を示し、往々楯狀若くは、双殼狀の甲を以て、体を蔽ふ、脚は、四對乃至數多あり、皆葉狀の撓脚なり、夏は、單爲生殖、秋に至りて、受精したる、卵を産す、水蚤、フランキプス等の屬なり。

えふじよ(葉序) Cycle 植葉の莖幹に生ずる形狀をいふものにして、互生、對生、輪生等の別あり、即ち、莖の各節に二個づゝ相對して生ずるを對生といひ、一個づゝ生ずるを互生といひ、三個以上輪形をなして生ずるを輪生といふ。

えふせん(葉尖) Apex 植葉の先端をいゝ、その形狀により用語あり、即ち先端尖鋭なるを鋭形といゝ、尖らず少しく圓なるを鈍形といゝ先端鋏切したる如きを截形、中央に灣入したるを凹形、突出したるものを凸形といふ。

えふちん(葉枕)Cushion 植葉の基部の少しく大なる所をいふ。

えふにく(葉肉) Dieclyma 植葉は葉脈とその表面を蔽ふ光澤ある薄皮を採り去るときは柔軟なる細胞組織あるべしこれ葉肉なり。

えふりよくたい(葉綠体) Chlorophyll bodies 植葉綠素即ち油狀物質中に溶解せる、綠色の色素のある、無色の原形質より成る、顆粒なり。

えら(鰓) 動サイを見よ。

えん(鰐) Operculum 動多く石灰質より成り、扁平なるものあり、一面突起せるものあり、螺狀溝あるものあり、多く腹足類の蓋なり、ササエ、タニシに其例あり

えんか(嚥下) Gnep 生食物を、口腔より食道に向ひ、飲み下すをいふ。

えんじやくるゐ(燕雀類) Passeres 動鳥類の一目なり、多く小形の禽にして、嘴の形狀種々なりと雖、必ず、短小かつ全部角質にして、軟皮を被ることなし、翼は、十個(稀に九個)の手風を有す、走脚細くして、その前面を被ふ、所の鱗板は、往々連綴たる一板に合す、鳴管は、概ね能く發達せり、この類は、禽類中の最大多數を含み、數類若くは、昆蟲を食餌とし、專ら樹上にあり能く飛翔し、地上を行くときは、概れ、跳ふものあり、性快活、雄は、鳴囀するもの多し故に一に鳴禽の名あり、その造巢するや、往々甚だ、精巧にして、雖は微弱なるが故に、親鳥の哺養を要す、多くは漂鳥にして、無數群をなす、また候鳥少なからず。これを左に區別す、

(一)籠口類　金糸雀、燕、魚狗

(二)細嘴類　鶺鴒、キセキレイ

(三)闊嘴類　伯勞、鶯、鶺鴒

(四)厚嘴類　雀、雲雀、鶸、交嘴

えんせい(延性) 動金屬鑛物の延長する性質をいふものにして、一匁の黃金は一里八丁に延長すといふ、これ延性に富むによる。

えんすゐ(延髓) Medula oblongata 頭蓋内に匿れたる、脊髓の上端にして、小腦の基部に起り延髓孔を徹りて、腦外に出て以下は脊髓となり、その質内部灰白色にして外部は白色を呈す、神經中樞の頗る肝要なる部にして、反射運動を司る、即ち呼吸、歩行、咀嚼、嚥下、嘔吐、吸乳、血管壁の伸縮、クサメ、セキ、マタタキ等なり

お

おしきさう(含羞草) Mimosa Pudica, 植豆科の草本なり、數多の小葉は四本の小柄に支へられ、更大なる葉柄と連絡す、夜間、雨日、またはこれに觸るときは、全葉は閉合して、葉柄下垂す、扛起開舒するときは、閉合垂下の時の反對の順序にて、葉柄先つ起り次に小柄、後に葉を開く、その垂下の狀を以て、命名したるものなり。

おしきさう——おほかみ

おにぐるみ(山胡桃) Juglans Sieboldiana maxim 植胡桃科にして葉は羽狀複葉、花は單性、雌雄同株なり、果實は核果なり、種子は油に富み、味佳なり食用とす、また材は工業用に供す。

おにゆり(卷丹) Lilium Tigrinum Gawe 植百合科植物にして、花粉粒大にして長く、粘液を以て、粒々互に附著し、花に來る虫類に粘著す、赤き花粒を採り、水中に入るゝ時は粘液は水に溶け去り、忽ち白色となる。

おびくらげ Cestus 動櫛水母類に屬し粘膠質透明にして、扁平長形なり、形帶の如く長或は三四尺に達す、雌雄同体なり、海洋面に浮游す。

おほかみ(狼 Canis 動食肉類にして犬屬なるも体肥大せず、眼光鋭し、その性も亦猛悍兇暴殺掠を好み、人に馴す、深山に栖息す、その食餌は概れ小獸を捕食す、その飢ゑたる

時は同類をも食し、人をも殺害することあり、その病める時は更に猛烈なり、多く夜間出て、活動す、毛は鞘を造り、その糞は烽火に用ゐる。

おほばこ(車前)Plantago Mazor S, var, asiatica Done, 圖車前科の多年生草本なり、葉は杓子狀にして、大なり環をなして生す、花は白色にして、大柄の上部に開く、虫媒花なり、人家に近く、原野路傍に傳播す、葉は藥用とす。

おほむぎ(大麥) Hordeum Sativum Jess, Var Vulgare 圖禾本科二年生草本なり、二年目の五六月頃、實を結び、後に枯死するものなり、莖は中空にして、硬く、硅酸を含み、節を有す、葉は細長、平行脈ありて、下部は鞘狀を成して莖を抱く、花は穗狀、莖の頂上に蝟集す、花序一個なり、二個の細長なる頴と、内外の二殼は相緊抱すその中に數個の花あり、兩殼の内には二個の細小なる鱗被と三個の雄蕊と、一個の雌蕊あり、柱頭は毛羽狀をなして、兩分す、而して下部には圓形の子房を具有し、風媒花なり、その果實は食用とし、米と混炊し、酢、醤油、酒の原料とし、莖は製紙、その他各種の細工に用ゆる世人の能く知る所なり。

おらんだいちごHragaria Virginiana Hrh 圖薔薇科の草木なり、莖は多少の棘を有し、葉は三片より成る複葉なり、花は白色、果實は光澤ある粒を以てなり、甘味を有しシロップ、シャミ等を製し食用とす。

おらんだきじかくし(石刀柏) Asparagusobliciu-alis, B, 圖百合科の一本なり、葉狀をなせる小枝を有し、葉は極めて小なり、花は綠色にして小形なり、その嫩莖は佳良なる味を有す

か

か(蚊) Nemocera 圖昆蟲類の雙翅類なり、口器は、刺螫及び吸收に適し、細長なる管あり觸角絲狀にして、脚は細長なり、夏時多く產出す、夜間人家に入り人或は畜類の血を吸收す、多く腐敗せる水中に產卵し、その孵化する時は、子子蟲となり、その後蛹に化し、數日を經て脫皮し、終に蚊に變態す。

が(蛾) Moth 圖昆虫類の鱗翅類なり、小蛾、尺蠖蛾、夜蛾、蠶蛾、等及び天蛾なり小蛾は小形にして、翅は幅狹く、觸角は鞭狀なり、その幼虫は穀類を害す、尺蠖蛾はその軀幹長にして、翅は大なり、觸角は鞭狀或は羽狀なり幼虫は十乃至十二足を有すこれを尺蠖と稱し、多く果樹を害す、夜蛾は夜間に出て、軀幹は肥大して後方に狹く翅は大なり、觸角鞭狀をなす、雄には時に羽狀なるものあり、脚長くして、翅は靜息するときは、屋斜狀をなす、幼時は毛を帶びたるもの否ざるものあり十六足を具ふるを通常とするも稀に、十二或は十四足のものあり 地中にて蛹に變じ、幼虫は菜園を害す、蠶蛾は亦夜間に出づ、その軀幹も亦肥大せり、体に軟毛を密生し大翅を有す、觸角は、雄は羽狀、雌は鞭狀、靜息中翅は屋斜狀を爲す、幼虫は毛を帶び、口下にある、絹絲線孔より絲を紡出し、繭を營み次て蛹となる、有莖なり、その屬多し、天蛾は肥大且長く後方に尖れり、前翅は幅狹く、後翅は稍短小、靜息中翅は水平、概ね黃昏出づ幼虫は十六足を具へ、地中にて蛹に變す。

かい(貝) Shell-fish 圖上下二枚の殼を有する貝、即ちハマグリ、シジミ等をいふ

かいけいるる(介形類) Ostracoda 圖甲殼類中のものにして、鹹淡二水に產する、小硬殼類

にして、必ず雙殼を以て、身を蔽ひ楕圓形或は側扁形なり、その殼の石灰質なるときは、外形雙殼貝に彷彿たり、一個の眼、ぴ七、の肢卽ち觸角二、上顎一、下顎二、胸脚二あり。し。ぶりすこれに類屬す。

かいつぶり(鸊鷉) Podiceps philippensis, Bonn 動短翼類に屬する水禽なり、ムグリとも稱す、背色は黑、腹部灰色なり、翼、尾共に短し、嘴は堅硬にして尖銳なり、黃色を帶び、先黑し、趾は扁濶にして蹼あり、巧に游泳し水中を潛り。魚類を捕食す、池沼に棲す。

かいば(海馬) Helicore 動哺乳動物中の游泳類なり、じゅごんとも稱す、鯨に似たり、頭は圓く全身には、軟毛を生じ、眼は上方にありて、切齒は上顎の兩側に三個、下顎の兩側に一個ありて、また乳房一對を具ふ、牝は牙狀の齒發達すと雖、一般海藻等の植物を食するを以て、白齒牛馬に類す、亞米利加及亞非利加の沿海或は河口等に棲す、肉は食用として賞味さる、狀形牛、牛魚なるを以て、ニンキョ、ツミボウズ等の稱あり。

かいばうがく(解剖學) Anatomy, or, Zoolomy 動動物の体を形成せる、諸器管の位置、構造、機能及びその部區の關を研究する學なり。

かいふう(海風) Sea Breeze 隔晝間海より陸地に向ひて吹く軟風なり、これ日中は陸地が太陽の熱を收むること多きを以て、空氣は熱を受けて上騰する時、海上の空氣はその隙を滿す爲に、陸地に向ひ、動くものなり。

かいめん(海綿) Sponge 動これ海綿動物の共同骨骼なり、その種類形狀も種々ありと雖、大抵海産にして、地中海産を最上品とす、色黃色、質纖維質より成り、彈力性を有す、海綿は外面より大孔に通ず數多の小孔ありて、能く水を吸收すこの小孔は多數の海綿動物の生息したる所にして、大孔は排水孔なり、膠質より成れるものは柔にして醫用沐浴用に供し、玻璃質より成れるものは剛にして、使用し難し、その形も盃狀、壺狀、不正形圓塊、樹枝狀あり。

かいめんどうぶつ(海綿動物) Poriberra, or Spongiba 動多く海産にして單体若くは群体をなし外物に附著す、その外觀は不正形圓塊、壺狀、盃狀または樹狀をなすものあり、概れ体中一種の骨骼を具へ爲めに强直、若くは剛硬なり、筋肉、神經系及び感覺器を悉闕し、体制は頗る低度なり、每体必ずその上部に、一個の大孔を開き、体中の單一若くは、分岐せる腔を通す、主腔は四方に數多の、細管狀枝腔を派出し、數々分岐しまたは相連合し、終りに体面に無數の小孔を開きて、外通す、その走行中枝腔は、所々に球狀に、膨大し以て纖毛室と名くる、小房をなす、海綿体は三細胞層より成る、外層は扁平細胞より成りて、体の全面を被ひ、內層は体內諸腔の內部を被へる皮膜にして、纖毛室にありてはその各細胞は、襟狀物を有し、かつ鞭毛を生じ、常にこれを振動するにより、水は絶へず体面の小孔より流入し、上部の大孔より流出すと共に、その水中ある、有機物を捕へ營養となす、內外兩層の間に中層を充滿す、この物は、楽天性物質及び無數のアミバ狀細胞よりなり、中に角質、石灰質、若くは硅石質の骨骼よりなる角質骨骼は分岐せる、彈力性纖維より成り、その諸枝は網狀に相連合し、これを廓し視るときは、糸爪の如し、沐浴用、綿は、柔軟部を去りたる角質骨骼なり、石灰質、若くは硅石質の骨骼は、針骨と名くるもの、楽成する所なり、針骨は種々形を異にし、針狀、絲狀星狀、車狀、錨狀等のものあり、中層は、雌雄の生殖物を生ず、その卵

より孵化したる、胚は纖胚狀にして、纖毛を帶び、これを揮ひて、游泳す、終にはその原口を以て、外物に附著し、導て中胚葉を生じかつ大小孔を開ひて一個体に成長す、成長は、發芽、或は分体して、多少の個体より成れる群体を爲す、性質及び骨骼の有無によりて五目に分つ一膠質綿、二角質海綿、三硅角海綿、四玻璃海綿、五石灰綿とす。

かいらうどうけつ（偕老同穴）Euplectella 動海綿物にして、その骨骼は、圓筒籠狀なり、透明ならず、形籠に似、二尺餘に及ぶものあり、頗る美麗なり、中空の籠内に二尾の蝦を棲息せしむ、故にこの名あり、ヒリッピン群島の沿海、我邦にては模灘の深處に多し。

かいりかう（海狸膠）Castorium 動海狸膠とは海狸の腺嚢中より分泌する、刺戟性の臭氣ある液にして、新鮮なるものは、黃色にして、かつ流動性なるも、乾燥するときは、暗色に變す、前皮及び、陰核の滑皮より分泌する脂肪なり、藥用とす、各成分を百分比例に記するときは

成分	シベリヤ產膠	アメリカ產膠
揮發油	二、〇〇	一、〇〇
海狸ハルツ	五八、六〇	一三、八五
コルステリン	一、二〇	—
カストリン	二、五〇	〇、三三
燐酸石灰と混したる蛋白質		
膠狀質	一、六〇	〇、〇三
エキス（水及酒精中に溶解す）	二、〇〇	二、三〇
炭酸安母尼亞	二、四〇	〇、二〇
燐酸石灰土	〇、八〇	〇、八二
炭酸石灰土	一、四〇	一、四〇
	二、六〇	三三、六〇

かうがくるゐ（硬殼類、固殼類）Plectrognathi 動硬骨類中の魚類なり、球狀、或は側扁をなし、上顎諸骨の頭蓋と相固著するにより名づく、口及び鰓蓋は狹小にして、鰓は箭齒狀をなし、皮は時に甲鱗を生ず、腹鰭は棘狀に變形し、或は全くこれを欠く、フグ類是なり。

かうかん（莖幹）Stem 植物体の上行部にして必ず、葉を生ず。一本幹、木質莖なり二草莖草本の莖なり、三稈、結節を有する莖、稻、麥の如し。

かうかんしんけい（交感神經）Sympathetic 植物性神經系統にして、二十四對の神經球を連繫する、節索より成り、脊柱骨の兩側に沿ひて縱行し、また中樞部と末梢部の別あり、中樞部は植物性管内にありて末梢部は、交感神經の纖維にして、全身に分布すと雖、主として腸間膜、肝臟、脾臟、心臟等の諸内臟及び血管を絡ひ、叢をなす、都て交感神經は不隨意運動及び、線の分泌を司るものとす。

かうぎよくせき（鋼玉石）Corundum 鑛アルミニュームと酸素の化合物にして純粹なる礬土にして、六方晶系半面像、斜方六面体、柱、錐狀の聚合形あり、或は双晶をなし、塊狀、柱狀、片狀をなして顯はる、酸類の爲に浸蝕せられず、火にも溶解せず、透明にして、青綠、紅、紫色等ありて美麗なり、硬度は九、金剛石に次ぎて硬し、底面及び斜方十二面体に劈開す、時としては完全なるものあり、光澤は玻璃、眞珠光なり、條痕は無色、斷口は貝殼狀、粗面狀、比重三、九—四、一、なり純潔なるものは寶玉として、貴重せられ、透明にして、赤色なるを、ルビー（紅寶玉）青色なるものをサフイヤ（青晶玉）及び紫色なる東方紫寶石、黃色なる東方黃寶石、綠色なる東方綠寶石等ありて、みなその價も、金剛石に次ぐ不純粹なるものは、細末とし琢磨用に供すその内の鋼玉石は褐、青、黑色にして光澤美ならず、鋼玉砂は黑褐色にして、粒狀なり、一

般に結晶片岩、石灰岩、花崗岩、の如き古岩石中に夾雜して顯はる、青晶玉は、錫蘭島、東印度、支那、鋼玉ハ類はウラル山、ボヘミヤ、歐洲及米國に、鋼玉砂は希臘諸島、小亞細亞等に產す、本邦にては、美濃國惠那郡に產すも未だ良品を發見せず。

かうきるゐ(硬鱗類) Acanthopteri 動硬骨類の一目なり、背、臀、腹なる三鰭の前部は、無節の硬棘を以て支持せられ、その他の形狀は異、軟鰭類と異なるなく、多く海產にして、最多種なり、ヘラ、ウミタナゴ、トゲウヲ、ボラ、ハゼ、コチ、魴魚、アンコウ、サバ、アヂ、帶魚、カヂカ、イシモチ、イサキ、スヾキ、カサゴ、鯛等とす。

かうりんるゐ 硬鱗類) Ganoidei 動魚類の亞綱なり、体側は板鰓、硬骨類の中間に位するものにして、骨骼は軟骨及び硬骨の二部より、或は硬骨性なり、鱗は概ね、斜方形の板狀体にして、表面に琺瑯質を被る、尾鰭は、通常、歪形、鰓は櫛齒狀にして、鰓房は必ず、鰓蓋を以て蔽ひ、各側に各、一鰓列を外開す噴水孔を有するものと、否らざるものとあり 隙を有し、食道と交通す、この類は淡水の產にして、前世界に於て繁榮し、現世界には僅の代表者を遺留するのみテッザメの類これなり、この亞綱は兩棲類の中に編入せられありたるも、近來學者は魚類へ轉綴したり。

かうこつるゐ 硬骨類) Teleostei 動魚類の亞綱にして、多數はこれに屬す、その骨骼硬骨性なるを以て名あり、頭骨堅固にして骨數も甚だ多し、脊梁を成す所の脊椎は、常に兩凹なり、鱗は、概ね覆瓦狀を爲し 排列すと雖、時に は、緣を て、相連接することあり、尾鰭は一般に正形、口腔中齒の形狀及び配置は種々にして、鰓は大抵櫛齒狀を爲し、通常四對ありて 鰓蓋及び鰓皮を以て蔽ふ、故に

鰓房は各側に開ける一裂により外通す、鰓はこれを有するものと、否らざるものとありて、これある時は食道と交通し、或は交通せず、淡鹹兩水に產す、一般卵生なるも、雌雄同体なるもの、胎生なるもの稀にあり、これを、五目となす。

鰓類 タツノヲトシゴ、ヤウジウヲ、
硬頰類 フグ、ウミスヾメ、マンボウ、
喉鰭類 ウナギ、イワシ、コヒ、ナマヅ
軟鰭類 タラ、ヒラメ、サヨリ、
硬鰭類 コチ、アヂ、タチウヲ、タヒ

かうじつせい(向日性) Heliotropism 植植物の光線を受けたる、側に向ひて彎曲する、感應作用をいふ、これ、日光の作用によりて、その成長速度を異にするによる。

かうしるゐ(甲翅類) Coleoptera 動鞘翅類とも稱す、また甲蟲といふ、昆蟲類の一亞目なり口器は嚙咬に適し、前翅角質にして、前及び前胸も亦角質の硬皮を被り、概れ自在に運動す、觸角は形狀種々あり、複眼を有す、稀に單眼なるものあり、その硬質なる前翅を翅鞘または翅甲とも稱す、靜息するときは軟なる腹、後翅を蔽ひこれを保護す、後翅は膜質にして靜息するときは横折しまた縱疊し、外に現れず、脚は走行、游泳に適し 腹は肥大なり、變態完全なり、幼虫は皆發達せる口器を有し、無脚、有脚なり、水中、地中、草木の空洞に潛伏して蛹となる、植物を害す、ガムシ、カミキリムシ、ヘヒリムシ、ハリガネムシ等これに屬す。

かうしんばら(月季花) Rosa indica, L 植薔薇科植物にして、イバラボタンと俗稱するものなり、莖に棘あり、花色種々ありて、四季に開花す、蕚媒花なり、果實は無花果狀、盆栽とし、香料に製せらる、

かうじやうなんこつ(甲狀軟骨 Thyroid Carti-

age 圖成人喉頭の前方に突起せる骨にして喉頭を成す、最大なるものなり。

がうすゐせい(向水性 Hydrotropism 圖根が水の刺戟に感應する作用性をいふ即ち根は營養上水を求め、枯死せんとする草木は、水の濕ひにより、榮へ、森林地方の降雨量の多きも一はこれが爲なり。

かうぢ(楮 Broussonetia Kasinoki Sieb 圖桑科植物なり、葉は卵形、稀に分裂するものあり、花は單性にして雌花、雄花を同樹に生ず果實は、子房の變化したるものにして、色美なり、食するに足る、その幹の內皮纖維は製紙の原料とし、上等の紙を製す、奉書紙、西の內、杉原、美濃紙、紋美濃、天工帖、半紙等なり。

かうちせい(向地性 Geotropism 圖根が重力に感應して、深く地中に入らんとする性をいふ假令へば、根を水平或は倒に置くときは、その先端、成長點は下向す、即ちこの性あるを以てなり、

かうてつ(鋼鐵 Steel 圖鑄鐵中のみ、炭素の一部を除き去るか、また鍛鐵に少しく、炭素等を加へて製す、鋼鐵は、熱したるのち、冷却の遲速により、軟く、彈力あるものと、硬く、脆きものとを生ず、その用途にしては、磁石の針時計の螺條、又物類より、大にしては、鐵軌軍艦等をなす。

かうど(硬度 Hardness 圖物体を壓するに當り抵抗する力なり、今爪を以て長石を傷つくる時は、爪の硬度高きを證す、

かうどけい(硬度計 Scale ob Hardness 圖鑛物の硬度を計らんとするには、その鑛物と他の鑛物とを壓擦するにあり、その一方に痕を留むる時きは、更に他の鑛物を採りて方法なし、兩方痕を留むることなければ、その鑛物と同硬度なることを知る、またモースの硬度計によるを便とす、即ち左の十種を標準とす。

滑石、石墨	一度	正長石	六度
石膏、岩鹽	二度	石英	七度
方解石	三度	黃玉石	八度
螢石	四度	鋼玉石	九度
燐灰石	五度	金剛石	十度

かうもく(綱目 Class 圖動物學者は、その体格、器官、構造、及び外物との關係により動物界を大別して、數門とし、各門を更に若干の綱に、區別し以下綱を分ちて目、さし目、を分ちて科、科を分ちて屬、屬を分ちて、種とす、樹幹の枝が分岐より分岐さるが如し、猫は門、脊推動物、綱哺乳類、目食肉類、科猫科、屬、猫屬、種、チコ、の如し。

かうもん(肛門 Anus 圖糞を稱する即ち食物の殘滓の排泄せらるゝ門口にして、脊推動物にては大抵は、後肢、根基の中央に開き、獨立するも、下等動物に至るに從ひ、生殖孔と合一す。

かが(夏芽 Summer bud 圖春、發芽し、夏榮え秋枯死する草木の芽をいふ、最初より綠色を呈す。

かがくとつ(下顎骨 Mandible bone 圖顏面骨にして、顏面の下部、下顎を成す骨なり、一個より成るも雖、下等動物には一對ありて、右左相離れ、各自に運動をなすものあり、

かかと(踵 Heel 圖足の後端に後方へ突出せる部分にて、踵骨の外面なり

かき(柿 Diospyros Kaki L. F. 圖柿樹科の木本なり、葉は、楕圓形にして、花は、淡綠色の單性花、果實は、大なる漿果なり、材は、器具に製し、果實は生、乾燥して、食用とし、また澁を製し、種々の用に供す、その種類多し。

かき(牡蠣 Ostrea 圖瓣鰓類の單柱二枚貝なり

右殼は小にして薄く、左殼は大にして、淺海の干滿する岩石に固著するに、用ゐる、足は大にして、肉多く、美味にして、滋養分に富む

かきうかく(蠣牛殼) Corbles 圖耳を見よ。

かきつばた(燕子花) Iris loevigata Hisch 蔦尾科の草本なり、金形、アヤメに酷似す、葉は細長にして、中肋なく、先端尖る、花は大にして奇なり、水邊に生じ、賞觀の用とす。

かく(核)Nendens 圖原形質の中心物質にして(動物の核を見るべし)これが分裂して蕃殖す、

かく(核) Nendens 圖細胞膜、原形質と共に細胞を組成する蛋白質の小粒にして、中に小核卽ち仁あり、細胞が分裂して、增加する場には、核先づ二分して、然る後、細胞も亦分る核分裂せざれば、細胞も亦分裂する能はざるなり、細胞に於ける、細胞膜は人体の皮膚の如く、原形質は筋肉、核は神經の如く、三者一も獨り存する能はざるは、筋肉より離れたる皮膚、神經を脫したる筋肉、筋肉より脫離したる、神經が、獨立して個々に存する能はざると同理なり。

がく(萼) Calyx 圖花冠の外部に存する、保護機關にして、外部の花被卽ち外花被なり。

がくさよるる(鰐魚類) Crocodilia 圖頗る大形の爬虫類なり、背部に骨性の鱗甲を被り、尾は扁平なり、四肢短く、陸上の運動遲緩なり五指四趾を具へ、趾間に蹼を張り、游泳巧なり、齒は圓錐形にして、各自齒槽中に生ず、舌は口外に伸出せず、心臟は二心耳、二心室より成る、肛門は縱裂せり、熱帶地方の大河に棲息し、卵を河岸砂中に產す、その性兇暴にして、魚、鳥等を貪食す、印度鰐、ガビアル、口吻長し、東印度產、米鰐類、アリガトル、巨大なり、米國產、眞鰐類、クロコダイル、口吻扁平、ニール河以上三類に分つ。

かくとりどり(郭公鳥) 圖ホトトギスを見よ。

かくせき(角石) Hornstone 圖燧石中の不純なるものにして、その缺け目鋭く尖りその痕は著しく介殼狀をなす、石器時代には、武器を製し、燐寸の發明なき時代には鋼鐵と打ち合せ、火を出せり

かくせんせき(角閃石) Amphibole or Hornblende 圖單斜晶系にして、柔形、雙形なり、現出の狀殆んど炭石に同じ、劈開は、柱、側軸底四体となり、硬度五乃至六、比重二、九乃至三、四、色は綠、黑、白、玻璃光、及び眞珠光なり、條痕は白、または淡色、成分は $RSiO_3$,……$R=Mg, Ca, Fe, Mn, Na_2, K_2, H_2Al_2$, 更に含有物あり、透明また不透明、種類四あり、

一普通角閃石 黑色 新火山岩より出づ、加賀白山瀧の馬場に產す、

二透角閃石 柱狀にして、白灰又は淡綠、伊豫、信州に產す

三陽起石、纖維狀にして白色、淡州沼島產、

四石綿、毛狀にして、纖維の塊をなし、白色及淡綠、耐火力强し、

花崗岩中に存し、殆んど酸類に侵されず、熱すれば、溶解す。

かくまく(角膜 Cornea 圖哺乳動物の眼球の前面部を包み、少しく凸出す、角質透明なり

かくまく(隔膜) Septum 圖腔腸動物の腔腸を入口の連絡する數多の縱室に分つ膜をいふ膜の中央部に近き端に多數の絲細胞を有す。

かくまく(隔膜 Septum 圖ナタネの子房を二室に分つ、薄膜は、その一例なり。

かくとん(假根)Rhizine 圖下等植物の根には、高等植物の根毛に類似する根を具有するもあり、これを假根と稱す、眞正の維管束を欠き蘚苔地衣に見る。

かし(下肢)Hind limb 圖四肢を有するもの

〜後肢部ち脚といふ、一對の稱なり。

かしか(金襖子) Hylaarborea Burgeri, Schleg 動兩棲類に屬する有盤指の蛙なり。体長、兩蛉に仲伯し、外形は、甚だ醜し、山間溪水に產し鳴聲愛すべし、飼養するものあり。

かしとう(下肢骨) Hinedbimb, bone 生下肢骨とは、脚部の骨骼を總稱するものにして左右一對あり、その基を腰部の無名骨に起り、無名骨は蹠骨に連る、以下大腿骨は脛骨に接し脛骨の外側には腓骨あり、脛骨の下端に跗骨あり大小七枚の短骨より成る、その內距骨跟骨重要なり、蹠骨は五枚、趾骨は十四枚の骨片より成る、膝の前面には膝蓋骨あり、以上を以て下肢骨を組成す。

かじのき(楮) Broussonetia Papyrifera 植桑科の木本なり、自然の形体カツヅに酷似しすと雖、別種なり。葉は大なり。その內皮纖維は製紙の原料として著名なるものなり。

かしめ Eklonia Cava, Kjellm 植藻類なり、莖は圓形にして、上部分裂して毛狀をなす、色深紫色、質軟革の如し、沃土を製す。

かしん(下唇) Labium 生口の外緣下部にしてシタクチビル、なり。

かすのこ(數子) 動青魚の卵塊を採りて、乾燥したるものなり。祝事に用ゆ。

かぜ(風) Wind 植低氣壓の地は、空氣、溫く かつ輕し、故に上昇するときは、四方の冷空氣突進して、その空位置を占めんとし、また上昇したる空氣は、冷却して更に他の位置を充たさんとするに原因するものにして要するに、この大氣循環、卽ち風なり、その運度によりて、名稱を異にす。

名稱	形狀	一秒時間に運動する速力
無風		〇、〇
煙直上す		〇、五 Mr
軟風	風を感す	、五
		四、〇
和風	木葉を動す	四、〇
		七、〇
疾風	小枝を動す	七、〇
強風	動枝を動す	一一、〇
暴風	樹幹を動す	一七、〇
颶風	樹、家を倒す	二八、〇

一一、〇
一七、〇
二八、〇

メートル以上

また その原因によりて區別あり

恒風、四季絶へず吹く、

貿易風、兩極地方より、赤道地方に吹く

逆貿易風、赤道地方より、兩極地方に吹く

定期風、一定の季節を定めて吹く

氣候風、春夏秋冬の一季節に限りて吹く

陸風、夜間、海上に向ひて吹く

海風 晝間 陸上に向ひて吹く

不定風 突然に起りて、時季を定めず

旋風 大氣旋動し、低壓部に進入し、螺旋狀に吹く

颶風 旋風の勢、猛烈なるもの、

龍卷 低氣壓部が一小部に限るものにして海中に起るときは、海水と圓柱形なして上昇せらる。

がせい(芽生) Budding 動下等動物がなす一種の生殖法なり動物体の或る一部より、發芽し成熟するに及びて、母体より分離し、一新動物となるものなり。

かちしき(假組織) False-tissye 植細胞の結合組織不充分にして、單に密集するばいふのみにて不完全なるものなり。

かたくり(山慈姑) Erythronium Dens Canis, L, 百合科の草木なり、卵形の莖を生し、二葉相對す、地下莖は肥大して、澱粉を製しまた、葉子に製すカタクリコ是なり。

かたつむり(蝸牛) Helix 動頭足類に屬するものにして、總て必ず螺旋狀殼を被り殼の大小線紋、色に種々あり、殼口は右にあるものを世通とす、殼口に平行せる螺層は殼の先端に物質を沈澱するにより增加成長す、表皮は有機物質より成り、內層は炭酸石灰質にして、白

色、總て外套膜の分泌液より作る、長短二對の觸角あり、長角の先端に眼あり、口は上下顎と稱する凹凸せる組狀物を具へ舌は、鑢狀のものにて、植物を舐食す、故に胃中に、粗大なる食物を入れず、頸項に近く、大なる肝臟ありて、腸を圍む、心臟血管あれども、毛細管を具へず、血液は體腔中の抵抗少なき部を流れ、肺は殼內にありて体を充分延せるときは、体と殼との間に開く、その開口の側に肛門あり、生殖孔は体の右側、長觸角の後方あり、その歩行せる跡に輝けるは、皮膚より分泌する粘液にして以て歩行を助くるなり、植物を食するを以て害あり。

かたばみ(酢漿草) Oxalis corniculata, L, 醋酸漿草科の草木なり　三小葉の複葉を有す、初夏　黄色の小花を開く　夜間小葉は閉ぢて下方に垂れ、翌朝展開す、葉は酸味を有し、梅干と共に漬くる事あり、また古鏡面を研磨するに用ゐたるを以て、カガミ草とも稱す、原野に生す。

かつたん 褐炭) Brown, coal or, sighnite 醋化成稍不十分なるものにして、五五乃至七三の炭素を含む、一般に塊をなし、木理尚存するものあり、木狀、土狀なるものあり、黑色、褐色を呈し、松脂光を發す、硬度、一乃至二比重、一、二乃至一、四、燃燒するときは、濃烟を擧げ、瀝青臭鼻を衝く、苛性加里中に熱するときは、褐色の液を生ず、本邦に產すものは、大半この類にして三池、唐津、峨內等は著名なる產地なり、燃料、點燈瓦斯、石炭酸、ペンキ色料、コース等を製す。

かつてつくわう(褐鐵鑛) simonite 醋非結晶像にして　鐘乳、乳房　葡萄狀、また纖維狀、塊狀、土狀をなして現はる、無光澤を通常とし半金屬、絹糸光を稀に見る色は褐色より黃色に至る、硬度は五、乃至五、五、比重三、六乃至四、〇、成分は、$2Fe_2O_3+3H_2O$の外に粘土、有機物を含む、條痕色黃褐、池沼の底に沈澱して、年々層を增し、他の鐵分を含む鑛物より變化したるものなり。種類三種あり

一泥鐵鑛、池沼に有機物の沈澱堆積によりて成る、北米、歐洲、武藏、下總、等より產す。

二豆鐵鑛、豆狀をなす

三黃褐石、粘土と混したるもの

かつを(鰹) Thynnus 硬骨類にして、体長一尺七八寸、背黑色にして、腹部銀白なり、小鱗を被り、背鰭二あり、体側には四條乃至八條の線條縱走し。大平洋の上層に產す、土佐最有名なり、食用とす、鰹節はこの魚を煮て乾燥したるものなり。

かつをむし　硬甲類にして、鰹節に生する小虫なり、長楕圓形にして、黑色なり。

かながしら(火魚) Sepidotrigla 硬骨類にして魴魚に類似す、頭大にして角あり、口大なり、体赤色、腹白色、腹側淡黃色にして、黑色の縱線あり、上顎、額に鱗を有す、沂海砂底に棲息し、東海沿海に產するものを良とす。

かなへび(蛇舅母) Tachedromus, Japonicus, Sc Eeg 硬トカゲに類する爬蟲類にして、尾は体より長く、四肢は左右に派出し、舌は先端に分裂す。

かに(蟹) Crab 硬甲殼動物にしてその形体の大小、体色、その他に各個多少の異同あるも要するに、頭胸甲廣く、腹は至りて小、かつ扁平にして、常に彎曲し、頭胸の下面に密着せり第一對脚は、必ず、螯を具へ、尾鰭は闕如す雌は雄よりも、腹幅廣く、容易に分つことを得、若蟹を、失ふときは、一般に再生する性あり。

かはせみ(魚狗) Alcedo bengalensis 硬飛雀類に屬する小鳥なり、嘴甚だ長くして、先端尖

れり、毛色は、各部に、紫綠、白、薔薇の各色を彩り、甚だ美麗なり、常に河畔、池邊にあり、靜に魚類の水面に浮を待ち、突然これを捕食す。

かはほね(菲蓬草)Nuphar Japonicum, Do, 圖 睡蓮科の水草なり、水上莖と水中莖とは形を異にし、根莖は、强大なり、花は黃色にして蟲媒花なり。

かはほり(蝙蝠)Vespertilio 動翼手類に屬し、体色、黝褐色なり、本邦各地に產す、(翼手類參照)

かはをろ(水獺) 動食肉類にして、体軀は延長し、頭は扁平にして鈍く、口吻及び厚唇を有す、五趾は蹼を以て、連絡す、その体色、紅褐色にして、水邊に地道を穿ち、その一口を、水面下に開く、游泳甚だ、巧にして、夜間魚を掬捕す、毛皮は高價なり、防寒用とす、歐州亞細亞に產す。

かび(黴)Glume 圖花の保護機關にして、稻に於て見る、花の外下部の二枚の小苞なり。

かび(黴菌) 圖下等の菌類なるも、細菌またバクテリヤ、とは異なるものとす。居常多く、梅雨季は糊、衣類等を蔽ひて生じ、處に有柄の球粒あり、これ子囊なり、子囊中には數多の胞子ありて、子囊成熟すれば、破裂して、胞子は飛びて、發芽し、無色の菌絲を生じまたは接合胞子を生ずるものあり、接合胞子は、多故に少の時間を經るにあらざれば、發芽せずこれを休眠胞子とも稱す。

かひこ(蠶)Bombyx mori L, 動蠶は、蠶蛾の仔虫なり、頭は三對の小脚前方にあり、胸は三節なり、左右に六對の單眼を具へ、脚は腹部に四對、尾部に一對あり、物を握るに適すその幼虫の背部を見れば血液の循環明瞭なり、一雌は三百乃至五百の產卵をなし、翌年に至りて孵化す、三十日間は、その縱開せる口にて桑を食す、三對の小脚は桑を口に運ぶ、その間に四回皮を脫し、体面綠色より次第に黃色となり、半透明体となる、これ、胃中にある桑色を透視せるものにて、半透明となるは、胃中に桑なく、二對の絹糸線が充分に發達せるによる、その脫皮するや、尾脚と他物との間に糸を連絡し置き、頭胸境界部の背面より、體を出す、その際外皮と共に氣管も脫皮す、蛹の睡眠期ともいふべく、この間に於て、その構造は、幼虫より、成虫形に變ず、これに於て口中にある二紡糸腺より、各一本の絲を紡出し、前脚を以てこれを一絲となして、他の粘液線より液を分泌し、絲に塗り付相付着せしめ、三日半にて一繭を全成す、糸は、吐糸孔と稱する管狀部より、分泌する液にして、空氣に觸れて、糸となるものにして、一繭の糸は、無慮二千六百尺乃至三千五百尺あり、而して五日を經て蛹となり、繭中にて一回の脫皮をなす紡繭後十九日にして、成蟲即ち蠶蛾と變じ、口より出だす、有色液の作用により繭を破りて出づ、成蟲は數日間絕食し、雄は交接し、雌は而る後產卵する外、能事なく、各その機能を遂行し、終れば、衰弱して死す、蠶蛾は既に、西曆紀元前二千七百年頃より始まり、南歐、支那、日本に行はれ、以て絹布に製し、本邦の如きは、輸出貿易の大部分を占むる、重要物產なり。

かひばしら(貝柱)Adductor muscle 瓣鰓類の上殼と下殼とに兩端を固着せる肉柱にして、閉殼筋なり、これを乾燥したるものカイメシラと稱す、食用に供す。

かふかく(合萼)Gamosepadoys 圖連合せる萼片を稱するものなり、その形狀によりて、名稱あり、壺狀萼、管狀、鐘狀萼、唇狀萼、なり。

かふちうるる(甲蟲類) 動前翅革質より成る、

蟲、即ち甲翅類なり。

かぶとがに(鰭魚)Limulus　動甲殼類にして、この類を劍尾類、の稱あり、体長二尺に達するものあり、体は、堅甲を被り、幅廣くして略半月形の頭胸、及び六角形の腹より成り、後端に細長の尖銳なる、尾節を具ふ、頭胸の下面に口を圍みて、六對の脚あり、腹は、五對の鰓狀肢を有し、鰓を帶ぶ、瀬戸内海、並に九洲沿海に產す。

かぶとどり(花斑鳥)A, Lugubris　動燕雀類にして、魚狗類なり。

かぶとむし(飛生虫)Xylotrupes, Dichotomus　動兩角分岐し、頭胸甲、黑色にして、後体褐色なり、雌雄その形狀大に異なり、雄は、頭及び胸甲に各角あり、多く皂莢に棲す、故にサイカチムシとも稱す。

かぶら(蕪菁)Brassica Campestris,　圖十字科植物なり、草木にして葉は大、花は黃色にして根は肥大し、白色なるものあり、紅色なるものあり、漬物または、煮て、食用すべし、その種類もまた多し。

かへりざき(返り咲)　圖植物は、春季より夏季の間に、養分を貯藏し、來春を待ちて、葉芽及び花芽を生ぜんとするに、際し、秋季に至り、溫度は春季の如くなるを以て、潛伏して春を待てど、花芽及び葉芽は、欺かれて開花しまた發芽するものなり。

かへる(蛙)　動無尾類を見るべし。

かへるのへんたい(蛙の變態)　動變態不完全なり、水中に產卵し、卵は卵莢に寓み、蛋白質樣物を以て、被包し、或は粒々水草に付著し、或は數多紐狀、塊狀をなして水中に浮ぶ、卵は不完全に分割孵化し、　斗と稱する幼兒を生ず、必ず、三對の外鰓を有し、かつ挑脚を具へ、漸く長ずるに及びて、尾の起根部に後肢の痕跡を顯はし、鰓、肺に歷せられて、その

皮膜を脫するに當りては、鰓も亦脫し、肺を以て呼吸す、且つ久しく、皮下に隱伏する、前肢を發露す、而後變態に一歩を進め、尾部は全く收縮し、地上に跳躍する動物に變ずその發生の日數は寒暖晴雨、その種類によりて差異あるも、三ヶ月を歷て變態を全成するものなり。

かま　香蒲)Typha, Japonica, Mig,　圖香蒲科の草木なり、沼地に生じ、葉は細長にして、席を織り、纖維狀の密せる、穗はホクチを製す

かまきり(螳螂)Mantis　動直翅類にして大形なり、体色は綠色、或は黃綠色、前脚、鎌狀の捕獲をなし、害虫を捕食す、草間に鮫の如き塊をなし、產卵す、孵化は春時に至りてなす

かみ(紙)Paper　圖その纖類、多けれども大別して日本紙、西洋紙とす、日本紙の原料は、端香科に屬する灌木、カンピ、コガンピ、にして、カンピは樹皮、コカンピは根皮よりす、また同屬のミツマタの內肉部よりも採る、楮、桑等の樹皮よりす、西洋紙は、藁、綿布、即ち木綿、及びモミ、シラベ、ツガ、ドロヤナキ、ヨメブリ、トドマツ等の樹材を壓して、細纖となす、要するに、各種の纖維多く錯綜して成ることは、肉眼にても知るを得べし、絲の如きものは、細胞膜の著しく延長して、生ずる、植物纖維主として植物纖維素より成りその長さ、種々あるも、楮は五分乃至七分にしてミツマタに比し、二倍半なり、故にその質も强靭にして、藁紙その他に混して使用す、然れども、纖維粗にして、紙質滑澤ならず、日本紙には天工帖、美濃紙、來藝紙、半紙、小菊、杉原、仙花、延紙、藁紙、雁皮紙、薄紙、糟紙、西洋紙にも新聞用紙、帳簿用紙、薄紙、鳥の子、ボール紙その他種々あり

かみきりむし(天牛)Melanander　動鞘翅類に屬する、混齒にして、長形なり、觸角は甚だ大

にして、十一節より成る、六鰓は能く、發達して、毛髮を切斷す、脚に棘ありて、前翅は革質なり、幼蟲は、木蝨虫と稱し、單眼を有せず、脚を闕く、常に樹幹を穿孔して、害をなす。

かむし Hydrophilus 鞘翅類に屬する混蟲なり、体は楕圓形にして、黑色なり、前翅は革質より、觸は六節乃至九節より成り、別に長き、顎髭あり、前脚の末端には掌の如きあり後翅は第三節より先端に毛、密生し、相待つて游泳に適す、幼蟲は圓柱なり、水中に棲息し、蟯類を食す。

かめ(石蚓)Hollicipes mutilla, Darwin 鞘甲蟲類の蔓脚類にして、海岸の岩礁に付着し、その柄に、小鱗を被り、短なり、その先端に二枚の貝殼を有し、その間より六對の脚を出して、食餌を入る、不完全なる觸角を有す、

かめゐる(龜類) 龜鼈類を見るべし

かめれおん(避役)Chamaeleo, africanus, 爬蟲類の蜥蜴類に屬す、体長一寸許粒狀の鱗を被り、後頭に冠狀の隆起あり 眼圓大、口蹙し脚は比較的細くして、五趾あり、その三趾は前面に向ひ、二趾は後に向へり、故に運動緩漫地中にては行動する能はず、尾、細長にして能く樹枝に纏繞し、舌は、先端乳捧狀なし、盃狀の凹面を有す、その面に常に粘液ありて、小虫を捕捉す、この動物は奇異なる保護色を有し、皮下に、黃色 暗褐色、黑色の色素層ありて、その位置を伸縮し、種々に變色すること自由なり かつ變色と同時に每一眼を自在に運轉す、その性緩漫にして樹上に棲息す、家養して、捕蠅せしむることあり、北亞非利加、南西班牙等に產す。

かも(鴨)Anas, boschas 鞘水禽類なり、家鴨と分ち爲めに野鴨または鴨の字を用ひることあり、家鴨は鴨の變種したるものにて、体大亦家鴨と同じ、嘴は扁平にして、脚は短く、後方に偏倚し、性怯なり、趾間に蹼ありて、游泳に適す、齒は嘴の內面線に類ありて、用をなす、寒地を好むを以て、秋季に山野の湖沼等に游泳するも、春季暖を覺ゆれば、寒地に向ひて去る。その味美なり。

かもしか Antilope crispa, or, Nemorhaedus 鞘有蹄類なり、体長三尺にして、体肥へ、四肢細長なり、蹄は二を有す、全身灰色にして背部に微褐色を帶ぶ、全身に長毛を被り、尾短し、牝牡ともに、角あり、無枝中洞にして前額より生ずる、骨軸を圍繞するも、大ならずして、尖稍鈎曲す、本邦にては秩父、駿河の深山、岩礁間を走行す、亞細亞、アルプス、ヒマラヤ山、印度、ペルシヤ、北米等に產するも、種々多し、角、肉、皮等、有用なり。

かものはし(鴨嘴獸) Ornithorhynchus paradoxus, Blumb 鞘哺乳類の一六類なり、生殖器は肛門內に開口す、口は鴨の如き、嘴をなし扁平なり、尾も亦扁し、趾間には游蹼を有し、牡は後趾にケヅメを有す、その發育も下等にして鳥類に類す、体は稍赤色または暗綠色にして毛密生しラッコの毛皮の如し、嘴を以て泥中の甲虫、水虫類を食し、巢は河岸に空洞を穿ち、二道に通ず、一は水面より高く一は低し砂中に卵產して孵化す、南米の產なりとす。

かもめ 鷗(Sarna 鞘水禽類に屬する海鳥なり体長二尺餘 白色なり、嘴は末端鈎曲し、翼は長く、能く海上を敏捷に飛翔す、趾は三趾蹼を張る、魚類を捕食す、肉は味美ならず。

かや 榧(Torreya nciferas, 圖松柏科に屬する常綠木にして、針狀をなし、扁平なる葉を有し、材は白色にして木理美なりて、固有の香氣あり、雌雄異株なり、種子は食用とし、油を製すべし、材は舶の底部に用ゆ。

からかね 青銅を見るべし

がらがらへび(響尾蛇) Crotalus 動爬虫類の毒蛇なり、体長四尺許、尾端に十八個に及ぶ、角質を連れ、運動の際他物に觸れて、一種の響音を發す、鼻孔と眼の中間に深窩を有す、南米に產し、最も恐るべき毒を有す。

からしな(芥) Sinapis Cernua, thumb 圖十字科の草木なり、花は黃色にして、種子は辛味あり。粉として食、藥用とす。

からす(烏)(鴉) Corvidae 動燕雀類に屬する鳥なり、体色黑、灰色あり、嘴、頭とはその長さを等するを普通とし、頭より大なるものあり鼻孔、鼻鬚の下に隱設し、好んで有害昆蟲を啄除するを以て益あり、また植物性食物を食す性怜悧、能く記憶し、容易に捕ふる能はず、平素群居す、その種類亦少からず。

からすうり(烏瓜) Trichosanthes Cucumeroides, 胡蘆科の草木なり、果實は青色を帶び、漬物とす。

がらすのしゆるゐ(硝子の種類、成分) 圖硝子の種類は各種あるも普通左の如く大別す。

ボヘミヤ硝子、ポッタシユーム、と石灰の硅酸鹽とより成り、能く、熱に耐ふ、藥品の爲に犯さるゝことなきを以て、化學用器具を作る。

窓硝子、曹達と石灰と硅酸鹽類との混合物耐熱大なるもボヘミヤ硝子に及ばず、酸の爲に少し犯さる。

瓶硝子、曹達、石灰、硅酸鹽類(硅酸アルミニユーム、または硅酸鐵を混ず故に綠色を呈す、窓硝子に比して、堅牢なりと雖、浸酸容易なり。

フリント硝子、ポッタシユームと鉛の硅酸鹽の混合物にして、元來瑪瑙石より製するを以てこの名あり、比重甚だ重く、屈折力强し、溶け易く、藥用に供せらる。

エナメルマン硝子、石灰ソシユームの外、酸化亞鉛、酸化硼酸、酸化アルミニユーム等を含み、寒暖計に製す。

裝飾品、望遠鏡、顯微鏡、その他光學用器に用ひらるゝはフリント硝子とす。

がらすのせいはふ(硝子の製法、原料、着色) 圖硝子を製する原料は、その製する硝子の種類により、大小の差あるも、一般に炭酸カリウム、硅酸、炭酸カルシウム、炭酸ソーダ、酸化鉛等にして、硅酸含有物なる、砂、石英燧石、炭酸カルシウムを含有せる、石灰石、大理石、白堊、に炭酸曹達の外硫酸曹達と石炭粉末との混合物を代用することあり、要するに石英砂に石灰と炭酸曹達とを適當に混じ坩堝中に入れ、强熱を加ふるときは液に變化す、この硝子を鐵管または硝子管の先端に附け一端を口に當て。二枚の鐵より成れる、模型の内へ入れ、吹き、壜、ランプ、ホツプ、ホヤ等を製す、皿の如き稍平扁なるものは、熔融液を型中に流入す、板硝子を製するは、圓筒狀に吹きたるものを縱斷して窯中に入れ平板とす、これ窓板硝子なり、鏡硝子は、鐵板上に熔液を置き、圓鐵柱にて壓し展すも、熟練を要し、本邦には、未だ製する能はず、その他の複雜なるものを製するには、種々の切上法を用ふ、着色は酸化金屬を混ずるものにして、種々あるも、普通紫色には二酸化滿俺を赤色には、酸化銅または鹽化金を青色には、酸化銅を、黃色には、酸化鐵を混ずるなり。

からすむぎ(烏麥) Avena Sativa, L, 禾本科の草木なり、穗狀花序は圓錐狀に排列す、家畜の飼料とす。

からまつ(落葉松) Larix Leptolepis, Gorol, 圖松柏科の落葉木本なり、葉は數個叢生し、短枝これを支ふ、材色は白色にして中心は赤褐色を帶ぶ、濕氣に腐蝕されざるを以て船舶、建築等に用ひ、その他器具を製す。

からむし(苧麻)Boehmeria nivea, Bl, 植物麻科植物にして、葉は卵形、下面白色なり、花は單性にして雌花、雄花を一木に生ず、その靭皮纖維よりは、越後縮なる、織物を製す、

かるいし(浮石)Pumice 鑛海綿の如く孔多く、輕く水に浮ぶ、これ熱によりこの如きに至るなり、白灰、黃色にして、黑曜石の上皮となりて、產す、或は小塊狀にて、火口周圍に、吐き散りて散在す、沐浴の際足手の垢を去るに用ひ、かつ器具研磨用とす。フセキともいふ。

かりがね(鴈)がんと異名同物なり。

かるる(蛾類)Heterocera 動蛾の部を見るべし

かれい)鰈)Heteroneetes 動軟鰭類に屬する魚類なり、体長一尺五寸位、体は左右不等にして右側は一樣ならざるも大抵、暗茶色にして斑紋あり、多くその棲所の色に似る、左側は白色なり、体の右側は上向し、左側は下向す、兩眼は、右側即ち背面に位し、右方に偏倚せり背鰭は、眼上の前方より起り、臀鰭と連絡して、尾に終る、腹鰭は小にして、前方より進み、その直後より臀鰭起る、而して、体脣は極めて小なり、至る所の海に產し、海底に棲す

かろくとつ(假肋骨)Costal Cartilage 生肋骨を見よ。

がん(鴈)Anser, albifrons, Gm 動游水類に屬する水鳥にして、嘴はその前端後部より狹く、黃色を帶ぶ、脚は、鴨に比して長く、白色なり、頂、頸、背、褐色を呈し、額部白し、腹部特に胸部には黑斑を有す、体長は二尺許なり、秋來り、春去ること鴨の如くにして、尙早し、池沼に游泳し、小魚を捕食す、鴈の飛翔するや、群を成し、一定の排列を成し、不意の驚愕に遭するにあらざるよりは、決して、列を亂ることなし、古兵法に曰く、雁亂るゝものは、伏なりとあり即ちこれをいふなり、その一名をカリがネ、と稱するは、その鳴聲カリ、の子より轉化したるものなり、その肉も甚だ美味なり。

がんたん(岩鹽)Rock salt 鑛等軸晶系にして、六面体を以て現はる、稀に八面体の結晶あり劈開は六面形にあるも、半、水に溶けたる爲め、六面形の面に、階段をなせる凹を生じ、または塊狀なるものあり、成分は、曹素六〇、七ソジューム、三九、三、及び、多少の粘土有機物を混合す、色は無色、白色等にして、黝、赤、黃、紫色等を含帶す、かつ壓透明なるものあり、硬度二、五、比重二、二五七、鹽味强く、水に溶解し易し吹管にて熱するときは、爆發し、熔解す、炎に黃色の反應あり硬石膏、粘土灰石、瀝青物等と共に、石床をなして現はる、獨國スタスフルトにては、層の厚さ四千尺、一個年の產額二百四十五萬貫、墺國ウヰルチカは四千五六百尺、產額七百萬貫に達し、坑道の延長二十餘里あり、その他英國、我國に產するも、信州越後の產は液体にて現はる、精製して食鹽に代用し、藥用、防腐劑、石鹼、硝子、その他工藥用に使用し、人類生活上缺くべからざるものなり。

かんれいさよう(感應作用)Induction 動植物は諸外物に適合する性、即ち感應性を有す、而して感應性は、幼時に於て、最も强く、成長するに從つて、次第にその力を減少するものなり、然れども、植物によりては、十分なる、成長後も雖、猶その性質の減ぜざるものあり。

かんがるー(更格蘆)Macropus 動有袋類に屬す体長六尺、尾長四尺、全形鼠に似たり、前肢短く、後肢は頗る長く、能く發達せり、尾は强直にして、体の支柱をなす兼て後肢と共に跳躍に便にす、一躍すれば、三四間の距離に達すべし、幼兒は早生して、下腹部にある育囊中に哺乳す、性溫なるも、懦怯なり、濠洲

に產し、肉は食用とす。

がんきう(眼球) Eye-Ball　㊥眼窩內にある、人身の視官にして、殆んど球狀をなし、直徑七分餘、窩內暗黑にして、寫眞器のレンズの如し、實体は、諸種の膜質重襲包裹して成る、第一層皮を鞏膜といふ、眞球色の纖維より成る、堅實膜なり、該膜の中央前面に一圓孔あり、この上を被包する、透明の硬膜を角膜といふ即ち、眼球の前面突出部なり、鞏膜の下眼球の第二層皮を裏ぬ、これを脈絡膜といふ血管に富み、眼球壁の諸膜を養ふ、かつ黑色の色素を含み光線を吸收するに便あり、その內面に網膜あり、黑色の色素を有す、網膜內面中央に一小凹處あり、これを、黃斑といふ、蓋し最も明瞭に物像の影する點なり、これより少しく、中央に傾げる部分に視神經入り來り、網膜內面全部に分布す、この神經の入れる中央部を盲點といふ、視感なき部分なり、

角膜の後方には水樣液と稱する液あり、この直後に水晶液といふ、凸レンス形半固体ありその周圍には透明の薄膜ありてこれを蔽ふ、そのレンスの緣に當る部、延ひて鞏膜の裏面にある環狀筋に達す、硝子体はまた水晶液の後にあり、虹彩とは圓形の薄き有色膜にして、眼球の前部なる鞏膜と角膜と接合部に附着し中心に光線の通ずる一孔を有せり瞳孔といふ、虹彩の後面は概して、暗紫色なるも、前面は人種によりて、褐色、碧色、黑色の別あり、物体より眼目上に射來する光線は或は鞏膜の前部に於て、眼の白色部に到着し、不規則に周方に反射し、或は角膜を通過して、眼中に入る、その光線の外端に位するものは、虹彩膜に到達して、瞳孔を透過して、水晶体上に來り、こゝに屈折せられて、網膜上に到る、斯の如くにして角膜、水樣液、及び水晶体を通過する光線は恰も一個のレンスを透過した

ろ如く、網膜上に輻輳するを以て、茲に物体を生ず、斯く光線に由りて網膜上に受くる棘戟は、吾人の視覺を誘起するものなり、眼の狀形を變ずるは、調節機能の爲めにして、近き物を視る時には、筋の壓迫に由りて、眼目のレンスを少しく前方に推移し、かつ前面の彎曲度を多少增加す、隨て光線の屈折度を強くし、網膜上に輻輳せしめ、物像を鮮明ならしむ、これに反して遠き物を視るときは水晶体を平坦ならしめ、かつこれを後方に推移し以て、像を水晶体より遠ざからしめ、網膜上に到達せしむ、かつまた光線の强弱により、瞳孔を散大または縮少することあり、調節の作用なり、虹彩膜は本經緯の筋纖維を組織して成り、經は、その周邊より瞳孔に向ひて、斜めに透り緯は瞳孔の橫周を繞る、故に經纖維收縮すれば、瞳孔を散大にし、緯纖維縮すれば縮小す、萬像、眼に映ずれば、その來影を

一點に集め必ず、縮小顚倒す、然るに物像の正立するものは、これを正視し、倒立するものは、必ずこれを倒見す、蓋し、これ物像の位置は、何を以て正とし何を以て倒とするか、唯仰て天を上とし、俯して地を下とし、これに比較して、每常觀る自然の位置を正とし、これに反するものを倒とするのみ、神經の作用なり、平素遭見の習慣に由り、視覺の臨機を錯り、偶近きを視るときは虹彩の筋纖維收縮して、水晶体を突起せしむる能はざるにより、人老年に至れば、虹彩膜の筋纖維漸く衰弱し、水晶体漸く扁殺して、硬質に變ずるに由る、要するに視る物像より來る、光線の收束遲きに原くものなれば、寫光レンスを裝する即ち、兩凸眼鏡を用ゆれば、能く見る事を得近視眼は、水晶体圓窿に過ると、水樣液の過多なるによりて、角膜の常よりも、突起するにあり、故に網膜上に無數の散光影を生ぜざ

るため、凸隆の度に適すべき、兩凹レンズ眼鏡を用ふる時は、遠視するを得べし。

がんきん(眼筋)Eye-muscles. 生眼球を運動せしむ六筋より成る、上直筋は視神經鞘の上部に起り、眼球を上轉す、第三對動眼神經の上枝なり、外直筋は、視神經鞘の外側より、一は上眼窩破裂の內端に起り、眼球を外轉す、第六對外旋神經なり、內直筋は、視神經鞘の內側に起り、眼球を內轉す、下直筋は、同上の下側に起り、眼球を下轉す、下斜筋は眼窩底面の內側淚骨槽に近く起り、眼球を外方に回旋し、以上三筋と共に第三對動眼神經の下枝なり、上斜筋は、視神鞘の上內側、上直筋と內直筋の間に起り、眼球を內方に回旋す、第四對滑車神經なり。

がんけん(眼瞼)Eye-lid 生眼球の外部を蔽ふ、上眼瞼、下眼瞼あり、兩瞼の外皮と弓狀軟骨の間に透る環致筋あり、これを瞼近筋と名く眼瞼の、閉蓋はこの筋收縮作用に係る、眼瞼挙筋ありて、開張の機轉を司る、眼瞼は斷へず、瞬動して、球面の汚穢物を掃ひ、傍その裡面より、巻泌する稀液と淡液とを出して眼球を濡潤滑利し、以て運轉を滑澁せざらしむ、眼瞼の內面に血管に富む、結膜あり、上下兩眼瞼緣には睫毛ありて、光線射入の調節をなす。

かんざう(肝臓)Liver 生腹腔の上部に横位し、右季肋骨と上腹部とを覆す、その構造肝の表面は、漿液膜と固有膜とより成り頗る豐大なる赭色柔軟質の臓なり、即ち肝質は原と無數の至細の血管及び膽管を組會する細胞体より成る、また腹內の消化器中に循流せる血液を湊めて、送回する一種の大靜脈ありこれを門脈と名く、この靜脈は肝の實質に入りて無數の細支別を生じ、縱横結合して網狀の毛細管となり、膽管もまた、門脈支別の如く彼是結合以

て網狀を形成す、こゝに二種の網狀管錯綜するを以て、肝の實質はなほ至細の靜脈と至細の膽管とを密に組會して成る、肝臓は含窒素性の膽汁酸、膽色素、及び無窒素性のグリコーゲン等を產出し、これに依りて膽汁を分泌す膽汁は消化に必要なる、成分なるのみならず血球の消耗により生ずる廢物をも含む、故に肝臓は一に排泄器官と兼稱するを得べし、他線と異なる所は血を動脈より受けずして、靜脈より受けて汁を分泌するにあり。

かんざうぢすさま(肝臓ぢすさま)Distomum spathulatum Lkt 吸扁蟲類に屬する、寄生虫にして、多く、東洋人の肝臓に生ずることあり、猫にもあり、その人肝に生ずるときは、惡むべき病を起す、本邦岡山縣下及び、宮城縣下の或地方にありては、一種の地方病因となる、この中間宿主は、如何なる、動物なるや、未知なり。

がんしゃう(岩床)Sheet 鑛溶岩が地に噴出て、地層の間に流入し、層と平行に、廣がりて、凝結したるものなり。

がんしゅ 岩株 鑛溶岩の地層中に、押入りて大塊をなして、凝結したるものなり。

がんしよう(岩鐘) 鑛地球の內部の溶岩が、地層の外面に、出て、堆積して凝結し、大塊は山を成し、小なるを岩鐘といふ。

がんせき(岩石)Rocks 鑛地殼を構成せる物質種々あるも、總てこれを岩石といふ、岩石はこれを種々の、標準より區別す、その生成の由來によりて別つときは。

一火成岩、二水成岩、三變質岩、なり

岩質と生物の狀態により區別するときは。

太古代、この時代の岩層を太古界と稱す。

古生代……古生界……

中生代……中生界……

新生代……新生界……

また岩石を成形せる鑛物は必ず三種以上なり。

がんせきのかんていはふ(岩石の鑑定法) 鑛岩石は種々の鑛物より成るものなれば、同一の岩石にても、外觀を異にし、異質の岩石にても、外觀を同じくすることあり、識別容易ならず、その合分、排列は、肉眼に及ばず顯微鏡力を假りその他種々の器械を用ひ、一岩石の構成鑛物の合力、二鑛物合分排列狀態、三岩石の現出狀態によりて鑑別す。

かんせん(汗腺 Sweat gland) 圖眞皮下の蛛窠質内にあり、宛然絲の如く、皆縠せる、至纖の管より成り、送輸管もまた螺轉して、眞皮の質質を透り、乳嘴神經の間よりその口を表皮に開く、人体にありては、全數二百五拾萬餘あり汗腺は血中の老癈物を分泌し、斷へず、これを全身の氣孔より蒸發せしむ、その氣即ち汗なり、汗腺は体溫を調節するものにして、大氣の乾燥するときは、催進し、濕潤なるときは減ず、また寒冷に遇へば、血液皮表に循ることの少なきを以て、汗は血液中より採るものなれば、汗また少くして、氣孔より蒸昇すること少し、これに反して、体溫或は氣溫の上昇するときは、血液皮表に流るゝこと盛んにして、爲に分泄を增加し頻りに氣孔より蒸泄す、人体の溫度は常に、攝氏三十七度にして、病患あるにあらざるよりは、高下することなく、体溫は、食物より得たる生活組織の燃燒によりて生じ、消失は皮膚に接觸する外物に傳り去るか汗の如く出て、放散するにあり、發汗作用は間斷なく、皮膚面に行はれ、間斷なく食物より得る溫度を、外に昇發せしめ、以て、代謝し調節す、感冒は、氣孔を閉ぢ、汗を發昇せしめず、溫度を昇らしむるものなれば、氣孔を押開き、汗を發散せしめ、溫度を調節せしむれば、平愉す。

かんちく(寒竹) 圖長さ七八尺にして、節と節の間長く、その質また軟なり、一根より、數十幹を叢生し、多く庭園、籬離に植ゆ。葉中に筍を生ずるを以て此の名あり。

がんぴ(雁皮 Wickstroemia Sikokianum, Tret Sav 圖瑞香科の木本なり、樹長二尺許、葉は卵形、花は小にして黃色なり、本邦北部に產し、内皮の纖維は雁皮紙を製すべし、キカンビ、コカンビ等の同種あり。

かんひる(肝蛭) Distomum hepaticum, sp. 圖扁蟲類に屬する、ちすさまの一種なり綿羊、牛馬等の肝臟に寄生し、往々牧畜業に、大損害を來す、肝管に產卵し、卵は、糞と共に、外界に出て、水中に入り、纖毛を簇生せる胚を放つ、胚は、水中に游泳し、モノアラカヒの体内に、穿入し、囊狀体に成長す、無性生殖にして、中に、許多の幼ちすさまを生ず、その狀体、稍成蟲と異なり、尾あり、モノカラカヒを辭去し、更に水中に入り、尾を棹て、游泳す、終に草葉に、附著して、その尾を失ひ、周圍に包囊を生じ、乾燥するも、能くその生を保つ、若し、牛羊の爲に、草葉と共に食せらるゝときは、包囊は、胃液の、溶解する所となり蟲は、肝管に進入して、雌雄生殖をなし、生化即ち、成蟲に、成長するものなり。

がんみゃく(岩脈) Vein 圖地球の内部の岩石が、熱の爲めに溶融され、噴出して、岩石の割目に沿うて、押し入りて凝結したるものなり。

がんめんぶとつかく(顏面骨骼) 生上顎骨、下顎骨、頰骨、鼻骨にして、眼窩内側には淚骨あり、鼻腔の中隔を鋤骨と、口腔の天井をなす、口蓋骨さあり、皆縫合して動かざるも、下顎骨のみは運動す。

かんらんせき(橄欖石 Olivine 圖斜方晶系に屬し、定面像數個の集形をなす。劈開は短側底

面体、分解すれば蛇紋石を生ず、斷口は貝殼狀にして、小晶粒に顯はるまたは粒砂をなす、その成分は硅酸四一、三九、苦土五〇、九〇、酸化鐵七、七一、黃綠色、汚綠色を帶びて、玻璃光澤なり、條痕白色、透明なるものあり、硬度六乃至七、比重三、三乃至三、五、吹管焰に溶解せず、玄武岩の主成分をなし橄欖岩その他火山岩と結晶岩の性分をなし、或は河中の砂に混じて產す、性質の純粹なるものは寶玉とし、火山地方に產し、我國にては、肥前西松浦郡の產有名なり、吾國產にして、長石を含まざる岩石は、該石あるのみ。

き

きあつ（氣壓）Atmospheric Pressure 圖大氣は極めて稀薄にして、通常の狀態にては、これと同積の水に比して、その重量、僅に八百分の一に過ぎざるも、大氣はその高さ大なるが爲に海面に受くる、上層の重量は、非常大なり、一平方糎毎に、約一キログラムに達すこれを一氣壓と名く、この一氣壓力を以て、七百六十粍高の水銀柱を支へ得べし、氣壓を計るは、水銀晴雨計を用ゆ、大氣は上に高く次第に、壓力を及ぼす氣層減ず、かつ上層は益稀薄となり、氣壓は著しく減少す、即ち氣壓は海面に於ては七百六十粍なるも、海面を拔く三千七百米の富士山頂にては、四百九拾粍、ヒマラヤ山頂にては、三百粍に下降す、この理を以て山高を測量す。

きあんちもにーくわう（輝安鑛）Stibnite 圖斜方晶系に屬し、纖維柱狀をなして現はれ、稀に粒狀をなすものあり、斷口貝殼狀硬度二、比重四、五一六、成分は硫黃及びアンチモニーを含む、金屬光澤にして、黝鉛色にして、條痕黝鉛色に鉛色を帶ぶ、殆んど撓性なし、熱すれば、硫黃アンチモニーを發散し、炭面白色の蒸昇物付著す、酸にも、熱にも溶解す、本邦に產するものにては、伊豫市の川の產は結晶大にしてかつ美なり、その名世界に高し、ウラル、メキシコ等に產し、安質母尼を製しかつ藥用とす。

きいちご（Rubus incisus Thunb 圖薔薇科の木本にして、果實、食すべからず。

きうかくき（嗅覺器）Olfactory sensation organ, 圖鼻腔の上部に位する粘膜にして、嗅神經、茲に分布せるものなり、即ち顏面中央の鼻部をいい、分つて外鼻、內鼻となす、粘膜に分布せる、鼻神經の傳來器機能によりて、嗅覺す、就中鼻腔上部は强き嗅覺を起す、人若し僅微の香を聽かんとするときは、空氣を吸上するに證すべし。

きうしんけい（嗅神經）Olfactory nerve, 圖第一對腦神經にして、大腦の下面、嗅神經葉より無數支別し、篩骨の細孔より、出でゝ鼻內に入り以て、周圍の鼻粘液に分布す、就中、上鼻內には密に網布す、かつ嗅覺は、必ず瓦斯狀なるものにあらざれば、感ずることなく、感冒によりて、嗅感を廢するは、鼻粘膜の分泌閉塞し膜面隆起のため、大氣の流通を杜絕せしむるによる。

きうすゐりんどう（吸水運動）圖器官の兩面の組織が、水を吸取する度を異にして、水分のなき方へ、彎曲するものをいふ、ツチガキ、スキナ等これなり。

きうみんばうし（休眠胞子）圖一名を接合子と稱す。假令へばアオミドロ等の藻綠体中に、數多の絲條ありて、その中に相並列し、二糸は相接合して、一球体を形成し、芽胞を形成するものなり、この胞子は、多少の時間を經由

するにあらざれば發芽せず故に名あり。

きうり(胡瓜)Cucumis sativus, L. 瓢胡盧科の木本にして、卷鬚を有す。葉は掌狀に分裂し花は單性、雄雌の異花を同株に生じ、雄花はムダバナと稱し、三個の雄蕊ある、黃色花なり、雌花は稍白色、果實は長く、中央部少しく細し、かつ面に刺を有し、縱條走れり、果實は、酢に付け、また漬物として食す。

きかつるる(蠍歐類)Pseudoscorpionides 節足動物中蛛蜘類の一目なり、小虫にして、体軀扁平なり、その腹は十一環節より成り、諸肢の狀況歐類に類似すと雖、氣管を以て、呼吸すかつ尾端は、毒鉤に代るに紡績腺を以てす、惡蟲の類これなり。

ききやう(桔梗)Platycodon grandiflorus, D C 桔梗科の草木なり、葉は互生にして、托葉を缺き、花は單瓣、寢瓣、色は紫、白ありて美麗なり、同性花序なり、庭園に、栽培せられ、觀賞す。

ききやくるる(鰭脚類)Pinnipedia 哺乳類の一目なり、水中生活に適化したる、哺乳動物にして、体形游水類に肖似すと雖、全身に短毛を密生し、かつ前肢、後肢の兩肢を具有す、前肢指趾の數は五ありて、各爪を具へ厚き蹼膜を以て、連綴し、その狀恰も鰭に似たり、後肢は頗る、体末に位し、短小なる尾を狹む、齒は概れ、三種共に備はりて、齒の形質食肉類に酷近す、眼に瞬膜を具へ鼻孔は閉塞すべく、多くは耳殼を闕如せり溫帶及び寒帶の海中に棲息して、魚介、海藻等を食とし、睡眠するに當りては、岩礁または海岸の上に登る性溫にして、群居を好む。海驢、膃肭獸、海豹、海象の類これなり、鰭足類とも稱し、食肉類に編入する、學者あり)

きぎんくわう(輝銀鑛)Argentite 輝輝銀鑛は銀を製する原料にして、これを燒きて、水銀を加へ、その內より、銀を吸ひ取らしむ、更にこれを蒸發せしめて、銀のみを分離す、輝銀鑛は、その色濃灰色にして、多くは、鑛脈の中に鑛染をなして產す、我國の銀坑は羽後院內陸中尾去澤、飛驒神岡、但馬の生野等有名なり。

きく 菊 Chrysanthemum, 瓢菊科の草木なり葉は互生にして掌狀、緣に小刻あり、托葉を缺く、花は大小、色、一ならず、近來人工を以て、變種盛なり、櫻と共に本邦特產中のものにて、その名海外に高し、種子は胚乳なし、葉根共に驅蟲劑とし、美花の故を以て、栽培せらる。

きくめいし 海花石)Astra 瓢珊瑚類の多放線類なり、海產にして、群体諸ポリポの骨骼が合著して、圓塊狀なせる、石灰質にして、この動物は發芽して繁殖し、その塊狀体の外面に許多の、菊花形を點出し、その中央に口ありて動物はその內にありて、許多の觸手を具ふ、殼は石灰に製せらる。

きくわん(氣管)Trachée 生上端喉頭に連り下端氣管支に達する、管にして、桑々として皮下にあり、軟骨の輪環十六節乃至二十節より成り、纖維質の細靭帶每節を連屬してなる、喉頭より來る空氣を氣管支を經て肺臟に入る道なり、管の內部全面には、微細なる、纖毛密し、かつ少量の粘液あり、毛は常に振動して、空氣と共に入來る、塵埃を、肺の氣胞より、咽頭へ向け輸出し、かつ粘液を以て塵埃を附著し、咽頭より時々に口外に吐出す、痰は即ちこれなり。

きくわん(器官)Organ 生物体はその諸異機能を分擔せる、多少の部分より成る、その各部分を器官と稱す、即ち人体にありては、消化器官、循環器官、呼吸器官、排泄器官、神經器官等の如し。

きくわんし(氣管支 Bronchia 生)氣管の下部が第五胸椎に對する所より二分し、更に北下、細分するまでを氣管支といふ、左氣管支は長くかつ小にして、大動脈弓の下際及び下行大動脈幹の前側にあり、右氣管支は左に比して稍々地平に近く、短かつ小にして、上行大動脈幹及び上大靜脈幹の後側にあり、左右共に肺門に達し、左は二枝に、右は三枝に分れ、肺の各葉に入り小氣管枝となる。

きとろ(氣孔)Stomate 植葉の表面、表面にその細胞の間に、瓦斯体を吸收、發散する、小開口あり、これを氣孔といふ、開閉する、機能を有し、開閉は、氣孔の周邊にある細胞の張縮により、大氣濕潤なるとき、天氣の晴朗なるときは、開口し、植物体内に水分の乏しきとき大氣乾燥せるとき、または夜間はこれを鎖閉するものとす。閉葉細胞といふ。

きとろふう(季候風)Monsoon 地域を限り、毎年季時を定めて、起る風にて、水陸分布の不規則に原因す、我國にては、夏季には南東風多く、冬季には北西風に變ずるもの、これなり。

きとばるとくわう(輝コバルト鑛) 等軸系に屬して、八面体と五角二十二面体及び偏方十四面体との集形をなし、または粒狀、塊狀なることあり、砒素四五、二、コバルト三五、五、硫黄一九、三の成分にして、かつ多少の銑、銅を含み、銀白色に赤色を帶ぶ、硬度五、五、比重六、六三、開管中に熱するときは、硫酸、亞砒酸瓦斯とを發散す、瑞典、諾威、西比利亞等より多額を産し、コバルトを製する原料とす。

きじ(雉)Phasianus versicolor vieill 鶏類に屬する、鳥類にして、体長、雞大にして、頰部を裸出し、疣を有し、嘴強くして、少しく曲り、脚は疾走に適し、雄は距を有し、爭鬪す、その体色は甚だ美にして、かつ美麗なる長尾を有す。常に原野に棲し、穀類、嫩葉、小蟲を食し、益鳥なり、法律は産卵蕃殖期間保護し、その間を禁止して、捕獲せしめず、肉美味なり。

きしやう(氣象) 地空氣の寒温、風の方向、雨雪の多寡により、毎日空氣の狀態は變化す、この狀態を氣象といふ。

きせいくわざん(寄生火山)Parasitic cone 地 火脈の作用にて、火山の山腹若くは、麓に新火山を生じ、火山を開く。

きせいとん(寄生根)Parasitic root 植一植物の根が他の植物体内に浸入して、こゝより養分を收取するものをいふ、ヤトリキの根の如きものなり。

きせいとん(氣生根)Aerial root 動空氣中にありて、水分を收取する根をいい、カシメキランの根の如し。

きせいどうぶつ(寄生動物)Parasite 動他動物の体内に寄生し、それより自家の養分を吸取し、宿生を離るゝときは、一時も獨立の生活をなす能はざるなり、生殖器の外の器管は多く退化す、これ常に用ひるの必要なきを以てなり。

きせき(輝石)Augite or pyroxene 地單斜晶系または斜方晶系、性分は硅酸苦土と礬土となるも種類によりて石灰、酸化滿俺、或は酸化鐵を以て苦土の一部分と交換す、色は、綠色に黑、白、褐、青色を帶びまたは白色なるものあり、玻璃光を有し、時として松脂光、または眞球光を帶び、透明または不透明なり、硬度は五乃至六、比重三、二乃至三、五劈開は柱、底面体と側軸底面体とにあり、片狀、粒狀、纖維狀、乃至堅實なる塊狀をなして現る、條痕は白色または黝綠色なり、その反應は吹管及び酸に對して、角閃石と同じき、結果を現はし、

その種類甚だ多し、大別して、單斜輝石類、斜輝石類、曹達輝石類、及び三斜輝石とし、單斜輝石類は、長短の柱狀をなし、內に透輝石は、無色または淡綠、透明にして、吹管熱に熔解す、普通輝石は、綠色または黝色、透明なり信州、甲州等に產す、黑劉石は、塊狀または片狀、灰または褐色、三河に產す灰鐵輝石は塊狀にして、色は黑綠色、豐後小平より產するものは、結晶美なり、頑火石は、斜輝石類にして、劈開柱面、紫輝石は多量の鐵を含む、曹達輝石類には錐輝石、黝輝石あり、錐輝石はナトリウム、鐵、酸素、ニツケルを含み、黝輝石は白色、綠色なり、薔薇輝石は三斜輝石にして、薔薇色にして、三河の保定より產す

きたい(擬態 Mimicry 動保護的なり、自体を他物に擬似せしめ以て自体を保護するものなり、尺蠖の樹枝の形色をなすが如し。

きたいのちんかう(氣体の運行)植物体の內部に、氣体の交通するをいふものにして、その內部は裂孔に由りて、外氣と相通ずるものにして、その部の氣体は自己の擴張力を以て、裂孔なき部分に充滿し、また氣壓及び溫度の變化により多少縮張す。

きだち(氣道) 植組織細胞が漸々老成するに從ひて、相離れて空隙を生ず、殊に葉の海綿組織の如きは、細胞間に數多の空所を生じ、以て外氣と交通す、即ち氣道なり、空隙の尤大なるは水草の莖、葉にして、內に空氣を含む

きたち(氣道) 動高等動物にありては、空氣の通行して肺に至る道なり、即ち、鼻腔、咽頭、氣管、氣管支、小氣管枝等なり、下等動物にありては一定せず。

きつかちきん(拮抗筋) 動上膊骨の內外にありて一は腕を伸し、一は腕を屈する作用をなす

きつゝきるい(啄木鳥)Pici 動攀木類の鳥類なり、嘴は直にして堅硬なり、嘴根に剛毛を生し、鼻孔は頰に密接して位す、四趾中二趾は前に、二趾は後方に向ふ、鉤爪鋭利にして以て木幹を攀づるに便にす。多くは尾趨の羽軸剛直にして、その尖端を以て、攀緣を助く、舌は細長にして出沒甚だ自在なり、而して、その尖端に逆鉤を具へ、この類は嘴にて樹幹を敲き、中に木蠹蟲のあるを察して、孔を穿ち、舌を以てこれを鉤出す、森中栖息し、樹洞中に產卵す、漂鳥なり、アカゲラ、コゲラ、アヲゲラ、アリスヒ此の屬なり。

きつね(狐)Canis vulpes 動食肉類にして、体長二尺五寸以上、尾一尺五寸、全形、犬に似てその口吻突出す、瞳孔は鉛直に位し、体色赤褐色にして頰喉白く、尾は太にして、その形流蘇の如く、走行するときは、これを水平に位す、食肉類中の他獸の如く、猛性を具へずと雖、諂詐を以てこれに償し、その狡猾諸獸に冠たり、自から穴を穿つと雖、他獸の巢窟を横奪して穴居す、夜中出で、動物を捕食しかつ植物質を混食す、寒地のものは冬季白毛に變ず、溫帶、寒帶に栖し、毛皮は有用なる、も肉は食するに足らず。

きつねざる(狐猴)Lemur 動擬猴類なり、滿面毛を有し、その頭首狐の如く、口吻尖り眼大なり、齒は三種共に備る、四肢共に手にして、毎手の拇は恰も眞猴の如く、他の四指趾と相對して握取の用をなす、後肢の示指に鉤爪を有し、前肢は常に後肢よりも短し、尾は体長と同長して、黑白の環班あり、その性怯かつ惰なり、樹上に棲み、攀緣巧なり、マダガスカルに產し、夜間出で、果實、昆蟲を捕食す。

きている(奇蹄類 Perissodactyla 動哺乳動物の一目にして、概れ大形の獸類なり、指、趾の末端蹄を被り以て地を蹈む、前肢には、四指あることあるも、後肢の趾は必ず奇數にして、第三の趾或は指即ち中指は常に、最も能

く發育せり、門齒上下に備はりて、犬齒は小臼齒は凹凸の咀嚼面を呈す胃は單一にして盲腸長大なり、植物を食とし、鹿、犀、馬の類此に屬す。

きなう(氣囊)Air-sack　動飛翔する、鳥類に有する膜囊にして、肺に連り、胸腹部に位し、かつ諸骨の氣窩と相通ず、自在に肺より囊内に空氣を出入せしめ以て体の比重を增減す。

きなのき(規那樹)Cinchona. succirubra, Pay　植草科植物なり學名をシンコナと稱す、その葉は光澤ありて、對生す、花は小形にして、色白、或は紅色なり、多く深山に株々孤立して生じ、南米の特産にして、三千五百メートルの樹長あるものを最上とす、樹皮よりキニーネ劑を製す。

きぬざる(絹猴)Hapale　動鉤爪を有する猴類なり、体軀倭小、皮毛絹糸の如く、尾は体より長く、黑白の環紋あり、耳に白き長毛を總生す、後肢の拇指のみ扁爪を有し、他は皆鉤爪を有して鋭し、南米殊にブラジルに多し。

きばしり　Cerithia　動蔵雀類の鳥なり、その大さ鶺鴒の如く、背部淡黄にして斑點あり、嘴は弧圓狀をなして、尾翅勁直、その動作啄木鳥に似たり、巧木にして、敏なり、小蟲を食す

きはう(氣胞)Alveolus　解肺臟内の氣管細枝の末端にありて、新鮮なる空氣中の酸素と、周圍にある、毛細管内の血液中にある炭酸瓦斯と瓦斯交換をなして、以て血液を新鮮ならしむる細囊なり。

きはつせい(揮發性)鑛物を試驗管、または炭塊上に熱するときは、全く蒸氣となり、發散し了り、些少の痕跡を止めざるか、或は變形す、これを揮發性と名く、その性は各鑛物により、各差異あれば鑛物鑑定上肝要なる試驗とす。

きび(稷)Panicum miliaceum L　禾本科の草本にして、葉は長く、先端尖れり、花は圓錐花序に排列し、風媒花なり、果實は穎果にして種子は食用とす。

きふしゆさよう(吸取作用)　生胃腸にて已に、適當の消化を受けたる消化物、または水分鹽分糖分等は靜脈これを吸收し、乳糜管は腸より脂肪の主要部分を吸收して、これを血液中へ送る作用をいふ。

きふしゆさよう(吸取作用)　植植物も動物と同じく生活作用を營むために、体内に化學的變化を起し、次第に体質を分解消耗し体外より養分を吸取するの必要を生じ、毛細管引力により、根の微孔より、水分を吸取し、葉よりは氣体を吸取す、これを吸取作用といふ。

きふちうるる(吸蟲類)Trematodes　動蠕形動物中の渦蟲類より派生したるものなることは、その体制の示す所なり、この類は皆他動物の内臟或は、体面に寄生々活を營むものにして、その單立なる体軀は、通例樹葉狀または舌狀なり、口は前端にあり、盂狀肉質の壁を具へ以て、宿主に吸着するを得、これを口吸盤といふ、その外尚ほ腹面に一個の吸盤を具ふるものあり、これを腹吸盤といふ、また尾端に數個の吸盤を具ふるあり、その体面は平滑にして纖毛を帶びず、腸は常に二枚に分叉し、肛門を缺く体面に寄生するものは、眼を具し、体内に寄生するは缺く、大抵雌雄同体にして、脊推動物の腸、肝臟、肺臟等に寄生す、分つて、外寄生類(タコムシ)、内寄生類(ヂストマ)とす

きふばん(吸盤)Sucker　動動物により、その所在、構造ならざるも、皆盂狀肉質にして、中央の凹入するにより、外物に附着するときはその處に眞空を生じ、外氣の壓力により、離れず、以て体を支ふる用をなす、ヂストマの口腹、ハヘの脚先、タコの、疣　ヤモリの趾裏あるものは是なり。

きべつるゐ(龜鼈類)Chelonia 動頗る異形の爬蟲類にして、体扁扁潤なり、函狀の背腹兩甲を具しその背面は穹窿、腹面は平なり、而して多くは頭尾、四肢を甲中に收入するを得、この甲は下皮の化骨したものと、脊椎及び肋骨の相癒合して成りたるものにして、類板相連りて甚だ堅牢なり、その外部は上皮角質に化して生ずる所の鱗を以て覆ふ、該鱗は或は瓦列し、或は角紋をなして相連絡す、世に鼈甲と稱するもの、その一種なり、鱗は頭尾四肢もまたこれを被る、肢は往々鰭狀をなせり、兩顎は齒なしと雖、角鞘ありて一種の嘴を成形し、心臟は二心耳、一心室より成る、この類は淡水、鹹水に棲息し、或は陸上に棲むもありて、多く砂中に産卵す、植物、魚介を餌食し、性遲緩、能く飢渴を忍び、かつ高齢に達す、水龜、鼈、瑇瑁、赤、綠蜥龜の屬これなり、分ちて、陸棲龜類、兩棲龜類、水棲龜類の三種とす。

きほんそしき(基本組織) 植葉、莖、根の基礎をなすものにして、上皮系と維管束に屬さゞる諸組織を稱す、下等植物は次第に、構造單簡となり、全体一樣の組織より成る、これに反して、次第に高等植物となるに隨ひ、基本組織、益々複雜となる、而して、日光の勢力を以て、これより有機物質を形成し、所謂同化作用を營む。

きもん(氣門)Stigmata) 動昆蟲類、多足類の具備する呼吸孔を稱するものにして、普通体側に開口し、内端氣管に連る。

きやうかふるゐ(胸甲類)Thoracostraca 動甲殼類に屬し、淡鹹二水に産し、その十三環節より成れる、頭胸は概ね一甲を以て覆はれ、一對の有柄複眼、二對の觸角、一對の上顎、二對の下顎、若干の顎脚、等數の脚等これに付屬す、腹は六環節及び後端の所謂尾節より成りその環節毎に下面に撓脚一對を生ず、シヤコ、

蝦、蟹、等これに屬す。

きやうくわん(胸管)四淋泡管を見よ。

きやうとう(胸腔)Chest 四肋骨、胸推、胸骨、並に、横隔膜の圍む所をいふ

きやうとつ(胸骨)Sternum 四前胸壁の正中に位し、上下に亙る骨にして、その形羅馬時代の劍に類す、七個の肋軟骨と、鎖骨に接す。

きやうさたうとうきん(胸鎖乳頭筋)Sternocleido-Mastoidens 四耳の後なる顳顬骨の一突起より起り、胸骨、及び鎖骨の上端に對する一對の筋肉なり、頭を強く左右に回轉するときは、頸の前面に顯はる、これ頭部の運動をなさしむるなり。

きやうすゐ(胸推)Thoracic vertebra 四脊推骨の一部にして、十二個の骨より成り、節窩に相嵌入す、皆肋骨を付屬するものなり。

きやうせい(共生,Symbiosis 植全く、物類を異にせる、二生物が同棲して、共に、その生活を營むをいふものにして(一)植物と植物(藻類と菌類)(豆科植物の根と細菌)(顯花植物の根と菌類)(二)植物と動物(淡水海綿と淡水藻)(蟻植物と蟻)等はその例なり。

きやうせい(共棲)Symbiosis 動二動物が、共同に棲息して、共に利益養分の交換をなすものをいふ。

きやうどうとつかく(共同骨骼)動數多き個体の群体をなして、形成せる骨骼にして、海綿、珊瑚樹は即ちこれなり。

きやうどうにく(共同肉)動共同骨骼をなせる動物の肉にして、その一個体が營養を得るとき

は、その一群肉を養ひ得べきなり。

きやうまく(胸膜)Pleura 圖肋膜と異名同物なり。

きやくたんるる(脚端類)Amphipoda 動甲殼動物節甲類の一目なり、河海及び濕地に棲息し、十對の脚、その内四對は前端に、三對は後端に向ふ火蟲の類これなり。

きよくわいがん(凝灰岩)Tuff 圖火山口より噴出したる灰、砂礫等が水中に落ち、沈積して成れるものなり、その質粗、かつ軟にして、緑、白、灰色等あり、砥石に用ひられ、三河名倉砥、上野戸澤砥、越前の寺中砥、伊豫の白砥、安房の房洲石、伊豆の澤田石等、著名なり、加賀、越前にては甑、洗水鉢、燈籠或は磯筑用に供す、長門の赤間關石は、古代の凝灰石なり、硯に製す。

きよくけつ(凝結)Condense 圖氣体が冷により液化し、液体假令べば、熔融したる、鑛物が、その熱を失ひて、固体となるをいふ。

きよくまく(鞏膜)Sclerotic 圖眼球の前面中央部を除きて、外部の大部を蔽へる透明の硬膜なり。

きよく(棘)Spine 動動物の体面に付着する、硬質刺狀をなすものにして、ウニ、エビ、の刺なり、棘には、ウニの如く可動性なるものとエビの如く不動性のものあり、可動性のものは、体面と連絡するに筋肉あり、不動性のものは、硬質を以てす。

きよくずあ(玉髓)Chalcedony 圖一に佛頭石といい、結晶微細にして肉眼を以て、晶体を見る能はず、半透明にして、白、灰、褐色等をなす、岩石の間隙を塡め、または皮殼をなす、球を排列した如き形をなす、瑪瑙はその塊狀なして、雜色あるもの、縞模樣をなせる縞瑪

瑙、肉色玉髓、血玉髓、濃綠玉髓、綠玉髓等ありて、印度、我國にては越中、津輕等に產し、磨きて、飾玉、乳鉢、盃となす。

きよくびきるる(曲鼻猴類)Plosimiae 動擬猴類とも稱す、猴類にして、形狀一般に小形の食肉類に似るも、四肢共に五指を具へ、每手の拇は眞猴に於けるが如く、他の四指趾と相對し、握手の用をなす、後肢の第二指は鉤爪を有し、その他は皆扁爪を具ふ、また前肢は常に後肢よりも短し、面部は毛を被り眼は大鼻孔屈曲して、その尖端に開在す、齒は三種共に備りて、その形狀食蟲類に似たり、この類は東半球の熱帶地方殊にアフリカ、マダガスカル、スンダ諸島に產し、樹上に棲し、攀緣巧なるも、性情、夜間出でゝ、昆蟲、及び小鳥推動物を食す。

きよくびどうぶつ(棘皮動物)Echinoder-mata 動一に芒刺類と稱す、海產なり成長せるものは、星形、球形、蟹蟲類にして多少明瞭に放射同形をなし、大抵五なり、その相稱の點に於て、腔腸動物に類似すと雖、發生の方法、体制の詳細を觀察するときは大なる差異あり放射同形即ち輻狀相對は、時に左右相對に近似するものあり、概れ、その外面に多少の硬棘を生じ、また共に叉棘を有す、叉棘は、その先端二、三爪に分れ、自在に開閉し以て食物を握取し、口に送り、或は、汚物を除去す、皮膚中には、數多の石灰質物体を生じ、以て一種の骨骼を形成す、その形狀一ならず或は數板相接着して、函狀をなし、或は皮膚中可動的に埋在せる、數片より成る、消化器は体腔中を走りこれと交通せず、口及び肛門は相反對せる体部に位し、或は同一の体部にありまた肛門を缺くものあり、呼吸器は特に具備するなし、若しこれあるも、その性狀一樣ならず、循環器は主として、食道の周圍に於け

る、脈管及び体輻毎に分出せる輻狀脈管より成る、血液は無色なり、神經系は食道周圍の神經環及びその輻狀枝より成る、生殖は雌雄同体にして、生殖器は、輻狀に排列す、卵生なりと雖、稀に胎生のものあり、その幼虫は成体と異狀にして、体に數突起を具へ、必ず左右相稱なり、幼虫は變態を經過す、特徴なる一器官系あり即ち水管とこれに連絡せる、歩足なり、水管は海水を充てたる、膜壁管にして、神經系と共に食道周繞せる環狀管及び体輻毎に放散せる、輻狀管より成る、環狀管は沙管により、体面の穿孔体に於て、外通し輻狀管は、その兩側に數多の枝管を岐出す、枝管は各々体壁の孔を通じて外に突出せる柔軟の管狀物に連る、即ち歩足なり、その根基に收縮性の小胞を具へ、收縮毎に水液を歩足中に送達し、以てこれを伸長せしむ、かつ歩足の外端は吸盤狀をなし、諸足交々吸着するにより、体を移動せしむ、歩足は体輻毎に、帶をなして、排列す、これ歩帶なり、諸歩帶の間なる体部を歩間帶といふ、分つて海百合類、海盤車類、海膽類、沙蟲類とす。

きよとづ(距骨)Astragalus 圓脛骨の下端及び跟骨、跗骨に接する骨にして、足頭にあり

きよしてふちり(鋸齒條蟲)Taenia serrata Cuez 動扁蟲類に屬する、條蟲の一種なり、犬腸にあり、その幼蟲は、大豆大の囊蟲にして、兎の肝臟にあり。

きよろく(偽足)Pseudopodia 動下等なる動物の体部より、肉足を突出し、その体を移動せしむるものにして、突出部が任意的なると、突出が一時的なるものなり、アミーバにその例を見る。

きよろね(魚類)Pisces 動淡水に棲る、脊推動物にして、その形概ね圓錐狀かつ多少扁平なるを常とするも、また輻廣く扁平なるものあり、或は球狀なるものあり、頭、軀幹、尾の三部より成る、皮膚は大抵一種の粘液を分泌す、下皮中多數の骨性質、稀に珪質の鱗を被る、移動器は鰭及び体筋の作用なるも、尾鰭の外は退行及び緩動の用をなすのみ、骨格は、軟骨性、或は硬骨性にして、脊推、肋骨あり、推骨は必ず、前後兩面共に凹陷し、かつその中軸に孔を通じ、凹及び孔には脊索を留還す、頭骨は下等魚類は原頭骨より成るのみなるも、硬骨魚は頭骨完備し、その骨數の多き、諸脊推動物に冠たり、上下顎骨の後に舌骨、鰓骨あり、腦及び脊推ありて五部に分れ、眼は他の脊推動物と同一の構造より成り水晶体圓球狀なり、耳は後頭部兩側の骨中にありて、内耳あるのみ、鼻腔は必ず一對あるも、呼吸作用に關係あることなし、觸官は口唇及びその近傍にある鬚の司るところなり、魚類に特殊なるものは、皮膚中を走行せる、脊腔、側線ありて、その壁は神經末端に富みかつ微孔ありて、外氣と通ずるも、如何なる感覺を司るものなりや、未審なり、消化器は頭端或はその下部に開ける、口に初り、齒は顎緣及び口腔に面する諸骨にも生ず、咽頭は左右に數對の腮溝なる、鰓孔を開き、食道は短く、胃、腸、肛門に終る、腹の内面は皺壁あり、幽門の直後に一個乃至數十個の盲帶を帶ぶ、幽盲囊といふ、大なる肝臟、膽囊を具ふ、脊梁直下に鰾を有し、また有せざるあり、呼吸は鰓を以てし、水は口よりして鰓孔及び鰓裂より流出す、また肺を有するものあり、心臟は一心耳、一心室より成りて、喉部に位す、靜脈血は心耳に入り、更に心室に移り、壓出されて、鰓瓣に達し、水中の空氣に觸れて、動脈血となり全体に轉派循環す、血は殷紅色にして冷血なり、腎臟は長形にして体腔脊部にあり、輸尿管は肛門の直後または排

泄腔中に開く、雌雄異体なるを常とし、概ね一對の睾丸若くは卵巣を具へ、輸卵管は、泌尿管と合し、或は然らずして排泄腔と通じまたは直後に外開す、胎生なるものあるも一般は卵生なり、産卵期には淡鹹より鹹淡へ移つるものあり、分つて五目とす。

一、硬骨類、二、硬鱗類、三、扁鰓類、四、盤顎類、五、喉鰓類

きり(桐) Paulownia imperialis, Set Z 圖双子葉にして支蒙料の喬木なり、葉は大なり、花は淡紫、蟲媒花、東洋の特産なり、樹木中心に空洞あり、材質輕く、柔なりかつ濕氣を透さゞるを以て、箱笥、箱、下駄、樂器を製す、筑州の産有名なり。

きり(霧) Fog or mist. 圖雲の低く地面に接して生じたるものをいふ。

きりあさ(苘麻) Aputilon Avicennae 圖錦葵科植物なり、高さ二間に達し花は、五個の萼片と花瓣よりなる、その果實は熟すれば破裂して、種子を顯はす、靭皮纖維を、綱または織物とし、かつ壁を火繩とす。

きりぎりす(蟋蟀) Acridium 圖直翅類に屬する昆蟲なり、觸角は、体長と等くして、綠色、褐色あり、後肢甚長く、能く飛躍すべし、前肢に發音器あり、聽器は前脛節にあり、美聲を發して鳴く、雌は鳴かずし、尾端に長き突出物ありて、先端を地中に突入し、尖端より産卵す、原野叢草の間に栖息し、草根、果實を食す。

きりん(麒麟) Camelopardalis 圖偶蹄類にして有脚動物中最長なり、体長一丈八尺、周高九尺、脚長六尺五寸、尾長三尺以上、前頭に一對の骨質隆起あり、頭長く鋭へ、背斜に後方に下る、脚もまた長し、全身に褐色の斑紋あり性溫良にして、馴れ易く常に小鞭をなす、亞非利加に産し、樹葉を食して、反芻す。

きれつ(龜裂)圖地震の際、地面に大なる、裂目を生ず。

きん(金) Gold　黄金を見るべし。

ぎん(銀) Silver　圖等軸晶系に屬する八面体、六面体にて、枝狀、絲狀、片狀なして現はる純粹なるものの外は、多少の銅、または黄金を含み、銀白色にして、閃光澤あるも、空氣中に晒すときは、黑色を呈すこれ空氣中の微些なる硫化水素、亞硫酸等の爲に、硫化銀を化成するによるなり、電氣、熱の最良なる導体なり、展性、延性に富み、金に次ぐ、吹管に熱するも發烟せず、硝酸に溶解して鹽酸を加ふるときは、白色の沈澱を生ず、硬度二、五乃至三、比重一〇、一乃至一一、一、劈開なし、銀白條痕、延性の强きを以て他鑛物と反別し易し、銀は天然純粹に産するもの少く自然銅、金、鉛、方鉛に混じて産す、銀鑛の重なるものは、

輝銀鑛　銀、硫黄等を含む、
濃紅銀鑛　銀、硫黄、アンモニヤ等を含む、
淡紅銀鑛　銀、硫黄、砒素等を含む、

その他硫安銀鑛、硫安銅銀鑛、硫銅銀鑛、角銀鑛、また銀鉛鐵鑛より産す、石見、但馬、岩代、攝津、の銀鑛　鉛鑛より、近江、飛彈、越前、羽後、備後の方鉛鑛より、生野、院内、尾去澤等よりは自然銀を産出す、製法は種々あるも、重なるものは、鑛石を粉末とし、水及び食鹽を混じ、數日の後鹽化銀を生ず、次に水銀と黄銅鐵の燒きたるものを混ず、銀と水銀の合金を得べし、而後精製するものとす、一は銀鑛を鉛と共に熔融して、銀、鉛の合金を造りて後鉛を分離す、銀は實來なるため、製作をなすには、銅二割を合す、銀、銅等分の合金を四分一といい、この外金銅と共に合することあり、黄金に次ぎ重ぜられ、時計、鞄、食器等の實用、裝飾品、理化學機械

貨幣、藥劑及び箔、粉となす。

きんぎよ(金魚)Goldfish 動体色黄色、尾鰭共だ大なるものあり、金魚は支那の原産にして、我文龜年間輸入せられたるものなるも、元來鯽の變種にして、人爲淘汰を以て、大小、鯖形に種々の變種を生ぜしめたるなり。 **ぎんと**(光魚)Stichopus sp. 動沙嘆類の海産なり、体長三四寸、紡錘狀をなし、頭端に二十本の觸手あり、淺水岩石の間に棲す、奥州、北海道に産し、乾製し、多く支那に輸出す。

きんとん(菌根)Mycorhiza 植顯花植物の根に、菌類が共生するといふ、松柏科、樺木科に於けるが如く、菌絲が宿主即ち根を蔽ふものあり、また菌絲が根の組織中に浸入し、その細胞内に位置を占むるもの即ち、蘭科、石南科の如きものあり。

きんきいはり(禁細胞)動海綿類の纖毛室に群居する、一個体をいふものにして、体の中央に節あり、先端に觸角を有し、これを動かして、水中にある、食物を捕食す。

きんぎりしよくぶつ(菌藻植物)植蕊、葉、根の區別なく、不完全の植物体にして、維管束なく、花を生ぜざるもの、マツタケ、バクテリアの如き、その一例なり。

きんし(菌絲)Mycelium 植菌類の發育機關にして、地中若くは地上に蔓延する、絲狀体にして、簡單なる管狀細胞なり、大抵は柔軟胞膜を具備し、水分を吸取し、胞内の原形質は、數多の核を有し、また數多の空胞を有す、これ即ち胞子が飛散して、空中に飛び、諸方に散布して發生したるものなり。

きんしにん(金絲燕)Collocalia esculenta 植燕雀類に屬する鳥類にして、背部褐色、腹尾尖白く、尾長し、東印度、支那地方に産し、巖穴中に巣ふ、巣は海藻を集め、津液を混和して、營むが故に、食料に適す、支那にては、

これを燕窩また燕窩菜と稱し、貴重す、一巣價二三圓なり。

きんしばい(金絲梅)植蕊本にして、葉は對生にして、托葉なく、種子は無胚乳なり、花は美なるを以て栽培す。

きんしよくぶつ(菌植物)植菌藻植物の分脈にしてマツタケ、カビ、クロボ、ショウロ、等その他人日に觸れざる、細微なるものを含む、普通その細胞は纖狀にして、菌絲を有し、葉綠素を含有せず、また澱粉を生ぜず、常に他物に寄生して、有機物質を宿主より吸收して、生活作用を營むものなり。

きんぞくくわうぶつ(金屬鑛物)Metallic Minerals 動地球原始時代に於て、海陸已に定まりたりと雖、地球内容は、收縮變して、横壓力となり、地殼を隆起彎曲せしめ、爲めに所々に斷層裂罅を生じ、地球内部の熔液は、これ等の裂罅を經て、迸出し來り、地層間に凝聚したるものなり、金、銀、銅、鉛、錫、亞鉛等これなり。

きんと(筋肚)Belly 動筋肉の中央部に赤く、かつ柔にして、微細なる無數の纖維より成り、以て收縮をなす。

きんにく(筋肉)Muscle 動一人体の筋肉の數五百有餘あり、その形狀種々あるも、特別の運動をなすものは、中央太く、兩端に次第に細く、金形紡錘狀をなし、中央部は赤色、柔軟にして、數十萬の横紋筋纖維、集りて細き纖維束を作り、纖維束相集り、束を作り、束、更に相集りて、次第に、一個の筋をなす、兩端に至れば、その次第に變して、白色、稍硬くこれを、腱といふ、中央部は筋肚なり、筋肚は收縮をなし、腱は骨に傳ふ、筋肉はその收縮により、骨片相互の位置を變ぜずして、以て肢脚等を動かすものにて、その兩端は異りたる骨に付着す、而してその身体の中心に近

き著點を起點といい、遠きを著點といふ、起點は筋肉收縮に際して動くこと少なし、筋纖維の鞘は、腱に連りて有す、また別に、骨に付著せず、身体の運動に與からず、内臓諸官に於ける、意識外の運動を司るものあり、分つて、隨意筋、不隨意の二とす。

きんぎめ Chimaera 動扁顎類の魚にして、軟骨類に屬す、長さ三尺許にして、身体を裸出し、白色、銀光を呈す、側線明に現出し頭部に於て、數枝に岐る、鰓蓋皮下に沒し、尾端は至りて細長、その狀絲の如し、雄は頭上に起伏自在なる突起を具ふ、肉は美にして、食すべし。

きんじやうにうとう(菌狀乳頭)Fungiform papillae 舌絲狀乳頭の間に散在する、舌突起にして、末端丸く、細柄を有し、恰も菌の如き形をなす。

きんのぶぶん(菌の部分)蹄上部扁平、傘狀をなすを、菌傘、その内面には、普通、輻射狀をなせる、皺刻あり、これを菌褶、下部の柄即ち菌柄の一部に輪狀をなせるは、菌輪、また菌柄の最下端に、白絲狀物、密生す、これ菌絲にして、菌植物の本体なり。

きんぶく Tetrodon ecelerainus 動固顎類の海魚なり、背黑色にして、側線は廣く銀色を呈す、毎顎に二齒を裸有す、空氣を吸入して、体を膨張せしむる性あり、肉美なるも、卵巣に害あり。

く

ぐうかく(隅角)蹄三個若くは三個以上の面、一點に會する所をいふ。

くうき(空氣)Air or Atmosphere 圖一に大氣

といふ、地球の外面を包圍せる、透明にして味なく、臭なき氣体なり、下層地球に接する所最密にして、上層に次第に稀薄に越き、二里半以上は、人生活し難く、十里に至れば、空氣絶すといふ、主として、七十九分の酸素より成り、少量の炭酸瓦斯、水蒸氣、アルゴンを含む、膨張收縮性を有し太陽の光熱を傳へ、以て、生物を生活せしむ、風は空氣の循環運動より生ず。

ぐうているる(偶蹄類)Artiodactyla 動哺乳類の一目なり、毎脚四趾を具ふる有蹄類なり中央の二蹄は必ず、能く發達し、その狀恰も單蹄の剖裂したるが如く、而して兩側の二蹄は、甚だ不完全或は小形にして地を蹈まず、これを懸蹄といふ、往々上顎に門齒及び犬齒を闕如し、臼齒の咀嚼面に、數多の珊瑚質褶襞を見る、皆植物を食とするも、稀に雜食するものあり、食物を反芻するを否とにより、二別す、

反芻類、駱駝、麒麟、鹿、牛類等なり

不反芻類、河馬、野猪類等なり

くかんこつ 軀幹骨 圖骨骼の中軸にして、軀幹となる骨なり、背梁骨、胸骨、肋骨、骨盤の四骨より成る。

くき 莖 Stalk 圖植物体の上行部にて、葉、芽花を支持す、地下にあるものと地上にあるものあり、要するにその構成の單なるは、維管束を具有せず、單に基本組織系及び表皮系の二部より成るも、その高等なるものは、根に等しく、上皮系、基本組織、及び維管束系の三部より成り、その排列の有樣は植物により種々あるも、莖は植物の日光及び空氣に觸る、面を廣くし、根より養分を運搬する道路または貯所となり、往々葉に代りて生活作用を營む、その形も種々あり。

くきのびたいそしき 莖の肥大組織)(圖)草本植

物、一年生植物は形成層を有するも、増大するることなく、多年生植物は絶へず形成層より新組織を、造成して、肥大々長す。

くこ 拘杞)Lycium chinense Mill 茄科植物なり、家園に植へ、菜に代用す。

くさいりするしゃう(草入水晶)Prase 顆水晶の一種にして、綠色、褐色の細線を含むものなり、裝飾に用ゆ。

くさびらいし(石茸)Fungia sp 動多放線類に屬する。水産なり、概れ、圓板形にて、計多の隆起放線狀に走り、その中央に口あり、他物に付着することなし。その狀芝栖に似たるを以て、この名あり。

くしくらげるる 櫛水母類)Ctenophora 動脆膠動物の一綱なり、粘膠質透明、大抵球狀、稀に帶狀なるを見る、体面に櫛齒狀の纖毛板を排列せる、縱帶八列を具へ、その振動によりて、水中を移動す、二條の長觸絲を有するものあり、觸絲は体面の溝狀陷入中に起り、伸出收縮自由なり、粘質細胞あり、食物を採取す、体には二極を具へ、一極は口に開き、他極には一種の胞狀感覺器あり、口を入りて、食道あり、次に胃あり、胃より二水管を出し分岐して櫛帶の下の八管と通ず、雄雌同体にして、二輻狀相稱なり、海洋面に群泳し、夜間燐光を放つもの多し、シヂベ、ウリクラゲ、ヲビクラゲ等之に屬す。

くじゃく 孔雀 Pavo cristatus, L 鵬鷄雞類に屬し、雄は三尺五寸、雌三尺にして頭羽冠あり雌は比較的美ならずと雖、雄は美麗にして、その体帶綠類黃色にして、余光を放ち、尾翅は三尺八寸許ありて、これを張るときは、その形扇の如く、羽毛に錢斑あり、印度の森林中に産し、羽是、裝飾の用に供せらる。

くじゃくいし(孔雀石 Malachite 鹽單斜晶系、乳房狀、球狀 纖維狀等をなして産す、色は綠色にして、美なり、光澤は玻璃、金剛光、硬度三、五乃至四、〇、比重は三、七乃至四、〇、成分は銅、カルシウム、水、酸素等を含む、淡綠の條痕をなす、酸に溶解す、銅鑛中に産す、三尺以上の大塊をなすものあり、裝飾品に用ひられ、また銅を採る、價五十萬圓に達するものあり、ウラル山、アルタイ山、我國にては、阿仁、荒川、小坂、神岡より産す。

くず(葛 Pueraria Thunbergiana Benth 豆科の草本なり。莖は、纏繞狀をなし、葉は三小葉に分る、裏面白色なり、花は總狀、長穗あり、紅色なり、根よりは、葛の粉と稱する澱粉を製し、内皮纖維は葛布を織る。

くすのき 樟)Cinnamomum Camphora, Nees 樟科の常綠木本にして、高さ十四丈、周四五尺に達するものあり、葉は卵形、花は黃色なり、腕豆大の種子よりは蠟を採る、材邊は淡黃色にして、中心は黑色なり、樟油は該木よりを製するものにして、無烟火藥、人工象牙、驅蟲劑、消毒劑を製し、材は船舶、建築、器具用材とす、本邦に産する樹木中最大なるものなり。

くち(口)Mouth 生口は頭部の最下に開口し、消化器系中の先端に位するものにして、前部に上下の唇あり、左右頰を以て、外界と接し後方は咽頭に連り、舌及齒を有し以て、食物を咀嚼し、また言語を發す、三對の腺ありて、口内に開く、哺乳類は上下二顎ありて、節足動物は、左右二顎あり。

くちなし(山梔)Gardenia florida, L 茜草科の木本なり、葉は硬くして小、花は白色なり、果實は黃色の染料とし、花は食用に供すべし

くぢら(鯨)Whale 哺游水類に屬する、海産なり、頭部巨大にして、全軀の三分の一を占めその前角に圓形の、噴水口ありて時々海水を

喧出す、性温和にして、寒水を好む、皮膚は裸出し、その下層には脂肪に富む、これ冷水中に、体温を保ち、比重を輕くするが爲なり北海道、日本海に產し、鯨髭、鯨腦油を產し肉は食用とす、溫血にして、胎生す、動物中最大なるものなり。

くぢらのひげ(鯨髭) Whale-bone 動齒を有せざる鯨の上顎に生ずる、角質の纖維狀物にして、櫛齒狀整列す、海水と共に小魚を口腔内に入れ、鯨髭の間より、海水を出し、魚類のみ食するなり。

くつわむし(轡々兒) Deetics 動直翅類に屬し、大形なり、その形狀蟷斯に類し、第三對肢大なり、かつその体色また似る、第一對の根部に強大なる、鳴鋏ありて、鳴聲大なり鍬、草叢に栖息す。

くぬぎ(柞) Quercus serrata, Thunb 植殼斗科の木本なり、葉は先端尖り、緣に鋸齒あり、新葉は裏面に白色ありて、卵倒形をなす、材よりは、炭を製し、薪となす。

くは(桑) Morus alba, L 植双子葉植物にして桑科なり、葉は刻あり、花は單性、風媒花なり、果實は青紫色、樹皮は褐色、綠色、材よりは器具を製し 葉は養蠶の用に供し、皮は製紙に用ひ、果實また食すべし全國一般に栽培せらる。

くび(頸) Neck 動体の頭部と胴部の中間に位するものなり、魚類、その他下動物に至りては具備せざるものあり。

ぐびくわ(具備花) Perfect flower 植一花に雌蕊と雄蕊を具備するものをいふ。

くひな(秧雞) Rallus indicus, Blyth 動涉禽類なり、体八九寸、全身淡黑色にして白斑ありかつ赤褐毛を交ゆ、翼は黑、嘴は淡黑、眼上より頰部には灰赤に淡黑なる環文あり、嘴は細弱、直にして、頭部よりも長し、尾は短、

雞に似る、脚は長大にして、夏、秋、田澤に棲し、その鳴聲木柝を擊つが如し、文人墨客は詩歌の料となす。

ぐふう(颶風) 氣大氣施動し、低氣壓部に猛進するをいい、人畜、樹木等を倒し、その猛風名狀すべからず。

くま(熊) Ursus Japonicus, Schleg 動食肉類にして、身体大に肥腴すと雖、能く疾走す、黑色の長毛を全体に被り、毛强直、眼は小にして口吻突出す、齒は他の食肉類の如く鋭ならず尾は短く、喉には半月形の白斑ありて、その下に心臟を藏む、故に人これを狙擊す、指趾各五ありて、全蹠地を蹈む、果實、動物性食物を雜し甘味を好む、本州九洲の深山に栖息し毛皮は坐褥とし、膽、脂肪は藥劑とし、肉は食用とすべし。

くまざさ(隈笹) Bambusa Veitchiana 植長さ五尺に達せざる、小竹なり、葉大にして、白緣あり、鋭なり、多く深山に自生す。

くまばち(黃蜂) Vespaep 動膜翅類に屬し、本邦に產する蜂類中、胡蜂に次ぎて肥大なるものなり、胸部黑色にして、後体に淡黃の輪環あり、靜息のとき、前翅を收めて縱摺し、雌雄及び無性の三種ありて、皆翅を有して、大群をなす、既に受精したる雌は石下、苔下に越年し、溫暖の候出でゝ、强顎を以て、樹皮を分搔し、或は泥土を混じ、球狀にして、外面鱗狀板を覆ふ、巢を營み、雌蜂の孵化に先ち奴蜂發生し、蜜は奴蜂が製するものと、蜜蜂の精製したるものを蓄ふことあり、その刺螫また鋭し。

くも(雲) Cloud 動水蒸氣上昇し、寒冷なる氣流に遇ひ、また濕氣に富みかつ冷却せる土地等に觸るゝときは、水蒸氣は凝結して、微細の水滴となり、高く空中に、浮游す。

くもざる(蜘猴) Ateies 動廣鼻猴類にして、体

長二尺五寸以上、体毛黑褐色にして、両盲孔は大に隔りて、側生す、前肢には拇指なく、尾は細長にして、能く、他物に纏絡するを得その端の下面には毛を生ぜず、四肢も細長なり性情かつ怯にして、一小群をなして、高く樹上に栖息す、南米特産なり。

くもひとでるゐ(蛇遂足類)Ophiuridea　海盤車類の亞綱なり、圓盤狀の軀幹及び五個稀に六個の細長なる腕より成り、軀幹と腕との區界瞭然たり、腕は普通單一なるも或は分岐せるものあり、体の全面は鱗狀の石灰質小板を以て覆ひ、かつ多少の小棘を列生す、歩帶は溝狀をなし、毎腕の下面にありて、特別の板列を以て蓋はる、故に歩足は、該板列の両側より伸出す、口は下面中央に開き肛門なし、穿孔体は口に接して位し、また軀幹の下面に於て、諸腕根基の両側に裂狀の開口數多ありその口内は体腔と相通じ、呼吸門及び生殖門の作用をなす、海底に産し、小蟲を捕食す、テヅルモヅル等これに屬す。

くもるゐ(蜘蛛類)Arachnoidea　陸空氣呼吸の節足動物にして、その皮は柔また剛く、大抵短毛を密生す、その頭及び胸は相癒合し、腹は無環節或は有環節にして、種々形狀を異にし、無肢なり。かつ頭胸は觸角及び翅を闕如すと雖、上下顎二對及び四對の脚を具ふ、上顎は普通強壯にして、左右相並びて鉗狀或は各鉤狀にして、頭端に下垂し、その尖頭に一種の毒線開く、下顎は小形にして、必ず觸鬚と稱する者を帶ぶ、觸鬚は有節にして、形脚に類似す、往々その末端に鉗を具ふ、脚は數個節より成り概ね細長、稀に疣狀をなすものあり、神經系は能く發達し、感覺器には二個乃至十二個の單眼あり、諸肢の末端は皆觸毛を司る、消化器は食道、唾線、盲囊を有する胃、肝臟を以て圍む所の腸等より成る、排泄

器はマルピギ氏管にして、腸に開口せり、血管系は完全ならず、管狀の心臟は腹中背部を縱走し、管壁両側に數口を開き、体腔中にある血液は、この口より管中に入りて、前後に輸送するなり、呼吸は專ら皮面によりて營まる或はまたこれが爲に、体内に特別の裝置を具ふるものあり、則ち管狀にして、分岐せる氣管若しくは囊狀にして、内面に數多の皺襞ある、肺囊これなり、これ等の器官は腹の下面に開ける一對乃至二對の氣孔により外通す、雌雄異体なり、發生は大抵直達にして、數回蛻皮して成長するものなり、九目に分ち

一舌形類　舌蟲
二壁蝨類　ダニ、アタスク、ヒセンムシ
三緩歩類　クマムシ
四長脚類　メクラグモ
五觸脚類　サソリモドキ六蠍類　サソリ
七擬蠍類　ブトシザリ八避日類　ソルフガ
九眞正蛛蛛類　水蜘、絡新婦、喜蛛、蟷螂

くらげるゐ(水母類)Scyphomedusae　腸腔腸動物にして、水産なり、その形、鐘狀、傘狀にして、八幅狀構成をなす、寒天質にして強ならず、その游離緣には許多の觸絲並に有色の感覺器あり、鐘中に走れる幅狀水管は分枝して、枝狀をなし、鐘下に四乃至八條の唇瓣ありて、飄然として、下垂せり、口はその中央に開き、時に數多の口孔を有し、皆唇瓣上に開けり、生殖器は、四個あり、胃壁に生じ、概ね明に透見するを得、卵は繊毛を帶びたる胚　孵化し、外物に付着して、小形のポリプ狀体に發生し、時を經て許多の横分裂繰を生じ、重皿狀をなす、成熟すれば、皿狀体は漸次脱離して、水中に游泳し、終りに變態して水母となる、その形狀により　四目に分つ

一燈形類、二擔鐘類、三擔管類、四海蛇類

くり(栗)Chestnut　闊葉科植物にして、葉は互生花は灰色、雌雄同株にして、異花序なり、果實は蝟密生し、種子は食用とし、樹は器具を

製し、鐵道の枕木に用ゆ。

くるまえび(車節蝦)Penaeus Semisulcatus, Dehaan 動甲殻類に屬する、長尾類なり、その体側扁く、後体長く 五六寸の大さあり、第一二三對の脚端に小鰲を具へ、頭上の突起長し、頭胸部は黑紅色にして、東海、西南海に産し、食用とす。

くれたけ(呉竹) 植小竹にして、人家に近く、栽培せられ、枝葉繁茂す、用供尤廣くして、杖、等を製す。

くろうんも 黑雲母)Biotite 鑛單斜晶系にして黑色、暗綠色ありて、眞珠光澤を放つ、硬度は二・五乃至三・〇、比重は二・七乃至三・〇なり、アルミニューム、カリウム、硅素、水酸素等を含む、花崗石、雲母片岩の古岩石、安山岩、玄武石等の新火山岩中に存じ、近江最大結晶を産す、ウラル山また有名の産地なり。

くろくわね(烏芋)Eleocharis Plantaginea, R. Br. 植莎草科の草木にして、水中に生ず、その地下莖に慈姑に似たる黑色の球を生ず、故にこの名あり、その味美にして、食用とすべし

くろちく(黑竹)Phyllostachys, nigra Munro 植淡竹の一種にして、黑色なるものなり、高さ二間を越へず、細くして、美なるを以て、枝盃柄、等を製す。

くろまつ(黑松) Pinus Thunbergiipari 植松柏科なり、チマツと稱するも、雌雄同株なり、新葉は白色を帶び、葉剛なり、暖地に適し、海濱に生ずるもの多し、落材淡黃色、中心稍紅を帶ぶ、脂肪に富み水中に耐ゆるを以て、水中の杭、船舶材、橋梁材とし、また器具、薪材とし、火力強し、また脂より松香油、根よりテレビン油を製す。

くろーむてつ(クローム鐵)Chromite 鑛等軸晶系に屬し、八面体、粒狀塊をなして産す、鐵黑色または、黝黑色、褐色の條痕、亞金屬光澤硬度五・五、比重四一三乃至四・五、吹管熱、酸に溶解せられず、豐後に産し、藥品 顔料に製す。

くわいとつかく(外骨格)Exoskeleton 動体の外面に有する骨格にして、節足動物、または軟体動物に於てその例を見る。

ぐわいさいはちろう(外細胞層)Ectoderm 動三層より成る動物体の外層を稱するものにして動物が發育するときは、外細胞層より上皮を生じ、また内部に陷入して、神經系を生ず、即ち腔腸動物の如き、または高等なる動物の發生初期の如し。

ぐわいじ(外耳 External ear 生耳殼と外聽道とより成り、内鼓膜に接す、耳殼は耳門の輪廓にして、音響を集合する部なり、その質纖維樣軟骨より成り、皮膚を以て、その上を被包す、内に入る處は、喇叭形の管を成せる外聽道にして、耳殼と同じく、軟骨質を成し、その一層深き處は、硬骨質を成し以て、岩樣部内に藏包す、この部は耳殼外皮延展して、内面に周布し、皮質に無數の腺腺ありて、耳脂を分泌し、以てその處を潤潤す。

くわいじやうがん(塊狀岩)Massive rocks 鑛火成岩と異名同物にして、熔岩の固りて層をなさゞるを以て名く。

くわいじやうしき(塊狀組織)Massive structure 鑛排列の狀一定せず、不規則にして、球狀なるもの、緻密なるもの、疎なるもの、黃鐵鑛、方斜石等に於てその例を見る

ぐわいたちとろ(外套腔 Mantle cavity 動貝殼を有する動物の、外套膜、または外套膜と、体との空隙をいふ。

ぐわいたちせん(外套線)Pallial impression 動外套膜が貝殼に付着しをる分部と離るゝ分部の、堺線にして、その痕跡を貝殼に存す。

くわいたちまく(外套膜)Mantle 動貝殼を有す

ろ、軟体動物の殼下にありて、殼を分泌する膜なり。

くわいちやうどう(外聽道) External auditory meatus 圖外耳を見るべし。

くわいりんざん(外輪山)Somma 圖古火山の底には、往々湖水あり、火口の大なるは、數里に亘り、扉風の如き、絶壁にて、その火口を圍む、箱根、阿蘇の火山にあり。

くわうぎよくせき(黄玉石)Topaz 動斜方晶系に屬し、柱、尖体底面体と頂面体の集形をなし、多くは一端のみ、發育して、両端晶形を異にす、斜方柱の面に縱線あり、底面の劈開著しく、砂粒をなすものあり。淡黄色、赤色、無色、なるありて、強き玻璃光を有す、劈開面或は琢磨して面は、金剛光を放つ、透明なるものあり、硬度八、比重三、四乃至三、六五、成分は、若干の弗素を含む、斷口は貝殼狀、摩擦または熱を加へると、電氣を發し、吹管焰に熔けず、弗素の反應を呈す、花崗石、その他古成岩中より現はれ、氷晶、鋼玉石の内にあることあり、ブラジル、ウラル、メキシコ等に産し、本邦にては美濃、近江、伊勢、甲斐より産し、明治三十五年美濃中津川より産したるものは、一尺餘の大結晶を發見したり、ブラジル産は黄色にして、熱すれば、紅色に變ず、一年の産額百貫に達す、寶石として珍重せられ、指輪等に嵌入す。

くわうくわ(鑛花)Mineral bloom 圖鑛物の光澤を失ふは、これが生ずる爲にして、粉狀をなし、他の鑛物に付着す。

くわうしやう(鑛床) 圖鑛脈の、岩層の間に廣がりて、挾まるものをいふ、石炭、石膏の如し。

くわうせん(鑛染) 圖微粒のもの、岩石中に粉を振り掛けたる如く色彩してなせる鑛脈をいふ。

くわうせん(鑛泉)Mineral spring 圖鑛物質の溶けたるものにして、その含有せる鑛質により、硫黄泉、食鹽泉、炭酸泉、鐵泉の別あるも、要するに、石灰、苦土、曹達の炭酸鹽類石灰曹達の硫酸鹽類、鹽化曹達、並に少量の硅酸、硝酸、燐酸等の鹽類を含む。

くわうせんくつせつ(光線屈折) 圖光線が、透明体なる鑛物の面に、直射するときは、直にその体を眞直に透過するも若し、その方向斜なるときは、光線通過の際、その進路の方向を變ず、これを光線屈折といゝ屈折するに、單屈折、重屈折の二あり。

くわうせんせき(光線石) 圖角閃石の一種にして、綠色の柱晶集りて、光線の射出したる形をなす。

くわうたく(光澤)Ridid body 圖鑛物には、光線を反射するにより、起る所の一種の艶ありこれを光澤といふ、その强弱により類あり金屬、金剛、脂肪、玻璃、眞珠、絹絲光澤の別あり。

くわうびきるるる(廣鼻猴類)Platyrhini 圖猴類にして、南米の特産なり、両鼻孔は大に相隔りて、側向す、皆長尾を有し、多くはこれを以て他物に纏絡するを得、時に前肢は拇指を缺く、頰嚢、髀胝共にあることなし、吼猴、懸猴、これに屬す。

くわうぶつ(鑛物)Minerals 圖地殼を構成せる無機物にして、岩石を組成せる、合分子なり常に一定の化學成分を有し、その質均一なり多くは一定の形狀をなすものなり。

くわうぶつかい(鑛物界)Mineral Kingdom 圖鑛物相集りて、山川海陸をなし、地面には風景を彫刻し、かつその實体を組成するをいふ。

くわうぶつかんていはふ(鑛物鑑定法) 圖一外面形、二全体形、三劈開及び斷口、四硬度、五透度、六光線屈折、七光澤、八比重、九質

の脆靭、十磁氣性の有無、十一電氣性有無、十二色、十三臭、十四味、十五水及酸類に溶解するや否、十六火に溶解するや否、十七火中に焰の有樣及び揮發物の有無等はその概略なり、精細の鑑定は化學力を要すものとす。

くわうぶつしつのじゅんくわん(鑛物實の循環)　鑛山野を被ふ草木、水陸に棲む動物は皆鑛物界中に存在して、その生活を遂げ、その体内に有する灰分は全く鑛物質にして、植物はこれを土中より得、動物は植物より取り、動物の糞尿、動植物の死体の分解するときは、鑛物質は土中に歸りてこれ反覆するをいふ。

くわうぶつのせいいん(鑛物の生因)　鑛(一)火成岩は始め熔解して存せしものにして、冷却するに從ひて、種々の鑛物を生ず、即ち溶体より生ず、(二)温泉は沈澱物を生じ、殊に岩石の割目には多く鑛物を見る故に鑛物は、液体より分れ生ず、(三)火山等の岩面には、硫黄の付着せるあり、蒸氣体より凝固す、(四)古時代に生存したる動植物の遺体は永く堆積して鑛物に化して生ず。

くわうぶつのぶんるる(鑛物の分類)　鑛(一)原始鑛物　(二)沈澱鑛物　(三)金屬鑛物　(四)有機鑛物

くわうぶつのへんくわ(鑛物の變化)　鑛鑛物は水、日光の作用によりて、變化するものなり、長石が粘土に變じ、石灰石溶解し、外觀の變化なきもその質變するものは、撒攪石の蛇紋石と化し、または假晶なす。

くわうみゃく(鑛脈)Mineral Vein　鑛熔岩、温泉が地層の罅裂中を流れ、そのまゝ凝固し、または地層の流域周緣を溶し、以て脈狀をなして存在するものをいふ、その二種は金屬鑛脈、非金屬鑛脈なり。

くわがい(花蓋)Perianth　圖花の萼、花冠共にその色を別つこと能はざるものを合稱するものなり。

くわかう　花莖)Flower axis　圖花軸とも稱し花を着坐せる莖をいふ。

くわかう(花梗 Peduncle　鑛花莖より出でゝ花を着するものをいふ。

くわかうせき　花崗石)Granite　鑛花崗石は、その質堅硬、久きに耐へ、その色は白色にして美なり、火成岩中の最古き岩抹なり、大塊、岩脈、岩餅を成して現はる、その種類により形色に多少の差あり、眞正花崗石は石英、長石　白黑雲母より成り、白雲母花崗石は白雲母、多量の石英より成り、黑雲母花崗は、黑雲母、角閃花崗石は角閃石を含み、輝石花崗石は輝石を含む、攝津國御影の產、有名なるを以て、御影石とも稱し、その他諸所に產す、石碑、鳥居、燈籠、石像、家屋、橋梁等の建築用材とす。

くわくわん(花冠)Corolla　圖內花被ともいい、內部の花被なり。

くわとうげん(火口原)atrio　鑛火口の底の平野をいふ。

くわとうせ(火口瀨)Barranco　鑛外輪山の一部窪みて、火口原より外に通ずる溪流なり

くわざん(火山)Volcano　鑛地殼の洞口にして、地球內部の水蒸氣、瓦斯、熔岩または破片を噴出するものにして、これ等の噴出物は、洞口の周圍に堆積して、圓錐形山嶽を成し、頂上に摺鉢形の凹を生ず、これが平野に生じ、また海底に生ずる場合あり。

くわざんかんせつ　火山岩層 Volcanic　鑛火山噴出物の陸上に落ちたるものをいふ

くわざんくわい(火山灰)Volcanic ash　鑛火山砂の粉末なるものにて、噴出せられて、高く上騰し、風に乘じて、遠地に達し、落下して山野を埋む、火山岩、支武石黑曜石の細片より成る。

くわざんしふくわいせき(火山集塊石) 顯泥流と他の噴出物と共に固りたるものなり。

くわざんしや(火山砂) 顯火山礫の細粒なり。

くわざんたう(火山島) 顯海中ある火山にして、地球內部の瓦斯体等の張力のため、地層を突出せしむ、火山島には噴火口あるものあり

くわざんだん(火山彈)Volcanic bomb 顯熔岩の塊にして、楕圓形なり、火山礫の大なるものをいふ。

くわざんぢしん(火山地震)Volcanic earthquake 顯火山破裂に際し地下に壓迫されたる、水蒸汽の量、莫大なる時は大地震を起す、地震の條を見よ。

くわざんのはれつ(火山の破裂) 顯火山の活動するに際し、地下の噴出物の爲に、山体を膨大ならしめ、時に爆裂作用により、山体を破裂す、而る後勢威頓に衰ふるものなり、岩代の磐梯山の破裂に際し、容積廿壹億三千百萬立方米、山体三分の一を爆裂せり。

くわざんのふんしゅつ(火山の噴出) Eruption of volcano 顯地下の瓦斯、水蒸氣は、地熱のために、膨大し、地殼の弱き一部を破りて、逸出す、時に鳴動、地震を起し、噴出に際し、破壞せられたる、岩片は瓦斯と混じ、空中高く瀰り、滿天暗黑、電光閃き、氣壓に激變を來し、暴風を起し、大雨を降し、吹きて灼熱せる熔岩熱湯噴出し、その狀火焰天を焦すが如し。

くわざんみゃく(火山脈)Volcanic Zone 顯火山は一線上点々羅列するものにして、その地帶を火山脈といふ。

くわざんれき(火山礫)Lapilli 顯熔岩の破碎して、小片をなすものをいふ。

くわし(花絲)Filament 顯花の一部に著きて生じ、雄蕊の柄をなすものなり。

くわしく(花軸)花莖と異名同物なり。

くわじつ(果實)Fruit 顯子房の熟したるものにして、種子を含む、然れども子房の外に花の部分が、果實の一部となるものあれば、果實は花の發育成熟したる部を、總稱するものとなす、要するに果實は外果皮、中果皮、內果皮、種皮、子葉、幼芽、幼根の七部分より成る。

くわじつのしゅるる(果實の種類) 顯大別して單果、聚合果の二とす、聚合果とは、數多の花の雄蕊成熟して、一に集合したるものなり、單果とは雌蕊の單數複數の別なく、雌蕊の熟したるものなり、

乾果は多肉を有せず、極めて乾燥したるもの

肉果は肉多く汁液に富む、

乾果には、漿果(みかん、かき、なす、ぶたう)瓠果(瓜、南瓜)梨果(梨、りんご)、核果(うめ)、莢果は長果、短角、蒴(あさがほ)翅果(もみぢ、とねりこ)堅果(殼斗科)

顯果(稻、麥)瘦果(蒲、たんぽゝ)等なり。

くわじょ(花序)Inflorescence 顯莖或は枝上にある花の排列にして、花梗、花軸の排列と開花の順序によりて、類別す、

第一有限花序、莖の頂端に花を開くものにして、莖の伸長を止むるものなり(繖狀花序、繖狀花序、總狀花序、頭狀花序)

第二無限花序、(花が、皆葉腋より生じ、腋芽の變形にして、莖の伸長に害を與へず、(多聚繖花序、單聚繖花序)

くわずゐ 花蕊) 顯花の中央部に位するる、重要の生殖器官にして、その數一定せずと雖、雄蕊、雌蕊の二種あり。

くわせいがん(火成岩) Igneous or Eruptive 顯塊狀岩とも稱す、地球內部の熔融岩が、地殼の割目を衝流して、地球の表皮に出て、凝固したるものか、表面に近く冷却して、遂に凝固したるものにして、大抵塊狀をなして、

産出す、結晶質にして、生物の遺骸等を含まず、その内に地殼内の最も深き處にし、都に凝固したる、花崗岩、閃綠岩（即ち深成岩）地球表面に出でゝ冷却凝固したるもの、富士岩、玄武岩、噴出岩）等なり

火山岩
- 深造岩……花崗岩、閃綠岩の類
- 噴出岩
  - 舊火山岩、斑岩、紋岩類
  - 新　山岩、富士岩　玄武岩類

くわせいがんちはうのけい（火成岩地方の景）火成岩より成る地方は、多くは、奇勝の地なり、山の石門、石柱に富むは、火成岩の水蝕作用を受たるによる、上野妙義山、豐前の耶馬溪を始めとし、我國にては、この種の風景頗る多く、甲斐御嶽、但馬玄武洞　越後七つ釜、信濃幕岩等これなり、また海岸にても石門、石柱の景をなすもの多し。

くわせき（化石）Fossils　動化石は前世紀の貝殼、海産または陸棲の動物、或は植物等が地層中に埋包せられ、動物消失して、その後に炭酸石灰沈澱し、または植物の遺骸炭化する等その他の作用にて、化石したるものにして、吾人の未だ見聞せざる、動植物多く、かつ、最海棲物の化したるもの多く、化石を含む岩石は、地球上廣く分布せられ、陸地全面の三分の二を占め、太古の歴史なりと雖、必しもその實質の化石せるものと、否さにならず、その化石せる動植物の生活時代が、地學上の現今ならざるものを化石と稱す、故に木葉石は化石に非らずして、却りて、肉の未だ腐敗せざる、氷層中より、發見せる、前世紀動物の遺体は化石と稱すべし。

くわせきてうるゐ（化石鳥類）　動世に知られたるもの僅少なり。就中Archæopteryx と稱する一種は、實てこれを歐洲の地層中より發見し　有名なるものなり。恰も、爬蟲類の如く

嘴に齒を具へ、かつ、長き尾椎を有せり。北米に於ても、化石鳥類を發見せしも同く嘴に齒を具へたり。これ等亡族を一括して齒鳥類さも云ふ。

くわたく（花托）Thalamus　動花梗の頂端　花著部なり。その形狀により常形、變形の二部に分つ。常形花托には、バラの如く、花托面凹入をなせるものあり。また、オランダイチゴの如く凸出せるものあり。變形花托には繖形科の如く、果柄をなし、セキケイの子房柄なすもの、ハスの花托の如く、異形なるあり

くわちう（花柱）Style　動子房上の柄をいふ。

くわつとうるゐ（濶口類）Colubriformia　動蛇類中の大なるものなり。口豁大に開くを得、齒は皆同大同形にして、概ね無毒なり。黃頷蛇、ナメラ、ヂムグリ、赤棟蛇、ヒメカリ、蟒蛇、ボアの類、これに屬す。

くわつせき（滑石）Talc　動斜方晶系に屬し、片狀、纖維狀、塊狀をなす。成分は、珪酸六二・八、苦土三三・五、水分三・七より成り、綠、綠白、黝綠、または橄欖綠色を帶び、眞珠光を發す。劈開底面完全なり。半透明、比重二・五乃至二・八硬度一乃至一・五、脂の感觸ありて、撓性、斷性を有す。吹管焰及び酸類に熔解せず。凍石はその一種の緻密なるものなり、多く太古岩石層より現はれ、滑石片石、その他の岩石の性分をなし、或は陽起石、橄欖石より變生す。上野　阿波、伯耆等より產し、窯石、耐火煉瓦石に用ひ、または摩擦を減ずる用をなす。

くわつはいきん（濶背筋）Latissimus dorsi　動脊椎筋の下にある大筋にして背柱及び腰骨より起り、上膊骨上部後面に付着し、胴の大半を占め、腱は膜狀をなし　腕を後面に向ひ引き下る用をなす。

くわつぶつきせい（活物寄生）Parasitism　動植

物が他の動植物体に寄生し、以てその營養分を奪ひ、自己を養ひ、その宿主を離るゝときは、一日も獨立生活する能さるなり。

くわのうきん(化膿菌) 圖動物中の化濃する、膿物等に存在するものにして、點々卵形をなす、その種類中、普通なるものは、黄濃產菌、白膿產菌とす。

くわひ(花被)Perianth 圖花の外部にある、萼、花冠の二個を合稱する、花蕊の保護をなす。

くわふん(花粉)Pollen 圖雄蕊の葯内ある、細微の粉末即ち精蟲なり、その個々を花粉粒と稱し、花粉末の固塊をなすものを、花粉塊と稱す。

くわふんくわ(花粉花) 圖花粉に富む、花にして、多くは甲蟲媒花なり。

くわふんのてんぱん(花粉の傳播) 圖雌蕊が受精する方法二あり、自花の花粉なること即ち自花交接と、他花の花粉なること即ち他花交接なりと雖、その雌雄成熟を異にするを以て、自花交接をなすもの少し、その花粉即ち花精を雌蕊に輸入するは、水、風、蟲類、鳥類の媒助による、水媒は水生の、植物の、水上に落下したる、花粉が水の流動により他の雌蕊に輸入せらる、風媒は、その花香氣なく、蜜なく、花粉乾燥せる爲に、鳥、蟲を招く能はず、風の爲に飛散せられ、他花の雌蕊に付著す、これに反して、鳥類、蟲類の媒助をなす、花は美にして、香高く、蜜を貯ふ、故に媒鳥、蟲は、その香、蜜に誘はれて、花上に來り、その脚、翅翼に花粉を付著し、更に飛びて、他花に止まり、付著せる花粉を、その花に落し、更に花粉を付著して飛び去る。

くわへい(果柄)Carpophore 圖花托の一部分が、個々の子房間に伸張して 柱狀をなせるものなり。

くわみつくわ(花密花) 圖花密に富み蟲類、鳥類を誘ひて、花粉の傳播せしむるものをいふ、ナタネ、ウメ等なり。

くわね(慈姑)Sagittaria Sagittifolia L. 澤瀉科の草木なり、淡水草にして、葉は箭形をなし、長き葉柄あり、地中に球莖を生じ、これを食用とす。

くわんがるみ(管牙類)Solenoglypha 動有毒なる蛇類にして、頭は三角狀をなし、牙は毒液の流通すべき孔を穿通して管狀なり、常にはこれを、内伏すと雖、口を開けば、起立す。尾は比較的に短し、マムシ、ガラガラヘビ等これに屬す。

くわんじやうくわん(環狀管)Ring tube 動棘皮動物の水管の一部にして、その食道を圍繞せる。環狀をなせる管にして、砂管を經て、体面の穿孔体に於て外通す。

くわんせつ(關節) Joint 生二骨相連接する處を云ふ、關節の脱ることなからしめ、運動を圓滑にし、相衝突するを防ぐため軟骨板を以て、その間に挾む、また白色の靭帶ありて、骨端を包み、容易に脱臼することなし靭帶の裡面、表面には蛋白樣の骨膜液を分泌し、以て關節の摩擦を防ぐ、運動に種々あり球窩關節、肩、髖等の如く、一方球狀なし、一方窩狀の中に挾まり、八方に回轉す蝶番關節、肘、膝等の如く、一方のみ運動するもの

回轉關節、頭部の加く、周圍に回轉するもの

くわんせつ(環節)Somite or Segment 動甲殼類等に於ける、頭胸部、肢の如くミゝズの節の如く、外部に顯るゝと否によらず同器官を同位に有し反覆せる部分をいふ、体節とも稱す

くわんせつき(環節器)Segmental organ 動體形動物の環〃毎に一對づゝ具する、排泄器をいふ。

くわんせんえふ(完全葉 Perfect-leaf 圖葉身、葉柄、托葉より成るもの。

くわんせんくわ(完全花)Complect flower 圖花の蕚、花冠、雄蕊、雌蕊を有し、完備せる花をいふ。

くわんせんへんたい(完全變態)Holome-tabola 圖卵、幼蟲、蛹、成蟲の畫然たる四期を經過して、變態成長せるものにして、甲蟲、蝶、蜂、蛾、蠅の如し。蛹は、自在運動をなす、かつ、その形、幼蟲、若くは、成蟲と著しく、異なるものなり。

くわんちりるる(環蟲類)Annelides 圖蠕形動物にして、延長して、圓筒若くは扁平狀なり、その体軀には、許多の環節相連りて成る、泌尿器は、内は漏斗狀をなして、体腔中に開き、外は小孔を以て、外通、通常環節毎に一對ありて、往々生殖物輸管の作用を兼ぬるものあり、血管系は常に能く發達し血液は無色或は赤色なり、口は前端に開き、直なる消食管を通じ、尾端に肛門を開く、神經系は食道の直前にあり左右に接續神經を出し、食道直下に於て、一神經球に合し、以て神經環をなす、また環節毎に、その腹部に、一神經球ありて、縱走せる二條の接續神經により相連續す。これを神經球連鎖といふ、頭端に一對乃至數對の眼を有するもの多し、ヒル類、毛足類に分つ。

くわんぼく(灌木)Shrub 圖その莖木質または稍木質にして、甚だ大ならず、かつ甚だ高からざるものにして、多年、または二三年、生存するものなり、亞灌木、木灌木に分つ、木灌木は、全莖木質、新生部年々枯死せず、大にして、高し、亞灌木は、或は下部のみ木質、新生部年々枯死し、大ならず、高からず。

くわんはるる(綴歩類)Tardigrada 蜘蛛類にして、口は物を吸收するに適し、脚は挑狀にして、その第四對は尾端に位せり、心臟及び呼吸器は全くこれを欠く、その体軀皆微小にして、苔藓上或は水中に棲息し、能く乾燥に堪へ歐洲人のBeer-animal クマムシこれなり、その運動、体形、熊に似たるを以てなり。

くわんめんぎり(完面像)Holohedrism 圖等軸晶系の原形をも稱すべきものにして、等軸晶系に於て、成立すべき、凡ての面の完備せる晶体なり。

くわんもう(冠毛)Pappus 圖菊科植物に於ける如く、萼片より數多の絲毛狀物を生せるものをいい、その羽狀なるものを、羽狀冠毛と、絲狀なるを、絲狀冠毛といふ。

くわんらくちしん(陷落地震)Depressive earthquake 圖地震を見よ。

ぐんせいるる(群棲類)Polyzoa 圖軟体動物中の最下級に位するものにして、淡鹹兩水に棲し常に群棲して、網目狀をなす、その体は内外二皮より成り、外皮は角質にして、内皮柔軟なり、口の周圍には、數多の纖毛を生じ、纖毛は呼吸器と、水中を游泳する、食物を口中に送るの用とを兼ぬ、他の固形物に付著して、移動せず、恰も植物の如し。苔藓蟲類ともいふ。

ぐんたい(群体)Colong 圖海綿動物珊瑚類の如く、數多の動物が、共同の肉体、骨骼を有し、集合生棲するものをいふ。

け

けいくわ(花華) 圖石英質にして、溫泉等の地面に灰、白、褐の粗き孔多き皮殼を作るものなり。

けいくわぼく(花化木) 圖木材の化して石英質

となるものにて、木理明なり。

けいこつ(脛骨)Tibia 圖膝と、足頸との間にある大骨にて、腓骨の前方にあり。

けいさう(硅藻)Diatom 圖淡水、鹹水中に產する、黃褐色の單細胞植物にして、その細胞膜は、硅酸を含み、頗固く、その形箱を合せたるものに似て、表面に點紋あり、微細なる孔隙より、原形質出て、体を移動す、常に他物に沿ひて、游泳し、或は付着す、生殖は、分殖法なり。

けいさうしよくぶつ(硅藻植物) 圖兩藻植物の一分派なり(硅藻參照)。

けいさうど(硅藻土) 圖硅藻の殼片堆積沈澱して、石英質を含みたるものなり。甲斐、北海道の池邊、池中より產し、研金用に供し、爆發火藥の原料とす。御土ともいふ。

けいずる 頸椎 Cervical vertebra 圖脊梁骨の上際頸にあるものにして、七個の骨塊々相結節して成り、個々左右後の三方に少し、下向せる、橫突起あり、その中央を、背髓動脈通貫す。

けいせいそう(形成層)Cambium layer 圖靱皮部と木質部との中間にありて、新物質を充し、內部には新木質層を增し。外部には、新靱皮層を增成する、作用をなす一群の組織にして、細胞核、原形質を有し、液膜ありて、細胸液を含み、かつ生活力を有する細胞の組織する所なり。

けいせき(硅石)Quartzite 圖石英の結晶粒り、互に押し潰されて、細粒の塊をなし、或は全く結晶をなさいるあり、その質硬し、砂中にも、碎粒し混す、硅板石はその一種なり。

けいたいがく(形体學)Morphology 圖動物体の發生中、及び已に發生したる者の內外形狀を書にする學にして、更に分つて發生學、解剖學の二學とす。

けいと(鷄冠)Celosia cristata L. 苋科草木なり、鷄冠狀の花序ありて、赤色美麗なり、葉は食用とし。人工の結果多數の異種あり、栽培す。

けいなちゆ(鯨腦油) 圖多く眞甲鯨の頭部にある軟骨洞にある、油樣の半液体にして、死後凝結して、鯨腦を形成し、これを精製すれば、白色鮮明無臭無味の油なり、黃色なるもの有り。

けいばんせき(硅板石) 圖試金石とも稱し石英質にして、硅石の種なり、黑色にして、金質の眞否を鑑定するに用ゆ。

けいぼく(莖木)Tree or arbor 圖多年生にして、木質固く、樹幹極めて高し、これを莖木と名づく。

けし(罌子粟)Papaver somniferum L. 圖熱帶產にして、罌子粟科一年生草本なり、花は白、紅、紫、にして蟲媒花、果實を傷け、乳汁を採り、乾燥して阿片を製す、鎭痛劑、催眠劑とす、印度、埃及、支那に產す。

けぢけぢ(虫蜉)Sculigera 圖節足動物の多足類なり、長さ寸許、背板八板、腹板十五枚、その脚細長にして、十五對あり、その走行迅なり、觸角及び終りの一對脚は極めて長し、かつ脚は觸鬚を司る、夜間出て、小蟲類を食す。

けつえき(血液)Blood 圖血液は動物体を巡ふ液にして、その色、成分、冷溫同にからざるも、人体にありては、溫度ある、濃厚なる赤色液の如く見ゆるも、顯微鏡を以て視るときは、無色透明なる、液体中に、無數の球板狀体を浮游せしむるを見るべし、無色液を血漿といふ、血液の赤色なるは血漿中の固形分に色素あるがためなり、血液中の球板狀体には、淡黃にて圓盤狀なるもの、球狀にて無色なるもの、二種あり、色素を含むを赤血球、無色なるを白血球といふ、赤血球は集りて赤

色をなし、白血球は溫度を與ふれば運動す、血漿は稍淡黃なる血清及び血液を凝固せしむる、纖維素より成り、血液は以上の外に乳糜を含む、赤血球はその形錢を緡に貫きたるものにして、微細四百個を列べ漸く一分に達し、その數も極めて鴻大なるものにて、一立方糎中五百萬を含有す、赤血球は主として血色素と稱する一種の蛋白質より成り、透過光線に於ては、類綠色を呈すも、厚層を成すときは、赤色を呈す、また少量の鐵を含み、容易に酸素と結合しまた忽ちこれを失ふ性を有するが故に、肺内にて新鮮なる空氣に觸るゝ時は直にその酸素と結合し、酸化血色素となりて色も鮮明を增し、後に一旦心臟に歸り、鮮紅色にて出て、各組織を養ふ、炭酸瓦斯を含むこと多きに至り、暗紫色に變ず、白血球は赤血球に對し五百分の一を含むに足らず、ヒユーソン氏の發見に係る暴暗細顆粒の球子をなし、哺乳動物にありては、常に赤血球より、大なり、その形全く球狀にして多くは、中心外に位する著明の核を有し、醋酸を加ふれば一層明瞭となるまた、白血球は赤血球が全身を循環し、各組織を養ふため、その一部の破壞するときは、形狀を變じ、赤血球に化して、以てその補充をなす、かつ運動を營む、血液は血管内に於ては、流動体なるも、一旦体外に出づれば、忽ち凝固し、尙棄て置けば、縮少しその外面より、黃色の液を滲出すべし、これ不溶解性蛋白質を有せる纖維素の血漿より、析出するによる、纖維素の析出は、亞爾加里性の減少に基き、この減少は、酸類を生するに因る、血液量はその動物の種類によりて異なり、人体にては、体重の十三分の一即ち約二升五合に當り、初生兒は十九分の三、犬は十三分の一、家兎は十八分の一鳥類は十一分乃至十三分の一、魚類は六十三分の一なり、若し、多量に出血するときは、忽ち衰弱して、死すべし、故に凝固の性あるは、出血を止むる自然の妙用なり。

けつえきじゅんくわん 血液循環) 生 心臟及び血液の部參照、血液の全身を一周するには、二回心臟に入る、この全身循環を大循環、心臟より出て、肺に入り、酸素を採りて、再び心臟に歸るを肺循環、または小循環といひ他に門脈循環と共にこれを三循といふ、

けつきう(血球)Blood corpuscle 生 血液の部參照

けつくわん(血管) 生 動脈、靜脈及び毛細管をいふ、靜脈は多枝に分岐せる管にして、その壁彈力性を具へ、一部は收縮性を有す、而して分岐は大動脈より、始まり毛細管に向ひて益々增加し、毛細管に於て、最多限に達し、靜脈に入りて、再び漸次減少して、遂に集合して、大幹をなし、上下大靜脈となりて、右前房に開口す。

けつしやう(結晶)Crystals 鑛 四個以上の平面を以て圍まれ、常に天然の法則に從ひ、一定の面、稜、隅角を有する、鑛物形狀なり面とは結晶を圍む所の平面をいい、稜とは結晶の二面相交る所をいい、隅角とは、結晶の面が三個若くは三個以上一點に會する所をいふ。

けつしやう(血漿)Plasma 生 血漿とは血液なり、血球を除きたるものにして弱亞爾加里性の反應を呈する、稍々濃厚の透明液なり。

けつしやうけい(結晶系) Crystallographic Systems 鑛 凡ての結晶を假定せられたる晶軸の數、位置、及び長により六晶系に分つ、等軸晶系、正方晶系、斜方晶系、單斜晶系、三斜晶系、六方晶系これなり。

けつしやうしつ(結晶質) 鑛 結晶は同一の鑛物にても、數種の形狀をなせるあり、また種々の障害によりて、完全なる形狀をなさず、或

は結晶集合して、粒狀、纖維狀、片狀、葡萄狀、腎狀、鐘乳狀等の形をなすものをいふ。

けつしやうたい(結晶体)Crystal bodies　醫固体の鑛物は、千態萬狀を呈せるも、規則正しく、一定の形狀をなせるものを結晶体といふ、方解石、水晶等の如し。

けつしやうたい(結晶体)Crystals　植細胞液中にある、炭酸石灰、硫酸石灰、蓚酸石灰等を含めるも、無機物質が、六面体、八面体、針狀等に、結晶し、細胞膜、或は細胞内に現るゝものをいふ。

けつしやうぢく　結晶軸　Crystal axis　鑛結晶体の中心を貫きて走る所の、數個の直線を假想し、この相像線に對する、關係に因りて定むるものなり、この相像線を、結晶軸と名く

けつしよく(月蝕)　Sunar eclipse　醫月は地球の衛星にして、常に地球の周圍を回轉す、然して地球が太陽と月の中間に入り、爲に、太陽の光線を遮斷し、月の一部、或は全部を見る能はざらしむ、これを月蝕といふ。

けつしるる(齧齒類)Rodentia　動胎盤を有する、哺乳獸なり、概ね小形にして犬齒は全く闕如し、門齒と臼齒の間に廣濶なる間隙を存す、門齒は通常上下共に各二個を具へ、皆その前面のみ、黃色乃至赤色の琺瑯質を被りて、遊離緣は、鋭綫を呈し、形狀恰も鑿の如く以て能く齧噬す、稀に上顎二門齒の直後に更に小形の二個あることあり、臼齒は數一樣ならずして、多くはその咀嚼面に壁狀琺瑯線を見る、上唇は正中にて、相分裂し、觸感を司る所の鬚を生ず、後肢は概れ、前肢よりも長く、指趾の數は四乃至五にして、各鉤爪を有し、金蹠掌を以て地を蹈む、この類は地上或は樹上に棲息し、性怯懦にして、運動迅動なり、多く植物質のみを食す、また雜食するものあり、鼠、テンヂク子ズミ、豪猪、兎海狸、栗鼠、等これに屬す。

けつせい(血清)Serum　醫血球及び纖維素を除きたる血液にして、清澄帶黃白色の液にして、亞爾加里性反應を呈し、而して蛋白質、脂肪、曹達、加留謨　加爾其燐酸、乳酸　糖及び炭酸、酸素、窒素の諸瓦斯を含有するものなり

けつりしき(結組織)Connective tissue　醫体中諸器官の間にありて、これを結締保護し、若くは支持するものなり、その者は、細胞及びその生する細胞間物質より成り、數種の別あり、細胞は形紡錐、楕圓、圓球、枝狀なり、細胞間物質は極めて少なきこと、また頗る多量なることあり、性質は粘液樣なるあり、纖維に變化せるあり、極めて緻密なるありまたは加兒基鹽を含み硬質なるあり、纖維狀の結組織細胞中或は脂肪を含むものあり。

けつちやう(結腸)Colon　醫大腸の大部分を成せるものにして　体の右腹下部にあり、上行結腸は小腸に接する、腸部に初まり上行曲折して、胃の下部を左に向ひ横行結腸となり下行結腸は左方にて下部し、更に迂曲して終る、結腸は、水分を吸取する、作用をなす。

けつめんざう(缺面像)Merohedrism　醫對稱面に感じて、現出すべき、面數の半數、若しくは四分の一に相當するもの〻外、現はれざるものをいふ。

けふとりるる(狹口類)Opoterodonta　動蚯類にして、その形小形、頭短く、口は狹小、尾は甚だ短小なり、希脈、小亞細亞等に產する Eylilops は、その習性蚯蚓に似て、地中に棲み、昆虫を食す。

けふびさるるる(狹鼻猴類)Catarrhini　動東半球特產の猴類にして、兩鼻孔は相接近して位し、尾は短小、或は、長きも纏絡の用をなさず、類人猴に至りては、外尾なく、多くは、頰囊、臀胝を有す。類人猴(狒々、猩猴　サル、

ヲナガサル(類人猴(黑猩々)大猩々、猩々、テナガザル)等これに屬す。

けやき(欅 Zelkowa acuminata, Pl. 圖楡科の喬本なり。高さ十數丈、周圍二丈餘に達するものありて、樺に次ぐ、大木なり。葉は卵狀、花は單性、花柱は中央外に位し、樹皮は、灰褐色、細小の突起を生し、皺紋を表はす、材色褐色、質硬なり、建築、器具、器械を製すべき、良材なり。

けら(螻蛄)Gryllotalpa 圖昆蟲類の眞正直翅類なり、全身一寸に達せず、背部褐色にして、翅も比較的小なり、複眼、個を有し、第一對脚强大にして、發掘に適し、鼹鼠の前肢と一般なり、常に圍圃の地中に栖息し、小麥、蕪菁等の根を害す。六七月の交交尾し、その兒五回脫皮し、翌年五月に至りて、悉發育す、雌多くその兒を食ふ。

けん(腱)Tendon 圖筋肉の兩端にやゝ細く白色なる部をいふ、堅厚なる、蜂窩質より成るその形、概ね遍帶、若くは紐條にして、その外に同質の莢膜を被るもの多く、また、淵く延長して被膜狀をなすものあり、筋肉よりも知覺遲鈍なり。その骨に附着して、以て筋肚の運動を骨に傳ふるものにして、收縮することなし。

けんいう(原油) 圖天然の石油にして、臭氣ある、黑褐色の濃厚なる液体にして、稍透明、揮發性を有す 動物の地中に埋沒して、油化し、砂岩、粘板岩等の地層中に貯溜して、湧出つるものなり、精製して、石油とす。

けんかふとつ(肩胛骨)Scapula 圖三角形の扁骨なり、この骨は胸骨相接する、左右の肩隅に位し、その上際は、膊骨の樞頭と接す。

けんくわしよくぶつ(顯花植物)Phanero-gamae 圖莖、葉、根の區別を有し、眞正の維管束を具し、かつ、花を開き、果實を結び、種子を生じて、蕃殖する高等なる植物なり。

げんげ(紫雲英)Astragalus Sinicus. L 圖豆科草本なり、花は紫紅色にして甚美なり、春時田園に滋生し、開花す、關西に多く、よく繁殖す。

げんげいしつ(原形質)Protoplasm 圖細胞を組成せるものにして、生物の体軀を成す、各多の物質中、最も緊要なる生活物質なり、化學上より論するときは、炭素化合物の一にして、蛋白の一種なり、即ち炭、水、窒、酸の四原素を含み、柔軟若くは粘液狀をなし、顯微鏡に照すときは、顆粒狀の觀を呈し、その性質中、最も特殊なるは、左の諸徵候を呈す、一收縮性を有し、自在に狀態を變じ、または運動す、二刺衝性を有し、他より來る刺激に反動す三甚だ分解し易く、その實質の消耗により生ずる老癈物を排除し、これの補充に滋養分を以てす、四一定の度に達するまで、成長す、五分殖して、二個若くは數個体となる。

げんげいしつ(原形質)Protoplasm 圖細胞の最も必要部分にして、生活力の根本なり、蛋白質、水及少量の無機鹽類等より成立し、質柔軟 顆粒狀をなし、半透明なり、原形質中の核、分裂して、細胞繁殖す。

げんとつ(顴骨)Malar bone 圖頰の上端、眼窩の下前面にある骨にして、下顎骨を動かす、筋肉の一部付着す、猛獸に於て、能く發達す。

げんしくわうぶつ(原始鑛物) Minerals of Fundamental Rocks 圖嚴雲的瓦斯体なる、地球が放熱によりて、次第に凝縮して、液体となり、次に表面に地皮を生じ 創成の地皮は、主として硅酸礬土及び金屬の化合物より成るを以て、これ等輕き物質は、重き金屬の鎔液上に、浮び出てたるものと思はる、これ

等原始岩石を構成せる鑛物を原始鑛物と稱す、石英、長石、雲母、輝石、角閃石、橄欖石、黃玉石、綠柱石、電氣石、柘榴石、沸石、綠泥石、蛇紋石、滑石等その重なるものなり。

げんせいどうぶつ(原生動物)Protozoa 動單に原蟲とも稱す。体制最も單純にして、大古の始原動物より一系に啓發し、これを現世に表出するものなり、その体軀極めて微小にして、肉眼を以て、視察し得るもの稀なり、その形も種々ありと雖、要するに一細胞たるに過ぎず、かつ体に多少の器官を具ふるも、これ、体質即ち原形質の分化にして、複細胞動物に見る如き、組織より成る器官あるなし、神經、並に特別なる消化腔は、決してあるとなし、淡鹹二水に無數を產し、また他動物の体内へ寄生す、分つて四綱とす、一根足蟲類、二纖毛蟲類、三胞子蟲類、四纖毛蟲類とす。

げんちゅうくわう 原素鑛) 鑛水銀を除くの外は大抵固体にして、金屬、非金屬に分つ、六方晶系の菱狀、等軸晶系に屬するもの多し、金剛石、石墨、硫黃、砒、蒼鉛、鐵、銅、鉛、水銀、銀、黃金、白金等これに屬す。

けんたい(肩帶)Shoulder-Girdle 生二肩胛骨、並に二鎖骨よりなる、楕圓形の骨環をいふ、上肢を胴に付着せしむる用をなし、上膊骨より來る壓力を二分せしむ。

げんちゃう(原腸)Archenteron 動複細胞動物發生の初期に於て、卵は、二球に分れ、各球再三、再四小分し、終りに、嚢胚を生じ その一方陷入し、内腔をなす、これを原腸といふ、原口により、外界と通す。一定の度以上は發達せざるなり、ヒドラの腔腸の如きも即ちこれなり。

げんびるる(鈍尾類)Limulus 動甲殼類に屬し、その体は堅甲を被り、幅廣く、略半月形の頭胸及び、六角形の腹より成り、後端に、細長の尖鋭なる尾節を具ふ、頭胸の下面に口を圍みて、六對の脚あり、腹は五對の瓣狀肢を有し、鰓を帶ふ、鯊魚の類これなり。

げんぶがん(玄武岩)Basalt 鑛安山岩に似て稍、黑く、斜長石、橄欖石、輝石、磁鐵鑛より成るも、橄欖石は蛇紋石に化し、綠色に變するこさあり。その種類中、長石玄武岩は長石、輝石に加ふるに、橄欖石、角閃石、の一を含む。橄欖石を含むを、橄欖玄武岩、角閃石を含むを角閃玄武岩といふ。白榴石玄武岩は、白石榴輝石、橄欖石を含み、前二者より成るをテフライト、三者悉含するをバサナイトといふ。無長石玄武岩も、また、二類あり。玄武岩は、新火成岩にして、これより成る、崖は五角、または六角形の大柱を樹立せる有樣をなし、或は河底に六角形板石を、敷き廣げたる壯觀を呈す。これ水蝕 風化の結果によるなり。但馬の玄武洞、中津川の石落、筑前の大門窟、越後田代の七つ釜、信濃の幕岩等これなり。その柱狀節理を利用し、建築用に供す。公園等にある、石柵は直に採材したるものなり。

と

とあふむ(小鷸鷸)Ps. macro 動攀木類に屬する、鳥類にして、全身白色、後頭部に黃色の長羽ありて、逆立す。

とうかくりしき(厚角組織)Collenchyma tissue 植莖幹の生長點を成す部分を組成せる、細胞は、大抵、多角体をなし、直徑は互に相等しきを以て、これを表面より見れば、龜甲狀若くは蜂窩狀をなしたる、扁平組織變形して、即ち各細胞が、唯、その角隅に於て肥厚し、

他部は、既成の厚さに止るときは、厚角組織を形成す。この組織の細胞は各く厚形質を有し、かつ、細胞相互間の物質代謝の如きも、その漿膜に於て行はる。この組織は他組織と共に、基本組織をなす。

こうがいこつ(口蓋骨)Palatal bone　生口腔の上を蔽ふ、骨なり。

こうがるる(溝牙類)Proteroglypha　動有毒蛇類にして、その牙は前面に毒液の流通すべき縦溝あり、飯匙倩、海蛇、ヨラブウナギ等これに屬す。

こうき(口器)Mouth part　動口器と稱するは、普通口腔内器をいふものなるも、動物學上口器と稱するは、主として、節足動物の口部をいふ。

こうきやくるる(口脚類)Stomatopoda　胸甲類に屬する蝦蛄類なり、その胸の最後四環節は、自在にして胸甲に累らす、上下顎三對の外に顎脚五對あり、その一對は強大にして、その狀西洋剃刀の如し、かつ鋸齒を具へ、また別に三對の細小なる脚あり、腹は大に發達し、下面に撓脚並に顎絲を具ふ。

こうきやくるる(喉脚類)　動甲殼類なり、脚端類に精類似し、座眼を有す、鯨蝦の如き、その適例なり。

こうこう(口腔)Mouth cavity　生消化器中の先端に位し、俗稱口と稱する所なり。

こうきいるる(喉鰓類)Cephalochorda　動有脊動物中、最下等に位するものにして、永く脊索を保存し以て脊髓を支ふ、かつ神經質、血液質、心臟、腦髓を具へず、血液は無色、体透明なり、砂礫多き海底に棲息し、翻々として、游泳し、甚だ認めがたきもの多し、ナメクヂウヲの一屬あるのみ、或は脊椎動物と區別し頭索動物といふ。

こうきらきるるる(釣爪猴類)Arctopithei　動体

軀倭小、尾は長く、後肢拇指のみ扁爪を有し、その他は、皆釣爪をよふ、而して、前肢拇指は、他の四指と對峙せず、南米の產にして、絹猴、獅猴、この屬なり。

こうし(後肢)Hind limb　動前後二對の肢を有する動物の、後一對脚をいふ。

こうしるる(厚嘴類)　動燕雀類を、その嘴形によりて、別たるものにして、この類は、嘴厚く、かつ尖りて圓錐狀をなす、上嘴の緣に、幽微なる缺刻あり、雜食するものと、穀物を食するものとあり、雀、鶯雀、鶏、交喙の類これに屬す。

こうせい(恒星)Fixed stars　晴夜天空に、無數の星、燦然たるあり、幽微なるありて、明滅の光を發す、皆太陽と同一の發光体にして、太陽もその一なり、その距離一般に、遠く距り、その最近距離にあるものと雖太陽と地球との距離に二十五萬倍すと、その數も殆んど一億以上に達し、その光度によりて六等級に分つ、かつ、その位置も變ぜざるものとす、その有名なるを北極星といふ。

こうせつるる(厚舌類)Crassilingua　動蜥蜴類なり、舌は肉質にして厚く、かつ短く、凡て細鱗を被り、四肢の側面に一種の液を分泌して、吸盤の作用をなし、能く、峭壁を攀縁す、熱帶に產し、昆蟲を食す、宮守、レグアン、飛龍等これに屬す。

こうちやうとうぶつ(腔腸動物)Coelenterata　動体は鐘狀、圓筒狀にして、幅狀相稱（放射同形と同意）なり、その構造一般に囊狀にして、体壁は僅に二層の皮膜組織より成り、或は皮膜組織の間に、第三層を具ふるものあり。概れ、口の周圍に觸手あり、指狀、絲狀をなす、その口により、外通せる內腔は、高等動物の体腔に匹敵するものにして、その一部若くは全部を以て、食物消化の作用をなす、腔腸なるも

のこれなり、肛門は必ず欠く、特性として、外面の皮膜中に無數の刺絲胞を具へ、以て、外敵の刺撃に供へ、食用とすべき、小蟲を鹵獲の用を兼れ、体中筋纖維は、微弱に發達し、神經系もまた極めて低度なり。大抵は海産にして、自在に浮游せるものと、他物に附着せるものとあり、前者は概れ、圓盤狀、鐘狀にして、水母形といい、後者は圓筒狀にし、口なき一端を以て、他物に附着す、これをポリプといふ、クラゲ、イソギンチヤク、珊瑚類これに屬す、分ちて三綱とす。ポリポ水母類（ヒドラ）、珊瑚蟲類（サンゴ、ヤギ）櫛水母類（シチベ、ウリクラゲ）とす。

とうてう（候鳥）動寒暖の平均を得んがため、季節を定めて、遠隔（往々大洋を超へて）の地に、往來する、鳥をいふ、燕、雁、鴨等なり

とうとち（喉頭）Pharyx 生氣管と舌骨間にして、前頸部の中央にあり、空氣を通じ、聲音を發する地なり、狀形三角淵斗狀にして、甲狀軟骨、環狀軟骨より成る、環狀軟骨は氣管軟骨に連り輪狀をなし、その緣、幅廣く、前緣狹し、甲狀軟骨は、環狀軟骨の上にありて、喉頭の前壁を造る、その上緣に會厭軟骨ありて、彈力性を有し、喉頭の蓋をなし、食物の亂入を防ぐ、環狀軟骨の上緣後側に、左右一對の盃狀軟骨と、甲狀軟骨を繫ぐ、一對の聲帶あり、帶狀にして、彈力性を有す、左右より呼吸道を挾み、これが振動によりて、聲音を發す。

とうとつ（後頭骨）Occipital bone 生頭後部の壁をなし、その後下部に一大孔あり、脊髓に通ずる所にして、それに各一個の踝狀突起あり、頭推の上端に坐し、以て頭を俯仰せしむ。

とうとうるる（鉤頭類）Acanthocephali 動消化器を闕如せる、圓蟲類なり、前端に、伸縮自在なる、吻狀部ありて、その表面に數多の鉤を生ず、故に体狀は、條蟲に似たるも、片節なし、また雌雄異体なり、生殖門は尾端に開けり、脊推動物の腸に寄生する、エキノリンクこれなり。

とうのとり（鵲）Gicomia 動涉禽類にして、その形鶴に似て、頂赤からず、嘴長くして、嘴脚共に赤色、全身は灰白色なり、かつ尾翅共に黑し、嘴角賞にして長く、頭と角度をなさず、眼の周圍を裸出す、後趾能く發達し、地に接す、胸に長毛ありて、垂下す、この鳥は聲帶なく、嘴を撃ちて、發聲に代用す、多くは、高樹の頂に巣ふ、その飛や、屠畜に猶ひ、施濕陳の如し、虫類、蛙、魚を食す。

とうひいのき（珈琲樹）Coffea arabica 植茜草科の常綠灌木にして、その種類頗る多し。葉は楕圓形披針をなし、對生なり、花は白色、漿腋に生ず、果實は漿果、紅色にして、櫻實の如し。果實中二個の核を有す、これ珈琲豆にして、焙燒して、粉となし、飲用に供す、熱帶地方の産にして、アビシニヤの元産なり。珈琲中コフエインと稱するアルカロイドを含有す。

とうへうるる（喉鰾類）Physostomi 動硬骨魚類なり、大抵食道と交通する鰾を有するを以て、その名あり、鰭は柔軟なる、鰭刺を以て、支持す、或はその最前の一刺は往々堅硬なるものあり、上顎可動的にして、鰓は櫛齒狀を爲し、淡鹹二水に産す、腹鰭の有無により、有腹鰭類、無腹鰭類の二亞目とす、無腹鰭類は、皆長形にして、ウナギ、ハモ、ウツボ、エレキウナギ、アサゴ等とし、有腹鰭類は腹鰭は胸鰭よりも後方に具へ、イワシ、サケ、コヒ、ドセウ、ナマヅ等なり。

とうへんさいはふ（孔邊細胞）Guard-Cell 植氣

孔の周圍にある、半月形細胞にして、一に閉塞細胞といひ、外界の狀体に從ひ、氣孔の開閉を司る。

ごえふのまつ(五葉松)Pinus Pentaphylla 圖 葉は、姫小松より長く、朝鮮松より短し、葉もまた五個あり、その表面は、暗綠色、裏面には白色の條あり、庭木とす。

ごがねむし(金龜子)Mimela 動五蹠節脚を有する、甲翅類なり、体長六七分、全身綠色を帶び、かつ金光を發す、脚爪は大なり、ザムシはその幼虫にして、田圃にありて、作物の根を食害し、成虫は樹液を吸ふ。

ごかひ(沙蚕)Nereis 動環蟲類にして、その体延長して、無數の明瞭環片より成る、体色、暗赤、數多の觸角は口の周圍に生じ、体は、その分泌せる、革質の筒を被る、常に淺底岩石の間に栖息し、觸角を出して、食物を捕食す、魚釣の餌に用ゆ。

ごから(小雀 Parus minor. Tand S. 動燕雀類にして、背部褐灰、頭部黑、腹部白にして、喉部には一小黑點を印す、害虫を捕食す。

ごかんき(五感器) 生視、聽、觸、味、嗅の五感を司る器官なり、觸感器は皮膚全体に散在し、嗅感器は氣道の入口に鼻あり、味感器は、食道の入口に舌ありて、各その部の器官に附屬す、視感器は眼、聽感器は耳なり。

ごきふ(呼吸)Respiration 生呼吸とは、血液瓦斯と、零圍氣及び組織瓦斯との交換をいひ、血液と大氣の、瓦斯交換を外呼吸、血液と組織との瓦斯交換を內呼吸といひ、外呼吸は、瓦斯交換を營む、器官により、肺臟呼吸、皮膚呼吸とに區別するも、呼吸と稱するは、通常肺臟呼吸なりとするも誤りなし、胸腔の床をなす、横隔膜は、常に椀形をなせる、肉板なるも、收縮すれば、稍扁平となり、胸腔を廣め、隨ひて、肺內の氣は益、擴張して、稀薄となり、爲に外氣は、自家の張力により、その稀薄の地を充たさんが爲に、氣管より、氣胞に入る、これを吸氣といふ、横隔膜下の腹內諸臟腑は、この際、壓せられてあるも、收縮止むれば、故の位置に還り、横隔膜に逼り、舊態に還るときは、胸腔を狹み、肺を四周より壓し、氣胞中の氣を氣管より排出す、これ、呼氣なり以上を腹呼吸といふ、胸腔壁の、肋間膜は、內外二層より成り、收縮するときは、各層反對の働をなし一は肋骨を、擧げて、胸腔を廣め、一は肋骨を下げて、胸腔を狹まくす、故に二層交々伸縮して、肺より、氣を出入せしむ、これを胸呼吸といひ、腹呼吸、胸呼吸共に、混して働き、呼吸を完にす、吸氣呼氣の、肺中に受くる、化學的變化は、

百容中	酸素	窒素	炭酸
吸氣	二〇、八一	七九、一五	〇、〇四
呼氣	一六、〇八	七九、五五	四、三八

胸隔上に、耳を附するときは、一呼一吸毎に必ず、その響あり、即ち氣胞中に、大氣を一途一迎するの徵なり、その呼氣の音は、吸氣より短し、これを呼吸音といふ。

呼吸の回數は、成人にありて、一分間十八回即ち、四脈搏毎に、一呼吸をなすを、平候とす、肺內に出入する空氣量は、毎回僅に、二合餘、肺全容量の六分の一に足らざるも、晝夜、間斷なきを以て、二十四時間內に於て、實に五十六石內外の、新鮮なる、空氣を要する比例なり。(肺臟の部參照)

ときふき(呼吸器)Respiratory organ 生動物が、酸素を吸收し、而して酸化により、生じたる炭酸を排除する機能を司る、器官なり、高等動物の陸栖類は、肺を有し、氣管を具ふも、或は皮膚のこれを營むカヘルの如きもの、往々特置の裝置ありて、營むもの、魚類の多くの如く、水呼吸に適せる鰓を有し、水中に溶

解せる、酸素を吸收す。

ときふさより(呼吸作用)Respiration 圖植物も動物と同じく、生活中は、その細胞膜及び原形質を作る、必用上、葉の氣孔、またはその他の部分より、酸素を吸取し、酸化せしめて、炭酸を氣孔より排出せしむ、この作用は晝夜間斷なく、行るゝも、晝間は同化作用盛なるを以て、呼吸作用に生ずる、炭酸瓦斯は、同化作用によりて、生ずる酸素の爲に、隠蔽せられ、認め難きも、夜間は同化作用止むを以て、容易に炭酸瓦斯を認め得べし。

ときやう(御形)Gnaphalium multiceps wall 圖菊科二年生草本なり、花は黄色、蟲媒花なり、藥用とし、またはホクチを製す、野に雜生す

とくいろせき(黑曜石)Obsidian 圖熔岩の冷却すること、急劇に過き、結晶をなす能はずして、硝子様の塊となりたるものなり、即ち天然玻璃なり、十勝石とも稱す、黑色、灰色、

貝殼狀斷口著明なり、北海道十勝川に產す、古代の人類が石鏃として用ひたるものこれなり、裝飾品に用ふ。

とくが(蛾蛾)Tinea granella, L. 動鱗翅類に屬し、皆小形なり、前翅幅狹く、緣に細毛あり、幼蟲蛆狀にして、穀類に生じ、大害あり

とくさき(常山)Orixa japonica Thunb 圖芸香科小灌木なり、花は小、果實は、乾燥し、果皮に彈力ありて、樹上に於て、種子を一間以上の遠きに飛ばす、家畜の蟲を殺すに用ゆ。

とくたん(黑炭)Black coal 圖黑質なる塊狀をなして、現はる、純黑色にして、玻璃光また は松脂光を有す、硬度二乃至二・五、比重は一・二乃至一・五、斷口貝殼狀、炭素七五乃至九〇、水素一乃至五・五、酸素三乃至二〇、灰分一乃至三〇、その他、揮發物二〇乃至四〇を含む、容易に燃ゆるも、瀝青臭を放つものあり、勢力無烟炭に劣る、水成層中に挿入して、顯はれ、太古または、中古時代に成りたるものなり、木炭の三倍の火力を有し、工業上缺くべからざる燃料なり、我國にては、北海道、九洲に多く產し、殊に、蝦夷、高島、三池、唐津、豐筑炭坑等は、年產額百萬噸に達するものあり。

とげるる(越橘)Vaccinium vitis-Idaea L. 圖石南科の小灌木なり、葉は革質にして、小なり、花もまた小にして、淡紅色、果實は漿果なり、高山に生じ、果實は食すべし。

としつ(皷室)Tympanum 圖中耳なり。

とし(枯死) 圖植物が凋衰枯死するは、種々の原因あるも、要するに、地内の根よりは、毛細管引力より、液体を吸取し、葉より、氣孔にて、氣体を取り、細胞膜、原形質中に含有し、生活するものなれば、その供給不充分なるときは、枯死す。

としやりきん(コシヤリ菌)Botrytis Bassiana 圖寄生菌にして、コシヤリ白疽蠶と稱する、病を起さしむる、菌類なり。

とせい(互生)Alternate 圖莖幹の各節より、一個の葉を生じ、交々他面に著くものをいふ、ナデシコ、サクラ等その一例なり。

とせいたい(古生代)Palaeozoic Group 圖岩石、碎屑岩、深成岩、噴出石植物、羊齒類、石松類、木賊類、動物、節肢類、珊瑚類、海百合類、原生動物、軟体動物にして、魚類、兩棲類、爬蟲類等、始めて、現出す。

とち(牛尾魚)Platycephalus 圖硬鰭魚類なり、頭壓扁し、体細く、眼上向し、海底砂中に棲み、砂と同色なるを以て、發見する難し、味美なり。

とつかく(骨骼)Skeleton 圖一個体を形成せる、全体の骨をいふ、二區別あり內骨骼とは、体の內部にありて、外に現はれざるもの、人

類以下高等動物の骨骼なり

外骨骼とは、体の外面に有する骨骼にして、節足動物、軟体動物等の骨骼なり。

とつずゐ(骨髓)Marrow　骨の中空部なり、頗る緻密なる骨質より成り、脂肪様物質を含む、白血球が赤血球に變するは、骨髓渦巻なりといふ。

とつばん(骨盤)Pelvis　腹腔の下部に位して、盤狀を成せる骨なり、左右二個の無名骨より成り、薦骨その後壁をなす、上は、腎臓骨の基底となり、下は、下肢の根據をなす、男女により、その形狀を異にす。

とつまく(骨膜)Periosteum　骨の兩骨相接する部の外は、悉く皆纖維質の、强靭にして、絹光澤ある、漿膜を以て、その外面を包被す、これ骨膜なり。無數の細血管を布蔓し、以て骨質の血脈と相連り、骨を營養す。

とつまくえき(骨膜液)　靭帶の表面、軟骨の表面にある膜より分泌する、蛋白様の液にして、兩骨の摩擦を防ぎ、關節の運動を滑ならしむ。

とてふ(蝴蝶)Rhopaloera　鱗翅類に屬し、晝間飛翔する、純粹の蝶なり、その大小、形狀は、種類多くして、區々なり、軀幹細長にして、觸角の末端膨大し、棍棒狀を爲す、幼蟲は、十六足を具へ、往々毛或は刺狀物を生ず、その蛹はチキクムシと稱し、繭を被ることなく、表面に突出物あり、草木、または屋壁等に懸着す、ハナセヽリ、シジミテウ、ヒヤウモンテウ、ヒチドシ、キテウ、チツチンテウ、シロテウ、アゲハノテウ、アゲバ、キアゲバ、カラスアゲバ、クロアゲバ、クロダイマイ等その一般なり。

とてふとつ(蝴蝶骨)Sphenoid bone　頭腔の前上部の壁をなし、蝴蝶狀をなす骨なり。

とどう(鼓動)Palpitation　鼓動とは、心臓の

伸縮により、音響を發するものなり、音響に長、短音あるは、その伸と縮によりて異なるなり、成人一分間の鼓動は七十回乃至七十五回、一鼓動毎に一合の血液を、各心室より、輸出す。

とながら(小楢)Quercus Glandulifera　闊葉斗科なり、葉は楕圓形にして、小形なり、寒地に生じ、薪、炭材とす。

どのしろ(鱈魚)Gbatoesus　喉鰾類にして、有腹鰭魚なり、その形狀、青魚に酷似し、体側遍く、かつ多く細骨を具ふ、肉は青魚に比して、大に美なり。

とはく(琥珀)Amber or Succinite　非晶なる、塊粒狀なして顯はる、琥珀酸二・五乃至六を含む、黄色、褐色、または白色なるものあり松脂光强く、透明なるものあり、白色の條痕、硬度二乃至二・五、比重一・一八、少しく摩擦すれば、電氣を發す、燒くときは、麝香を放つ、また琥珀酸を製す、多く海濱の砂礫中に混じて顯はる、前世界の松柏類、殊にピヌスサクシフラの樹脂が地中に化成したるものにして、時に蟻、蜘蛛等の昆蟲、または木葉、木片を包裹するものあり、有名なる産地は、獨逸の北岸、支那にして、伯林博物館にあるものは、十八斤重量ありて、美なり、本邦にては、陸中の九戸郡大川目村産と、北海道諸炭坑には、石炭に混じて産し稍良品なり、美色透明なるものは、裝飾に用ひ、烟管の吹口、ワニス製造、燃香に用ふ。

とばんいたどき(印魚)Echneis　硬鰭類に屬する、海産魚なり、体は狹長にして、腦上に小判形をなす、吸盤ありて、船体或は他の大魚等に附着す。

とひ(鯉)Cyprinus　喉鰾類にして有腹鰭、淡水魚なり、背部蒼黑色、腹部白色なり、二對の觸角を有し、口は小にして、軟骨質の唇、

挺出し、頭尾の壹道に三十六鱗を具ふ、背鰭及び臀鰭中最後の一刺は硬く、尖鋭なり、世界各國に產し、河川、湖池に栖息し、產卵期に至れば、雌は雄を誘ひて、淺く水藻の繁茂する所に、早朝放卵し、一年にして九寸、二年に一尺五寸、三年に一尺八寸、に達し、三尺以上に及ぶものありて、その齡も二百年に達することあり、常に群棲し、多く植物質を食す、肉も世人の賞味するものなり。

とひげね（　）　圖燈心科なり、草に比して、短細なり、故に上等の裝飾を製すべし。

とふかくるね（甲殼類）Crustacea　動節足動物の一綱なり、革質若くは硬質の甲殼を被る、主として、水中に生し、稀に陸上に產するものあり、概ね脚基に附着せる、鰓狀若くは羽狀の鰓あり、またこれを缺き、体面を以て呼吸するものあり、頭及び胸は、頭胸と稱する一体に着合するを常とす、頭部は概ね五環節の合成にして、これに附屬せる諸肢は、即ち、頭前に突出せる前後二對の觸角、口の直前に位せる、一對の上顎、及び一對乃至二對の下顎これなり。その他、なほ、口の直前、直後に位せる、上唇及び下唇あり、自餘の頭胸環節は、種々形狀を異にせる脚を生じ、その前なるは、顎と共に、食物攫取の用をなす、これ顎脚なり、その後にある、數對の脚は、專ら移動を掌り、その末端は、往々鉗狀をなせり、腹は、普通尾と稱する、部分にして、明に環節分界を示す、その諸肢は游泳に供する、鰭狀の撓脚に變し、或は全く闕如す、雌の撓脚は、產卵を擔ふの作用をなす、神經系は能く、發達し、視官器は單眼、または複眼なり、食道は短く、內面に齒狀突起を具ふる、胃嚢は、腸に通ず、腸は直走し、尾端に近く、肛門を開く、管狀の肝臟あり、腸の前面を通ず、泌尿作用は、觸角の根本、或は下顎に外開せる、一種の線ありて、司る、血管系は單一、或は甚だ完全なり、概ね、雌雄異体にして、生殖器は、胸と腹の境界の邊にあり、卵より孵化する幼蟲は、僅數の環節及び肢を有し、數次脫皮して成長し、變態せざるものあり、大別して鰓尾類、胸甲類、節甲類、蔓脚類、葉脚類とし、更に細別して、十脚類（カニ、エビ）口脚類（蝦蛄）脚端類（火蝦）等脚類（鼠蝦）喉脚類（鯨蝦）腿口類（蟹魚）鰓脚類）アパス、枝角類（水蚤）撓角類（サイクロップ）介形類（サイプリス）鰓脚類（石脚）魚蝨類（ヘチラ）根頭類（サキュリナ）等とす。

とばり（午蒡）Arctium Lappa　圖菊科の草本なり、葉は大にして、長柄を以て支へ、花は紫色、頭狀花序に排列し、刺狀の總苞はこれを圍繞す、根は灰黑色にして、多肉なり、葉、根と共に食用とすべし。

とばり（氷）Ice　圖水が氷點以下の冷氣により凝固したるものにして、六方晶系なり、硬度一・五、比重〇九一七五・無色透明なり。

とばろぎ（蟋蟀）Gryllus　動直翅類なり、体長七分位、尾端に二個の尾狀突起あり觸角は長しその体色淡褐色、雄大なる、鳴器を具ふ翅を有す、屋舍の陰所、木石等の下に隱る、終夜鳴聲を發し、樊籠中に養ふ。

とま（胡麻）Sesamum orimimal　圖菊科植物の草本なり、葉は對生、托葉なく、種子は、黑、黑褐色にして、無胚乳なり、種子は食用とし、かつゴマ油を製す。

とまく（鼓膜）Timpanic membrane　生外耳と內耳とを畫する、薄子の如き薄膜なり、外耳道より、逼壓し來る、音響を、振動により中耳內の槌骨に傳ふ。

とまどり（駒鳥）Erithacus　動燕雀類なり、体長四五寸、頭、背、翼、尾赤褐色にして、頷頰赤く、腹部白色、その鳴聲、走駒の響を鳴す

に似たり、嘴は鑿狀をなす。常に地上に栖息すと雖、個餌するもの丶外は常に見る能はず

ごまふぐ(胡麻海豚)　動有毒河豚類なり、背部及び腹部に小棘を具へ、口部、尾部とは、極めて滑澤なり、頭は項と背鰭の前緣との距離に比し、短なり、兩眼球の間に位する、前額部は、少しく凸隆し、背は無數の美麗なる褐色または點を有す、腹面は白色なり、產卵期は五六月の頃にして有毒部は、卵巢なり。

こむぎ(小麥)Triticum sativum Lam. Vulgare Hack　植禾本科の草本なり、大麥と異なる特徴は、小穗花序は二個以上の花より成り、加之、內外殼は緊しく、閉ぢざるにあり、その用途も甚だ廣く、種子は味噌、醬油の原料とし、粉末とし、麵麭、麩類、饅頭、煎餅その他菓子類、または酒を製し、稈は、帽子、玩具または製紙の原料に用ひ、または田肯の肥料とす、要するに穀中、營養質多く、消化の易きこと、その最上位にして、これを以て單食し得べし、成分は、

水一二九・九四、蛋白質一三五・三七、脂肪一八・五四　抱水炭素六九六・一九、鹽類一九・九六なり。

こむら(腓)Calf of the leg　人體の後部上方に肉の張れたる所なり。

こめ(米)Rice　植米は稻の種子にて日本人の一日も缺ぐべからざる、常食なり、その太凡は稻の部に說けり、これが成分を示す。

蛋白質六・八　纖維〇・五　脂肪〇・三、灰分〇・四澱粉七二・二　水分二〇・〇なり。

こめつきむし(叩頭蟲)Melanotus　動鞘翅類なり、体長四寸許、頭壞筋强く、その仰臥するも、彈きて、原位に復する事を得、体黑色にして、胸部に棘あり、その幼虫は野菜を害す

こもんふぐ動有毒なる河豚にして、一名ショッサイフグといふ、皮膚は滑澤にして、虫樣狀の黑斑を點す、胸鰭、背鰭の根部には、他に比して、大なる黑斑を具ふ、產卵期は五月頃なり。

こりやなぎ(柜柳) Salix multinervis, Fr et sav 植楊柳科木本にして、葉は、細長なり、その枝條より、柳行李等を製す、但馬に栽培され製造盛なり。

ごりら(大猩々)Gorilla　動狹鼻猴類にして、最、人類に近し、体長七尺に達し、体頗る强固にして、その性獰猛なり、齒は雄の犬齒上下共に大なり、毛は黑褐色、顏面黑く、尾なし、亞非利加の西部に產し、深林中に棲息す。

こるくがしQuercus suber J. & Q. Occidentalis Gay,　植殼斗科の木本なり、葉は互生、緣に鋸齒あり、かつ葉柄短し、アフリカの北部、南歐洲に產し、そのコルク層より、壜の栓子を製す。

こるくりしき(コルク組織)　植植部体の幼嫩なる部分は、柔軟にして、表皮細胞に被包さるも、老成するに隨ひ、表皮內部に、堅牢なる組織發生し、以て、外部を保護す、これコルク組織なり、導通、表皮直下にある、柔組織の變質せるものなり、漸々原形質を失ひ、只空氣のみを含み、死細胞組織をなす、その膜はコルク素を含み、水の浸透を防ぐ。

どるき(五位鷺)　動涉禽類にして、背部黑色、頭、腹部白色、翼、尾灰色なり、頭長く、尾短し、嘴は黑色なり、常に樹上に巢ふ、雖夜中天を飛翔す、その鳴聲背鵜に似たり。

こゑ(聲)Voice　人呼出氣、喉頭を通過するに際し、聲帶を振動せしめ、一種の音調を發すこれ聲なり、聲帶の緊張大なれば、大聲を發す、その音を調へ、五十音の如き、正音を發さしむるものは、口腔內諸部の位置を變じ、また開閉するによる、男子十四五歲にて、變聲するは、喉頭肥大し、聲帶粗惡となるによ

り、音聲の澁濁なるは、聲帶の粘膜に充血するによる、女子は喉頭の發達急激ならず、故に變聲男子の如く、顯著ならず。

とんかう(根莖)Rhizome 圖地下に埋もるゝ、枝の肥大して、養分を貯へ、その形狀根の如くなるも、その內部の構造根とは、異にするものあり、これ根莖なり、常に、鱗狀葉を具へ、生長點を有するものとす。

とんかうしゃ(金剛砂)Garnet emery sand 圖柘榴石の細粒狀をなせるものにして、黑褐色不透明なり　大和國宍粟村の產は甚細粒なり寶玉の琢磨、玻璃を磨して、クモリ硝子となるに用ゐる。

とんかうせき(金剛石)Diamond 圖等軸晶系に屬し、八面体、不等邊三角二十四面体、四面体、四十八面体等の樂形、また粒狀、砂粒狀なして、現る、璧開は、主に八面体、斷口は貝殼狀、成分は炭素なり、無色なるもの、普通なるも、白、黃、橙、赤、綠、褐色等を帶び、透明、金剛光强く、その質脆と、硬度一〇、比重は三・四八乃至三・五五なり、光線屈折强く、硬度高く、光澤强く、摩擦すれば電氣を發し、また日光或は熱するときは、燐光を發する等、他の鑛物と異なる所にして寶玉として、貴重さるゝ原因なり、炭素より成るも、容易に燃ることなし、空氣なき所に、熱すれば、石墨の如き塊をなす、岩石中に錯入し、或は流砂に混じ、印度　ブラジル、南亞米利加、ボルネオ、ウラル山等より產し、我國に於ては、未だ發見せず、現時世界中にて有名なるものは、南洋ボルネオ首長所有のものは、三百六十七カラットあり、露帝室所藏のものは、百九十三カラット、佛政府所有のものは、百三十六カラット、價五百萬圓、オレンジ自由國產のものは、百六十九カラット　ブラジル產のものにて、六百グラムありたるものあり、倫敦豪富の所有せる、藍色種は、四十四カラット半あるといふ、金剛石は、寶玉中の最高價なるものにして、その價格は、その色、光、透度によりて、差あるも、普通のものは、各カラットを二乘し、またその數を自乘して、これに二磅を乘して、市價を定むる慣例なり、寶玉または飾玉に用ひ、その粗惡にして、暗色の塊をなすものは、硝子斷器、穿岩機に用ひ、粉末は、寶玉琢磨用に供す。

とんぎょく(根極)Root-Pole 圖根を生ずる、莖端をいふ。

とんくわん(根冠)Root-Cap 圖根の先端、細胞群なせるものをいふ、その細胞はその直後にある、組織の分生せるものにして、根の生長點の保護をなす。

とんとつ(跟骨)Calcaneum 圖足の後下部にあり、以て全身を支ふる、短骨なり。

とんしゅつこん(根出葉)Radical leaf 圖莖の短かき植物に於て、葉は恰も根より、生じたる如き有樣をなせるものをいふ。

とんせいくわかう(根生花梗)Scape 圖地下または、その近き處より、葉を有せざる、莖を生じ、花を有するものをいふ、水仙の花梗その一例なり。

とんちゅうくちゅうるゐ(根足蟲類)Rhizopoda 圖原生動物なり、体軀は、粘液狀にして、自在に突起を生じ、またこれを收縮し、その移動並に食物採取の用をなす、虛足あり、その幅廣きあり、細く絲の如きものあり、また分岐して樹根に似たるあり、根足蟲の名ある所以なり、モネラ、アミバこれに屬す。分つて、單蟲類、有孔類、放射類、變形類、海綿類の五とす。

とんちゅうるゐ(昆蟲類)Insecta 圖節足動物の一綱なり、体軀は頭胸及び腹の三部より成る

頭は四環節の癒合して成り、形狀の異なる一對の觸角、二個の複眼を具へ、單眼を併有するものあり、口器は上顎、一對、下顎二對より成り、下顎のみ觸鬚を具へ、第二對下顎は、所謂下唇を成す、口器は食物の性質により、著しくその形狀を異にし、嚙咬、刺螫、吸吮、舐喰に適す、胸は三環節の合成にして、前胸、中胸、後胸とし、各その下面に一對の節脚を具ふ、脚は歩行、游泳、跳躍、穿掘し、或は靜息するに適するあり、また往々防身の具とす、胸の上部に二對の翅ありと雖、種々に變形し、或は闕如するあり、翅は膜狀の擴張物にして、網狀の翅脈これを支持す、腹は大約十個の可動的環節、相連るも、その形狀一ならず、この部は、無肢なりと雖、尾端の環節は產卵管、刺劍、若くは交尾器等を具ふるを常とす、体面は硝子膜を被り、その質柔軟堅硬にして、往々彫刻狀をなし、毛、小鱗を

密生するものあり、硬皮裡面に筋肉の附着あるありて、主として走行、飛翔、游泳等の運動を司る、神經系は、能く發達し、その主なるは、食道前に位せる腦、食道神經環及び腹部を縱走せる、神經球連鎖なり、觸官は、觸角並に、脚端に於てし、嗅官器もまた觸角上に存在す、聽官器は、第一腹環節、前脚の一節に有するものあり、消食器は、數部より成り、直走或は屈曲せり、口を入りて食道あり、唾腺こゝに開口す、食道の後部膨大して、嗉囊を成形し、胃に通じ、腸より肛門に終る、嗉囊、胃間に砂囊あるものあり、その壁肉質、往々裡面に齒狀物を生じ、能く食物を、咀嚼す、胃の腸に接する所に、數多のマルピギ管ありて、泌尿作用を營む、血液は無色、有色にして、アミ〻狀細胞を含み、血管及び体腔中を循環す、蓋血管と体腔とは、共通す心臟管は、背部を縱走し、その兩側に開ける

敷裂口より、体腔中の血液を收入し、管壁の收縮に因り、これを前方に輸送す、この類は皆氣管を以て呼吸し、氣孔數對を、体側に開く、大氣は腹壁の縮張により、孔を出入す、その際發音することあり、鳴聲は主として、翅の振動、諸体部の摩擦によりて發す、一般に雌雄異体にして、產卵し、發生中概れ、幼虫、蛹、成虫の三階級の變態をなすも、區別判然せずして、不完全なるものあり、また完全なるものあり、分つて、鞘翅類（ガムシハ子カクシ）膜翅類（蜜蜂、蟻）鱗翅類（蝶、蛾）双翅類（蠅、虻、蚊）脈翅類（蜻蛉）直翅類（蝗虫、螽蛄、蟋蟀）半翅類（蟬、田龜）彈尾類（彈尾虫、衣魚）等とす。

とんとうるゐ（根頭類）Rhizocephala 鬪最下等の甲殼類なり、通常蟹類に寄生す、肢は痕跡だも見る能はず、樹根狀の絲を宿主の内臟中に埋沒して、養分を吸取す。サキユリナこれに屬す。

とんにやく（蒟蒻）Amorphophallus Rivieri, Durien, var, Konjac Engl. 圖天南星科の草本なり葉は複葉、地下莖は、球狀をなす、これを乾燥して、粉となし、蒟蒻を製す、その球を蒟蒻玉、粉を蒟蒻粉と稱す、食用とす。

とんもう（根毛）Root-hair 圖多く若き根の表面に生せる、纖毛なり、これによりて、土中より營養分を吸取す、これ表皮部の扁平細胞が伸出せるものなり。

とんりゅう（根瘤）Root-tubercles 圖豆科植物の根に、夥多の小粒の附着せるものあり、これ根瘤なり、根瘤はバクテリヤが根に共生するにより生ずるものなり。

さ

さい(犀)Rhinoceros 動奇蹄類に屬し、象に亞ぐ大獸なり、皮は皺襞多く、極めて堅厚なり、每肢に三蹄あり、切齒上下二、臼齒上下七あり、頭長く、鼻頭に皮膚の變形したる角を有す、その性遲鈍なり、亞非利加產は角二つあり、前後に生じ、印度產は一角を具へ、身長前者に比して稍大なり角を藥用とす。

さい(鰓)Gill 動水棲動物の呼吸器にして、その數、形狀、位置は、種類によりて異にし、甲殼類は胸部外骨骼の下にありて、數十對を有し、魚類は鰓蓋下に數對ありて概ね紅色、櫛齒狀に排列す、エラこれなり。

さいちょうどうけい(左右同形)Bilateral symmetry 動左右同稱、左右對稱といふ、動物体の中軸より、中斷して、左右のその一半同形なるをいふ、脊椎動物の如し。

さいがい(顎蓋)Operculum 動エラブタなり、魚類の頭後部兩側ありて、可動的に一方、頭部に附著し、他方を開閉し、以て、水を鰓に通ず、開きては水を排出せしむ、この蓋は數多の骨より成り、鰓を保護す、その骨を鰓骨またはエラボネといふ。

さいきん(細菌)Bacteria 植バクテリヤなり、極微の單細胞体にして、核なし、その形狀も、圓形、楕圓形、コンマ形、棒形等ありて、寄生々活を營み、分裂生殖をなし、その蕃殖の迅なる、意想外にして、一個の細菌一晝夜間に二千萬の多數に蕃殖する力を有す、而して動物植物の死体唯に、生活体に寄生し、各種の病原を起す、その種類中、球狀菌は膿物、麻痺病、水及び飯の腐敗を起し、桿狀菌は肺炎、肉類の腐敗、癩病、チブス、結核等なり。螺旋狀菌 虎列刺病等なり。

要するに空中、水中、地中到る所、細菌の存せざるなく、またその人性に與ふる利益も大にして、醱酵母が酒造等を助け、アンモニア

鹽類を酸化して、硝酸鹽類となし、味噌、牛酪、乾酪を造り、或はアヰより美麗なる、色素を生じ、地中、水中の成分を變化して、栽培植物の營養原料を造る等、その他枚擧するに暇なし、その他枚擧する能はざる益を與ふ。

さいくろつぷCyclops 動挽脚類に屬し、体形杓子形をなし、環節明にして、五對の挽脚を有し、尾端分叉せり、雌は腹の兩側に卵囊を有し、楕圓形なり、淡水に產し、体微小、運動活潑、寄生々活す。

さいしるる(細嘴類) 動燕雀類の亞目なり嘴は細長にして、その先端尖鋭なり、趾もまた、細長なり、大抵昆蟲を捕食するも、花蜜を吸ふものあり、戴勝、木走等これに屬す。

さいだいくわ(最大花) 植花の最大なは、ラッフレッシアと稱する、寄生植物にして、花の周圍太凡九尺あり、スマトラ島に產す。

さいだいしょくぶつ(最大植物) 植露國產にして、プレイン、ツリーと稱するものは、その幹長、百尺、周圍百六十五尺、面積百四十七坪なり。

さいだいどうぶつ(最大動物) 動現世界に最大なるものは、鯨族にして、その內ナガスクラの類最も巨大なり、そのパレノプテラ、シッバルディ、稱するものは、体長十五尋なり。

さいちゃうじゅ(最長樹) 植濠洲に產するユーカリなり、その高さ五百尺、世界比なし、成長作用の著しき植物にして、氣候不適の土地に移植するも、拔群の成長度に達す。

さいはう(細胞)Cell 動植總ての生物は、微細なる細胞の集合によりて、組成せらる、即ち細胞は單孤已に一個の生物をなし、その數個結合して、生物体軀をなす、その元素は、炭素、水素、酸素、窒素、鹽素、燐、鐵等にして、その抱合物となりては、脂肪、含水炭素、蛋白質等となる、その形狀は種々變化す

と雖、その本形は圓球狀、顯微鏡的にして、完全なるものは、細胞膜、原形質及び核より成る、外面は細胞膜を被り、內部は半液体をなせる、原形質より成り、その內に球狀の多少圓体なる、核あり、核は原形質の分化より生じ、細胞中主要の部分なり、核中また更にその物質の分化によりて生せる、點狀、或は施絲若くは網狀絲物を包有す、これ仁なり、細胞は細胞膜、原形質、核等の內一を缺くも、生存する能はず、相待つて、機能をなすものにて恰も人体の皮膚、筋肉、骨に於けるが如し、細胞は或程度まで成長し、その分裂によりて、繁殖す、細胞分裂せんとするや、先核二分し、而後、原形質、細胞膜も二分せらるものなり。

さいぼうえき(細胞液)Cell-sap 動植細胞漸次老成するや、殆んど充滿せる、原形質は、その容を減じ、薄膜となり、核は僅に細絲狀を以て細胞膜と連絡を保つのみに至りて、細胞內に空間を存す、而して原形質は、水樣液を分泌して、その空間を滿す、これ細胞液なり。

さいぼうかんいりぶつ(細胞含有物)Cell Contents 植原形質、葉綠体、澱粉粒、細胞液、結晶体、假晶体、糊粉粒、脂肪等はその重なるものなり。

さいぼうぶんれつ(細胞分裂)Cell division 動細胞は生物なるが故に、分殖機能を有す、その際、核は、複雜なる變化して後に二分し、導て細、胞体に緊縊を生じ、終、縊斷して、各一核を藏する、二細胞となる、この機能を細胞分裂といふ。

さいぼうまく(細胞膜)Cell-wall 植細胞膜は細胞の一部にして、原形質を被包する、凝狀直方形の膜なるも、細胞の必用部分と稱し難しセルローズ水、二三種の無機鹽類より成り、その發育するは、原形質よりセルローズ水と無機鹽類を分泌するにより、膜はその面積と厚を增加す、その重要組成分なるセルローズ、成長すると同時に變質して、(一)彈力性に富めるコルク質に變化す、(二)木質素に變して、堅牢なる木細胞となる、(三)粘液質に變質して、水を吸收し、膨脹柔軟となる、彼の海草類はその細胞が變化したるものにして、海藻糊はこの細胞膜の溶解より生じたるなり

ざう(象)Elephant 動長鼻類は象類の謂にしてその種類少し、既亡に屬する、象類には、數種ありて、マンモスはその一例なり、牙は長さ一丈餘に達す、往々その遺骨を、歐洲及び亞細亞北部の地中より掘發す、現世界にあるものは二種なり、印度象は印度に產し、常に群を成し、森林中に棲息し、西非利加象は、概れ、南亞非利加に產し、その色は稍々黑色を帶び、耳殼頗る大なり、牙、皮有益なり。

さうとくるる(双殼類)蒲鰓類に同じ。

さうじ(相似)Analogy 動形態學上に於て、全く異なる器官の、只、その作用上に於て、相等しきを示すの語なり、例へば鳥の翼と、昆蟲の翅とは、均しく、空中飛行の器官たりと雖、形体學上より見るときは、全く別物にして、徒に相似の器官と稱するのみ、動物分類學上に於ては、相似は採用するに足らず。

さうしにふかう(雙子葉莖)Dicotyledonous stem 植二個の子葉を有する、種子を生ずる、植物の莖をいふ、豆科等の如し。

さうしにふしよくぶつ(雙子葉植物)Dicotyledone 植被子植物の一門にして莖は外方に長く、維管束內の新生層にて、絕えず、成長し葉は羽狀、または掌狀にして網狀脈をなし、花の諸部は、大抵五の數より成り、種子の萌發に際し、二個の子葉を發生して、直根は著しく伸長するものなり、これを合瓣花、多瓣花(離瓣花ともいふ)に分つ。

さうしやう(雙晶) 鑛二個の結晶の一が、顚倒して、互に相結合せるものをいひ長石、水晶に能く見る所にして、その相對して對稱をなす所の、元の各晶の結晶面を、雙晶面といふ。

さうしよう(相稱) Symmetry 動同形とも稱す同形の部を見よ。

さうしよくいし(裝飾石) 鑛その色、光澤共に美麗にして、産出多からざるものなるも、その硬度低く、價格寶石より低等なるものを、裝飾石とし、各種の裝飾用に供し、瑪瑙、玉髓、孔雀石、紫水晶、煙水晶、紅水晶、琥珀、蛋白石等にして、玉と稱するものは、東洋諸國に於て、古來より寶石として、重ぜらるゝも、これ、輝石の一種軟玉、角閃石の一種硬玉に外ならず。

さうしるゐ(雙翅類) Diptera 動昆蟲類の一目なり、口器は刺整及び吸吮に適し、翅は唯々前翅一對あるのみ、完全變態をなす、体面に往々毛を有す、頭は球狀にして、前後だ短し、觸角は種々の形狀なり、複眼は大にして、別に三單眼を具ふるもの多し、胸の三環節は、相固着し、前翅は膜狀にして、透明なり、その脈網細からず、後翅は頗る細く、かつ小く、その形太鼓の撥の如し、これを平均棍と稱す、往々鱗狀瓣を以て被はる、時に無翅なるものあり、脚は皆同形にして、末端に鉤爪及び吸盤を具ふ、その幼蟲は無脚にして蛹は卵狀或は俵狀なり、蠶蠅、蠅、蚊、蚤、虻等これに屬す。

さうどう(相同) Homology 動器官の作用如何を論ぜず、形体學上同一なることを示すの語なり、例へば人の手、獸の前脚、鳥の翼は、作用上大に異なりと雖、その發生並に構造の要點に於ては、三者皆相同し、故にこれを相同の器官といふ、相同的の近似は、動物間に存する親緣を確定すべき、目標なりとす、但相同を發見するは、往々容易の業にあらずして、苦に解剖のみならず、また發生を攻究するに非ざれば認定すること能はざることあり

さうばうきん(僧帽筋) Trapezius 生脊部の上半にあり、菱形をなして、頭、肩等をも蔽ふ大筋なり、頭、肩を動かす用をなす。

さうばうべん(僧帽瓣) Mitral valve 生心臟の部を見よ。

さうほん(草本) 植草本とは、莖の木質に變化せずして、花を開き、實を結び、後に枯死し或は地上にある部分盡く、枯死するものなりクサと稱するもの、多くは、これに屬す。

さうりむし(草履蟲) Paramaecium 動原生動物に屬し、纖毛蟲類なり、顯微鏡的の小虫、体狀扁平、長楕圓にして、殆んど透明なり、纖毛は全体面に生じ、前体の側部に陷凹あり

て、口はその底に開き、陷凹の内面もまた纖毛を生じ、その運動は渦流を起し、以て食料を得るの用に供し、口に次ぎ、食道あり、これを通過して入る所の食物を、内肉中に埋没して消化し、而して、その不消化部分は、口に接近して位せる、微小の肛門より排除す、この蟲の生殖するは、横分裂をなすによる、その分裂する前に、二蟲相同の側部を以て、暫時相接合すること、往々あり、常に、淡水中の汚物間に浮游す。

さかき(榊) Eurya ochnaea Szysz. Cleyera Japonica Thunb 圖山茶科の木本なり、社前に栽培し、神前に供ふるものこれなり。

さかたぎめ(逆頭鮫) Rhinobatus 動横口類に屬する魚なり、その前体頗る扁平にして、後体鮫の如し、嘴延長して尖り、背鰭に棘なし。

さかまた(鯱) Grampus 動シャチと俗稱せる鯨類にして、体長六尺許、黑色或は灰色、兩鰭

は翅の如く、背に鋸刻ありて、直立し、尾に至る、倒戟に似たり、頭上に噴汐孔あり、齒は兩側に十五許を有し、牙形をなし、堅硬なり、性猛惡にして、クジラ、サメ、イルカ等の大魚を捕食し、多數の齒を有す、牙は質緻密にして、有用なり。

さきよく(支棘) Pedicellaria, 海膽類の外面に尋常の棘と共に生ずる、一種の棘にして、その先端三枝に分れ、少しく膨大す、殊に口の周圍に多し、食餌を口へ送る用をなす。

さくら(櫻) 薔薇科の木本にして、その種類多く、花の大小、色、單瓣あり重瓣ありて一概ならざるも、その種類には、ヤマザクラ、サトザクラ、ゲサトザクラ、ヒガンサクラ、シダレザクラ、ミサクラ、等なり。

ミザクラはサクランボと稱する果實を生じ、極めて美味なり。

シダレザクラはヒガンザクラと同時に開き、花も同形なるも、枝條下垂す。

ヒガンザクラは櫻中早咲にして、その花の小なるものにイトザクラあり。

以上の四者は、その變種なるものなり。

(一)ヤマザクラ、山櫻を見よ。

(二)サトザクラ、里櫻を見よ。

(三)ゲサトザクラは、サトザクラに似たる、花小にして、花梗に毛あるを以て異なる、(Prunus var. Sieboldi Maxim) 要すにその花は、大抵美なるも、ヤマザクラ、サトザクラ、ヒガンザクラ、等その最なり。樹長も、その種により異るも、山櫻を以て、第一とし、長三丈、周九尺に至る、外皮は暗紅色にして、薄く横脱するものなり、產地は我國到る所產せざるなく、所々に林をなし、有名なるものあり、かつ東部亞細亞全部はこれを產するも、サトザクラは、本邦特有とす。木理緻密にして、一種の香氣あるを以て、家屋の

裝飾部に用ひ、かつ食器、器具を製し、彫刻料として、黃楊に次ぐ、木皮は曲物を纏に用ひ、花は鹽漬として、飲用の料とす。

さくらさう(櫻草) 薔薇櫻草科の草木なり、葉は托葉なく、花は兩性にして、花柱分離せず、開實を結び、種子は胚乳なく、花美なるを以て、栽培す。

さくろ(柘榴) Punica Granatum L. 薔千屈菜科の落葉灌木なり、葉は、楕圓形、花は、赤色、白色、八重等種類多し、蟲媒花なり、夏開く果實は、圓形、內皮を食用とす、ヘルシヤの原產なり、庭園に植へ花を賞し、花及び、果皮を染料とし、果實、種子及び根を藥用とす

さくろいし(柘榴石) Garnet 鐵等軸晶系に屬し、菱狀十二面体、四角二十四面体または、これ等の聚形をなす、或は粒狀、塊狀をなすものあり、赤褐、赤黑、綠黃色を呈し、金剛光、玻璃光を有し、性脆く、透明なるものあり、斷口半貝殼狀または粗面狀、白色の條痕色あり、硬度六、五乃至七、五、比重三、四、炭酸アルカリと共に熱すれば、分解し易し、その種類は、綠柘榴石は淡綠色、半透明にして、石灰岩中にあり、裝飾に適す、下保木(長門)に產す。貴柘榴石は赤褐色、または血紅色なるものあり、透明なり、寶石に擬せらる、淡紅柘榴石は肉赤色、及び黃柘榴石、黑柘榴石、肉桂石あり、岩石の主成、副成分をなして、粒となり盛河底に產す、ウラル山、諸威、ボヘミヤ、錫蘭島等より產し、本邦にては信濃の和田峠、常陸の山尾村、大和の穴虫、越中黑岳等有名なりと雖、未だ透明なる、美晶を見ず、透明にして、最美麗なるものは、寶石とす、普通なるものは、硬度高きを以て、粉末とし、硝子、寶石を琢磨するに用ゆ、金剛砂これなり。

さくりなSacculina 蔓根頭類に屬す、この蟲は

蟹の腹下に寄生し、單一なる、蕊狀体にして中に生殖器を藏し、肢は、その痕跡だも見ず、と雖、樹根狀の絲を宿主の内臓中に、埋沒し以て、營養分を吸取す。

さけ(鮭)Oncborhynchus Haberi, Hilgd 鰭喉鰷類の有腹鰭魚なり、体長二尺五寸許、背鰭の後に脂鰭と名くるものあり、上唇少しく下曲す、肉は脊多くして、美なり、産卵の節、海より河に溯る、多く、寒帶に産し、アラスカ、カナダ有名の産地にして、北海道の沿岸諸川に産す、筋子と稱するは、その卵なり、醃とす。

さこつ(鎖骨) Clavicle 動兩上肢骨の基部前側にあり、一端を肩胛骨の肩峰に接し、他端を胸骨の上緣に接し、S字狀に曲る長骨にして筋肉靱帶に固繫す、鎖骨は、腸骨、肩胛骨等の諸骨を束れて、一處に繫著するものなれば手は僅にこの一骨にて、軀幹に連接するを得たり。

さざえ(螺螺) Turbo Cornutus, Gmel 動腹歩類に屬す、螺施圓錐狀の殼を被り、外部暗苔色内面眞珠色を呈し、殼口圓く、甲を具ふ、海底岩礁間に棲息し、海藻類を食す、本邦の西南部及び東海の沿岸に産し、食用とし、殼は器具を製す。

さざんくわ(山茶花) Thea sasanqua (Thunb.) Nois. Camellia sasanqua Thunb 植山茶科の木本にして、茶は淡紅色、庭園に栽培す。

さし(挿木) Cuiting 植植物の枝を切り、その端を、濕ふくる土中に挿込み、或は適當の濕度を與ふ、または赤土を煉りて、挿入し、一個の植物となす、サツマイモ、ヤナギ等は容易に行ひ得べし。

さそりもどき Thelyphonus 動觸脚類を見よ。

さそりるわ(蠍類) Scorpionides 動蜘蛛類に屬し、その頭胸短く、三對乃至六對の單眼あり

腹は十三環節より成り、その後部の六環節は幅狹くして、尾狀を爲し、尾端に毒鉤あり、上顎は鉗狀をなせり、觸鬚は、大にして、各鬚を以て終る、四對の脚あり、第二腹環節の下面に、櫛狀の觸感器一對を具へ、第三より第六に至る、四腹環節は各一對の肺臓を具ふ胎生にして、その嚙咬有毒なり暖國に産し、二種あり、歐羅巴蠍は、体長二寸八分、その色銹赤、六眼を具へ、南蠍、支那に産し、石壁間に棲む、刺螫後、毒烈しからず、往時本邦に舶齎して、藥用とせり、亞非利加蠍は、長五寸に達し、その刺螫最も、劇烈にして、その刺螫せらるゝや、二時間を經ずして、斃る、亞非利加、東印度に産す。

さたうきび(甘庶) Saccharum officinarum L 圓禾本科の多年生草本なり、葉は長く、花は圓錐花序に排列す、無被にして、風媒花なり、熱帶地方の原産、莖より、砂糖を製す、琉球諸灣等に栽培す。

さつきつゝじ(杜鵑花) Rhododendron indicum S W Var macranthum Maxim 植石南科の灌木なり、花は紅色、蟲媒花、五月頃開花す栽培して、觀賞す、支那にも産すといふ。

さつせいくわ 雜性花)Polygamous flower 植一株の植物に、兩性花、雄花、雌花を共に具ふるものをいふ。

さつまいも(甘藷)Ipomaea Batatus Lam 植施花科の草本なり、葉は、蒼綠色、三角狀をなす、莖は長く地上を匍匐し、多肉なる塊根を生ず、澱粉に富み、甘味を有す、酒、飴、菜子等を製す。

さといも(芋) Colocasia antiquorum 植天南星科の草なり、葉は大形にして、長き綠色の葉柄あり、地下莖肥大して、澱粉と粘質に富む食用とすべし。

さとざくら(里櫻)Prunus var Horiensis Maxim

隨櫻の一種にして、重瓣のヤヘザクラ、單瓣にて大なる花を有するサクラ類をいふものにして、花甚だ美なるものなり、その新葉は綠色なり、人家に栽培を以て、サトザクラと稱しヤマザクラに對語す。

さなぎ(蛹)Pupa 蟲變態を見よ。

さなだむしるゐ(絲虫類)Cestodes 蟲扁形動物の扁虫類なり、脊椎動物に寄生するものにして、數多の片節と名くる、体片一列に連繫して、体軀を成し、その狀、眞田紐に似たり、その前端はこれを頭と稱し、附着器を具ふ、この器は、或は、四個の盃狀吸盤あることあり、或は二條の吸溝、或は吸盤の外、更に、數鉤を環生するものあり、頭に次ぎ、頸と稱し、細絲の如くにして、後方に續々片節を生ず、片節は各自に、雌雄生殖器を具へ、形体學上、一個体の資格あり、故に一連の條蟲はこれを一群体と看做すべし、腦は頭にありて後方に左右二條の大なる、神經を送り、水管は、体の兩側部に走り、群体の後端に於て、外通せり、消食器は、全くその跡を見ず、而して、滋養の收吸は、体面の滲入による、その体中後部の數片は、成熟を遂げたる者にして、逐次群体を離れ、外界に達し、中に無數の卵を放つものなり、かつまたその發生中宿主を變更するものにして、卵は先づ中間宿主の体内に入り、幼虫となりて、終結宿主の食する所となり、その腸に達し、條蟲となるなり、長さ三密迷位より、數十尺に達するものありて、その壽命も、短かきは數周間、長きは、十二年乃至三十五年位に至るものあり、その種類と中間宿主、終結宿主を擧ぐれば

種類名	中間宿主	終結宿主、
無鉤條虫	牛、	人類、
裂頭條虫	鮭、鱒、	多く人、
狗條虫	豚牛、	犬、或は人、
有鉤條虫	豚	人
鋸齒條虫	兎	多く犬
太頭條虫	鼠	猫

別斯條虫なるものあり、その他鳥、獸、魚類等に寄生する、條虫種類多し。

さなろ(砂囊)Gizzard 鳥類の消化器の一なり、前胃にて、胃液を受けたる食物は、砂囊に於て咀嚼せらる、その壁筋肉性にして、肉食鳥にありては、薄弱なるも、穀粒を食するものは、頗る原强かつその内面角質に變し、故さらに、砂石を嚥下し、食物を磨碎するに便にす。

さば(青花魚、鯖)Scomber 硬鱗類に屬する海産魚なり、体長七分位、二背鰭相離隔し、背鰭と尾鰭及び臀鰭と尾鰭の間に一種の假鰭あり、その色は背部、綠黑色、黑色の波紋、數十條なり、体側は黃色なり、腹部銀白色、本邦到る處に產し、周防佐渡郡を以て、最さす、生、鹽漬として、食す。

さはら(馬鮫魚)Cybium 硬背鰭及び臀鰭の後に大抵七乃至九以上の小鰭あり、齒は頗る鋭なり、背深綠褐色にして、概れ褐色の斑紋あり六月より十月に至り最多く、西南海に多し、硬鱗類なり。

さはら(花柏)Chamae Cyparis Pisibere S. et Z. 圓松柏科植物なり、葉は檜に比し先端尖り、裏面は白色なり、樹冠は圓錐形をなす、木質の五木の一なり、樹長十數丈、周二丈に至るものあり、その用途は檜に代用するものにして價格は檜に半す。

さめるゐ(鮫類)Selachoidei 硬扁鰓類に屬する横口魚類なり、体は長紡錐狀にして、鰓孔は側方に向て開口す、多く、熱帶の海洋に產し往々巨大なるものあり、皆運動迅速にして、その性强暴貪食す、その鱗の皮を剝き、乾燥

したるものを、鯊翅(フカノヒレ)と稱し、食用とす、多く支那に輸出す、また精小なるものは、肉を食ふべく、また魚餅(カマボコ)を製す、皮は物を摺磨するに用ひ、或は劒柄を飾るに用ゆ。

さや(莢鞘)Sheath 植葉身の基部の變したるものにして、禾本科植物の如きは、葉柄の變たるものなり。

さより(針魚)Hemiramphus 動軟鰭魚類なり、体長九寸、長形にして、復部に有翼鱗を二列に排列す、下顎大に延長して、嘴に似たり、かつ上は下顎に細齒を有す、全形サンマに似る、背部淡黑色、腹部銀白色体側に黃色の大縱走線あり、東海、西南海に多し。

さりがに 退蟹)Astacus 動甲殼類に類する、十脚類なり、本邦北地の河流に產し、前三對脚に鉗ありて、その第一對脚は螯を具ふ、この種の胃壁中その二側線より、分泌する、曲嚼用の圓板狀の炭酸石灰質隆起物は退蟹石と名く、この石は脫皮の後その胃中に溶解し、柔軟の体皮を堅硬ならしむる用あるが如し、往時これを醫藥用に供せり。

さる(猿猴) Macacus 動猴類にして、本邦に產する普通のものなり、その顏面赤色、頰囊あり、臀胝裸出す、体毛は褐色、尾は特に短く、その性敏捷、かつ狡猾にして、怒り易く、能く馴れ、人事を擬す、平素森林に棲息し、果實を食す。

さるのこしかけ(猿掛眼) Fomes Glaucotus, Cooke 圓菌類にして、その大なるものは五寸以上に達す、生樹の幹に直角に坐着し、半圓形にして腰掛の如し、爲に、樹木を枯死せしむることあり、床置物とす。

さるゝる(猴類)Pithecoi 動脊推動物中の人類に亞ぎ、高等なるものなり、四肢、皆、手の作用をなして樹上の生活に適し、前肢は後肢よりも長きを常とす、鎖骨あり、指趾每に爪を有し、只稀に鉤爪を具ふるものあり、面部裸出して、兩眼前に向ひ、容貌人類に近似すと雖、口吻必ず突出せり、門齒は上下各々四個を有し、相密接して列生す、犬齒は圓錐形をなし往々甚だ强大なり、臼齒は五乃至六あり、性狡猾にして、常に深山茂林中に群居し、專ら果實、野菜等を食し、または昆蟲を食するものあり、亞細亞、亞非利亞、亞米利加の溫暖地方に產し、歐洲には只ジブラルタルに一種を產するのみ三類に分つ。

鉤爪猴類(絹猴、獅猴)、廣鼻猴類(吼猴、懸猴)狹鼻猴類(狒々、猩猴、猩々)曲鼻猴類、(猫猴、狐猴、指猴)なり。

さんごじゅ(珊瑚樹)動サンゴ虫の共同骨骼にして、紅、淡紅、白色等あり、種々の飾品を作る、本邦にては、土佐產を最良とす。

さんごちゃう(珊瑚礁) Coral reef 動珊瑚蟲類の動物骨骼の、堆積して、洋中に生じたるものなり、その位置によりて、三種に分つ、即ち島緣に接するものを緣礁といひ、島と海を隔てゝ存在するものを堡礁といひ、島を有せざる、環狀礁を、環礁といふ。

さんごちゃうるゐ(珊瑚蟲類)Anthozoa 動腔腸動物の一綱なり、体は常に、ぽりぷ狀にして、單体なること、群体なることあり、体壁に三層あり、その中層中一種の骨骼を生ずるものと生ざるあり、下面を以て、物に附着し、上面中央に裂狀の口を開き、許多の觸手その周圍に環生す、その狀菊花の如し、もし、これに觸れば、忽ち、收縮し、蕊を閉ちたる如し口を入りて內腔中に懸垂せる管狀の食道ありその下端は腔腸と相通す、腔腸は車輻狀(放射狀)に配置せる、直立膜即ち、隔膜を以て數房に區分す、この膜は体の上部に在ては、体壁と食道壁とを、連接すと雖、下部にあり

ては、食道なきが故に、内方に於て遊離緣を以て終れり、この遊離緣に、隔膜絲と稱する回施絲を附着す、則細胞に富み、一種の消化液を分泌するものなり、雌雄、概れ、異体にして、生殖物は隔膜に生す、生殖は、發芽若くは分裂法に因る、增殖して、枝狀、または圓塊狀の群体をなすに至るもの、甚だ多し、その諸ポリプは共肉の連續するものにして、一虫の收取したる、營養はこれを群体一同に傳達するものなり、ポリプ体中並に群体の共肉中に生ずる、石灰質は緻密にして、角質なるあり、或は石質なるあり、または小骨片の無數聚成するものにして、これを藏する組織は、爲に革質、若くは脆硬なるものなり、その共同骨骼は、島の附近に集積して、巨大の塊をなし、珊瑚島、珊瑚礁を成す、總て、熱帶地方の海洋に產す、分て二となす。

多放線蟲類(イソギンチヤク)

八放線蟲類　(石鐵、海花石、石茎、ハマサンゴ、ビワガライン)等なり。

さんごさう(珊瑚菜)Phellopterus littoralis, Fr　圓繖形科の草本なり、數個の小葉より成る複葉を有し、花は小、白色なり、複繖形花序に排列す、その新葉は紅色にして味美なり、海岸に自生す。ハマハツフウともいふ。

さんしやしやちけい(三斜晶系)Trielielinic System　圓結晶の三軸ともに、その長さを異にし、互に斜角をなして、交叉するものをいふ而してこれに屬する、五個の定面像とは(一)三斜尖体、(二)三斜柱、(三)三斜底面体(四)三斜頂面体、(五)三斜側軸底面体なり。

さんせう(山椒)Zanthoxylum piperitum D. C.　圓芸香科の木本なり、葉は複羽狀をなし、花は單性、雌雄異株なり、莖に棘を有す、新葉果實は香氣ありて食用とす。

さんせうをこ(鯉魚)Cryptobranchus Japonicus

Y. d. How　圓兩棲類中最大なるを以て著名なり、全身黑褐色にして、皮膚に疣狀の突起あり、頭扁平、眼小なり、その尾大に側扁す幼時は頭側の小房中に、小鰓あるも、老成するに至り、全く消失し、肺を以て呼吸す、故に魚形類に屬し、井守類に近きものなり、伊賀、伊勢、その他中國の山間溪水に棲す、その肉美味なり食すべし。

さんせんべん(三尖瓣)Tricuspatad valve　圓肺の右心耳と右心室間にある三枚の瓣をいふ。

さんたいいちすゐ(三体雌雄)Triadelphous stamens　圓多くの雌蕊が花絲により、三束に分たれたるものをいふ。

さんとうはくきん(三頭膊筋)Triceps brachii　圓上膊の後側にあり、その三頭なる一頭を肩胛骨に、二頭を上膊骨に附着し、先端は尺骨の後面に集着し、二頭膊筋に抗抵して、腕を伸ばしむる用をなす。

さんま(秋光魚)Mountain range　圓鯖類に屬し、サヨリに似て、少しく大なるものあり、背部綠色、腹側部銀白色にして、腹側の横線は眞珠色なり、洋面に群游し、東海及び紀伊東部に產す、その味美なり。

さんりようきん(三稜筋)Deltoid muscle　圓肩の外側にありて、三角形の筋なり、腕を水平まで擧くるときは、堅くなる筋なり、收縮すれば、腕を擧上するの用をなすものこれなり

し

し(翅)　圓昆虫類の翼なり、一般に膜狀の擴張物にして、網狀の翅脈を以て、支持す、前肢と後肢なるものあり、前後兩翅、異形なるあり、同形なるありて、前は剛く、後肢薄きも

の、同形、同質にして細鱗を被るものあり、多く飛翔の用をなす。

し(肢)Legs or Limb 動前後に兩肢なるあり、以上數多を有するものあり、一定ならず、外骨骼なるあり、內骨骼なるあり、歩行、握物の用をなす。

し(翅)Contour feather 動鳥の翼、尾にある、長羽毛なり、翮と稱する一部を以て、皮膚中に挿入し、羽軸に連りて、兩側に羽枝を列生し、羽枝は更に小枝を列し、互に相密接して一面をなすこれを甲といふ、小羽枝に三個の小鉤あり、翅は、その生ずる体部によりて、名稱を異にす、肩部に生ずるを肩翅、尾羽の根本にあるものを尾筒、翼中拇指より生ずるものを角翅、その他の指骨及び掌骨より生ずる最長大なるを手翅、尺骨より生ずるを腕翅、上腕骨より生ずるを臂翅、その他の上下面を被覆する小羽を覆翼翅、その他の軀幹上面を覆ふ、短小なるを翁といふ。

しう(臭)Smell 動鑛物は、摩擦のため、或は濕潤、酸類、加熱等の爲に一種の臭氣を發す、臭に六種の別あり、(一)葱蒜臭、砒素を含みたる、鑛物を熱するとき、(二)草根臭山漿の腐敗したる如き臭、セレニウムを熱したるとき、(三)腐卵臭、石英、または方解石を、摩擦したるとき、(四)粘土臭、礬土に有する、粘土樣臭(五)硫黃臭、硫黃を燃したるとき、(六)土瀝青臭土瀝青に起る等なり。

しうかきん 嗅感器(臭)をいふ。

しうくつせつ(重屈折) 動光線が、斜に鑛物の面を、射るに當りて、單に、屈折するのみならず、更に、特別の定則に從ひて、光線を屈折せしめて、二個に離さす、即ち一の物が二個になりて見ゆ、これを光線の重屈折といふ氷洲石に始めて發見せられ、方斜石に著し。

しうけつしゆくしゆ(終結宿主) 動動物が寄生するに際し、先づ中間宿主体に寄して、最終に寄生する、宿主を終結宿主といふ、例へばサナダムシが、先づ、牛豚等に寄生して、牛豚を食して、爲にサナダムシに寄生せらるゝ人体は終結宿主なり。

しうしゆくはう(收縮胞)Contractile vacuole 動原生動物の体內に生ずる球体をなすものにして、これを生じ、大形となれば、破裂して、消失し、更に隨所に生じ、再び消失し、これを反覆し、以て循環に似たる作用をなす。

じうねんすじ(柔軟組織)Parenchyma 植細胞膜薄く、球形、楕圓形、多角形等の細胞相結合し液汁を包有し、かつ葉粒素を有するものと否らざるものあり、前者は、莖の皮部を殘す一部と、葉の內部にあり、後者は、裸子植物、双子葉植物の莖皮部、髓、及び射出髓或は根の皮部または液汁を含める果實の內部をなす。

じうもう(絨毛)Villi 生小腸の內面に無數の突起、金面に生じ、天鵞絨狀をなすものにして乳糜を吸取して、淋巴管に送る用をなす。

しうゐ(皺胃) Abomasus 動反芻類動物の第四胃にして、內面に細皺あり、重瓣胃より來る食物を受けて、消化し、これを腸に送るの用をなす。

しか(鹿)Cervus 動反芻偶蹄類にして、四肢細長なり、性溫和、鳴聲可憐、能く人に馴れ、体色は黃褐なり、雄は分岐せる角を有し、毎歲春に脫し、骨質なり、新角の生ずるや、初は血液を循環し皮膚を被ひ、柔軟なるも、漸次骨質を沈澱し、充分成長すれば、根部基部に突起を生じ、これによりて循環を止め、遂にこれを被ひたりし、皮膚は剝離し、次第に叉枝を增す、本邦の山中に野生し、新葉、葉根を食す、肉は美味、角は種々の細工に用ひ皮は手袋、その他用多し。

しがい(子蓋) Indusium 圖子囊群を包被するもの、ヤブソテツの如く、圓形なるもの、イヌワラビの如く半月形なるものあり。

しかく(耳殼) Pinna 圖耳介とも稱し、俗に耳といふものなり、頭側に露出し、纖維質軟骨より成り、皮膚その上を被包す、耳門の輪廓にして、音響を集合する部なり。

しかくるゐ(枝角類) 動甲殼類にして、淡水に產し、顯微鏡的のものなり、ミジンコこれに屬す。

しき(四季) Seasons 圖四季即ち、春夏秋冬、地球は自轉しつゝ太陽の周圍を、楕圓形に公轉す、その一周は一年を要するものにして、赤道面と二十三度半の傾斜をなし、地球と太陽の距離、一周中同一ならず、太陽より受くる熱も恒に等しからず、茲により、斜に光線を受け、その傾斜の度甚しき所は、冬、傾斜の度少なき所は、夏、その中間は春、秋即ち四季の循環を生ず。

しき(鳴及鷸) Snipe 動涉禽類に屬し、嘴細弱にして、軟く多少屈折す、その肢には四趾を具へ、蹼なし、その体毛一ならず、みな沼澤の間に生息し、小魚、小蟲を食す、ホトシギ、タマシギ、タシギ、オホシャクシギ、コシャクシギ、イソシギ、アカアシシギ、キアシシギ、ソリハシシギ等種類多し。

じきせい(磁氣性) 圖鑛物の或種類を、鐵に接近するときは、忽ち吸引すべし、この性を磁氣性といふ、即ち磁石と稱するものは、天然にその性質あるものなるも、炭酸鐵の如きは、一時磁石に觸るゝ時は、直に感染して、磁氣を顯はす。

しきりさいはう(色素細胞) Chromatophore 圖色素細胞は皮膚にある、有色の細胞にして、伸長するときは、中心より八方に根狀枝を出し、以て体色を變し、收縮すれば一小點となる、こと隨意なり、二三の色素を併有するものありて、自存保護の自然淘汰の結果その外界の色に應して、種々に變色するものなり、例へば、青色細胞を伸長して、赤色細胞を收縮すれば体色青色に變ず、カメレオン、イカ等に例あり。

しきたく(雌器托) Archegonial receptacle 圖雌性の葉狀体に生じ星芒狀に射出せるものなり成熟するときは、有柄にして、全体七八指にて成る、その内面に雌器あり、内部に卵珠を藏す。

じきのせいはふ(磁器の製法) 圖石英の細末を陶土と混和して、素燒を作り、燒青等にて描畫し、柞灰を調合したる釉藥を加へて燒く唐津の人、明の時代に支那法により製したるに始る、故に唐津物といふ、陶器に比し、質緻密にして固く、白色半透明なり、瀬戸燒、萬古燒、清水燒、伊萬里燒、九谷燒等これに屬す。

しきみ(莽草) Illicium Anisatum L. 圖木蘭科の常綠小喬本なり、山中に自生す、往々寺院墓地等に栽植す、花は淡綠色、季節春、甲蟲媒花なり、秋、七八角のある實を結ぶ、一種の香氣あり、實に毒あり、誤りて中毒するものあり、その狀ドクウツギに似たり、莖、葉とも多少の毒あり、藥用、香料とす、ハナノキともいふ。

しきやうゆうずゐ(四強雄蕊) Tetrady-namous stamens 圖ナヅナの花に於ける如く、六雄蕊ありて、その内四雄蕊は長く、二雄蕊は短きものあるとき、四長雄蕊と稱するものなり

しきんせき(試金石) Touch-stone 圖桂板石の別名なり。

しくま(熊) Ursus Arctos. L. 動食肉類に屬し体色茶褐色、体長五尺、强力にして、能く牛馬を運搬し、立木を折る、その齒は概ね鋭な

らず、指趾各々五ありて、全蹠地を蹈む、尾は短し、冬季は食せず、動かずして、穴中に冬眠す、常に深山に栖息し、或は人家に近く來り、樹木に攀り果實を取食す、また野菜の根を掘りて食すも、時としては家畜類を窃取して食することあり、怒るときは人を害す、歐洲、北亞細亞、北海道に產す、アカグマ、ヒグマの名あり、肉、毛皮、脂肪等、食用、藥用、敷物等を製す、北海道土人は衣となすものあり。

じくわ(雌花)圖Pistillate flower　一花の內雄蕊を闕き、雌蕊のみを有するものをいふ。

じくわしゆせい(自花受精)Self Fertilization　圖一花中の雄蕊の花粉が、同花の雌蕊の胚珠に受胎せしむるものをいふ。

じとうるる(樹口類)　動蜂雀類の一亞目なり、嘴は大抵短濶にして、その側緣には、多少の長き、剛毛を有す、而してその開口するときは、極めて大なり、一般に飛翔する際に食物を啄む性あり、金糸雀、燕、魚狗の類これに屬す。

しとつ(指骨)Phalanges　圖指を成す骨にして拇指二枚、他の四指三枚の小管骨より成り、即ち拇指は二節、四指は三節あり、後部掌骨に連り、骨端次第に匀殺して、扁圓形に了る

しとつ(趾骨) Phalanges　圖蹠骨の前部に位し所謂足趾を構成す、第一乃至第五趾骨と稱す、その數十四個あり、形狀は圓柱にして最小、その聯接は蹠骨及び各節相互に關節す。

しとつ(篩骨) Ethmoid bone　圖眼窩內の後壁をなす、薄き小骨なり。

じとつ(耳骨)Ossicula auditus　圖中耳內にある三小骨なり、相連りて一系をなす、槌骨は鼓膜に附着して、金槌狀の如く、その振動を受け、直にこれを砧骨といふ、金床に似たる骨に傳へ、これを鐙狀をなせる鐙骨に傳へ、鐙骨は內耳に傳送す。

じきいきいはう(自在細胞)Free cells　動流動体狀物質中に浮游し、若くは結組織中を自在に遊走する細胞をいふ、血液中に見る、血球、淋巴球等はその的例なり、卵及び精蟲もまた自在細胞と看做すべし。

しし(獅子)Felis L　動食肉類に屬する貓類なり、白熊に亞ぎ大なるものにして、顏面廣濶尾端流蘇の如く、体毛密生し、雄にありては鬣あり、性强猛、吼聲は凄くして、百獸を恐れしむ、その飛躍力も强大にして、羊等を咬へ、能く一丈餘の高垣を越へ、數間の幅ある溝を飛越へ得べし、貓と同くし、走行に足音せず、亞非利加、西南亞細亞、伯兒西に產し、溫血動物の肉、血を養料とし、獸王と稱す、夜間出で、山間絕壁の間を、徘徊す。

しいさ(齒式)Dental formula　圖哺乳類、人類の成齒、乳齒を示せば左の如し。

	上	下	上	下	上	下
大臼齒	三	一	三	三	二	二
小臼齒	一	一	二	二	一	一
犬齒	一	一	一	一	一	一
門齒	二	三	四	四	四	四
犬齒			一	一	一	一
小臼齒	一	一	二	二	二	二
大臼齒	一	一	三	三	三	三
合計	一六		三二		二〇	

哺乳類　成齒(人類)　乳齒(人類)

しいさる(獅猴)Midas　動鉤爪猴類にして、その形狀獅子に似たり、体毛極めて長く、尾には總毛を有して直立す、廣々亞細亞地方の園圃及び葡萄山を壞拔す。

ししばう(刺糸胞)Nematocyst　動腔腸動物の外面の皮膜中にある、無數の小細胞なり、外部の刺激に應して、細胞中に螺旋狀をなし、蹈れる微絲を放射して、他物を刺す、これ護身と、食料となるべき、小蟲を襲撃するの裝置

なり、水母類の如きは、頗る強力なるものあり、これに觸れば、劇き疼痛を感することあり。

しじふから(白頰鳥)Parus minor, F. & S. 鵰 燕雀類にして、背部は黑白の斑をなし、喉部黑く、黑線延ひて脚間に達する小鳥なり、暮秋の候渡來す、常に樹間に徘徊し、害蟲を食す、これを養て馴れしむ。

しじみ(蜆)Corbicula 鵰 瀕臨類にして、同柱貝なり、その殼厚くして、上皮を被り、暗褐、黑色なり、その內面は稍紫色、多く汚地、河川等の淡水中に產し、味美ならすと雖、食用とすべし、その殼螺鈿に用ふ、アカシジミ、カハシジミ、シンデンシジミ、スハシジミ、その種類多し。

しじやうたい(絲狀体)Protonema 鵰 瀕類の胞子より、發芽する、綠色絲狀のものを生じ、その一部に眞の幼芽を生して、發生するものなり。

しじやうにうとう(絲狀乳頭)Filiform papilla 鵰 舌の上面全体に絲狀をなせる、無數の小突起なり。

しるる(齒嘴類) 鵰 燕雀類の一亞目なり、嘴の上尖端に近く、左右一對の齒狀缺刻あり、專ら昆蟲を食す、伯勞、鶯、鶺鴒これに屬す。

じせんたうた(自然淘汰)Natural selection 鵰 產生物が種族の繁殖を期せんとせば、必す外界の境遇と適合する、形態を具へざるべからす、若し、その境遇に反する如き、体形を有するときは、自然に漸滅するものなり、この作用を、自然淘汰といふ。

じせんてつ(自然鐵)Native iron 鵰 自然に產する鐵なり、鑛中殆んど全量の鐵を含むもの、隕鐵、地鐵などなり。

しぜんどう(自然銅)Native Copper 鵰 自然銅、即ち天然に產する銅は、等軸晶系に屬し、樹枝狀、薄苔狀、亂絲狀等をなし、他の銅鑛と共に鑛床、または鑛脈中より產す、硬度は銀と差なく、比重は十一倍餘あり、色は赤褐色研けば光澤發し、大氣中に曝露せば、酸化して黑色となり、炭酸と化合すれば、綠青を生す、展、延の性に富み、銅箔、銅線となし電氣、熱の良導体なるを以て電線に用ゐる、かつ金屬中最強の音響を發す、北米有名の產地にして、本邦にては、足尾、別子、阿仁その他少なからす。

しぜんぶんるる(自然分類)Natural classification 鵰 產生物 形態、構造、發生を比較し、系統的に序に從ひて、自然の類緣により、一類とする法なり。

した(舌)Tongue 鵰 味覺器の一、舌は口腔の底部に位し、舌根を喉口に懸著して、游離する一個の筋肉体にして、諸種の筋にて、顎顏骨の支撐突起と、舌骨とに固著し、後際厚く、前端薄し、口蓋の延展粘膜はその全面を包む、迅速に運動自在にして、その形も種々に變することを得、咀嚼の際食物を齒面に載せ、食物を嚥下せしめ、言語を作り、その表面は四味、觸角を司る、舌面には無數の小突起ありその形を異にす、絲狀をなし、全面にあるものを絲狀乳頭といひ、先端分裂す、先端丸く細き有柄菌の如きものを、菌狀乳頭といひ、絲狀乳頭の間に散在す、舌の基部に近く、人字形に開列し、形大にて溝に圍まるゝを輪狀乳頭といゝ、輪狀乳頭の周圍なる溝の內面には味蕾細胞集り、玉葱狀をなすものを味蕾といふ、何れが如何なる味を感するが、不明なるも、甘、酸味は舌先、鹹苦味は舌根に於て感するが如し、第九對舌咽神經味識を司る。

したむし(舌虫)pentastomum 鵰 雄虫は十八乃至二十六密迷、雌虫は七十乃至百三十密迷、

その体色黄、人、犬馬、山羊等の鼻腔内に懸着して産卵す、鼻出血、鼻カタルヲ起す、卵は鼻粘液に混し、外界に出て、植物の葉等に附着し、人、兎、羊等これを食するときは共に胃に入り、孵て肝、肺等の道を經て終に鼻腔内に侵入し、成虫となる、また一回外界に出でゝ他の宿主の鼻腔中に入り成育す、故に卵の發育より、成虫に至るまで、中間宿主を要すること甚し、舌形類の昆蟲なり。

しだれやなぎ(枝垂柳)Weeping willow 顯楊柳科にして、葉は互生にして、幅狹くして長し托葉なし、花は雌雄異株、種子絲狀毛あり、かつ胚乳のり、多く河畔に生し、樹皮は藥用とし、材は有用なり。

しちたち(七島)Cyperus tegetiformis 顯莎草科の草本にして、莖を織りて席となす、七島表これなり。

しちめ Cydippe pinnosa Ag 顯櫛水母類に屬し、体長二分乃至七分ありて、地中海に産す

しちめんてう(七面鳥)Meleagria gallopavo L. 顯カラクンテウともいひ、鶏鶏類に屬し、雄は、三尺以上、雌は二尺五寸位、羽毛美なり頭頸を裸出し、上嘴根に肉瓣を下垂し、頸々雌色す、喉部にも、肉垂あり、嘴短大なり、北亞米利加に産す。肉美味なり。

しつかいとつ(膝蓋骨)Patella 顯膝の前面にあり、その形栗實の如にして、一個別様の骨なり、緊く膝關節上に密著して、これを被覆し大にその強固を助く。

じつきやくるる(十脚類)Decapoda 顯頭胸の諸環癒悉く、一体一甲に癒著し、個個に用ふる所の脚五對あり、第一對脚は往々螯を成し、鰓は脚基に附著し、胸甲下左右の窩内に隙伏す、腹に挽脚あり、雌にありてはその産する卵を擁くの用をなす、その長尾なるものを、短尾なるものとにより、蝦類、蟹類の二亞目に分つ。

しつはふ(濕法) 顯礦物の鑑定上吹管分析と共に行るゝものにして、その化學成分を知るが爲に、化學分析術に於て一日礦物を酸類に溶解し、これに種々の試檢法を加へて、沈澱せしめ、以てその元素を判し、併せて、その分量をも檢定するにあり。

じてつくわう(磁鐵鑛) Magnetite 顯等軸晶系に屬し、八面體、粒狀、塊狀をなす、黑色にして、金屬光澤あり、比重四・九乃至五・二、比重は五・五乃至六・五、條痕に黑色を呈し、劈開は八面なり、磁氣性著し、成分は、鐵、酸素、マグネシア等を含む礦類に溶解すと雖吹管熱には殆んど溶けず、火成岩中に産し、または片岩中に鑛床をなす、また細砂集りて層をなすことあり、或は川岸の砂土に散布するものあり、砂鐵といふ、皆採鐵の良鑛なり産地はスカンヂナビヤ山脈中、北米、コルシカ島等にして、本邦には、地鐵を陸中釜石、上野中小坂、砂鐵を伯耆、出雲、石見、備後の諸國に産す。

しとときん(四頭筋)Quadriceps femoris 顯腿の前面にある、最大筋にして、上は大腿骨及び耻骨に付著し、膝蓋骨の前面を下りて脛骨に連り、膝を伸ばし、脛を屈する用をなす。

しなう(子囊)Sporangium 顯胞子を藏する、囊狀體にして、その被膜は、列をなせる細胞にして、囊の下部に短き子囊柄ありて支持す、期至れば環帶と稱する、彈力組織あるもの、子囊を破り、胞子を飛散せしむ。

しなうきん(子囊菌) 顯菌茸の類類により、その胞子が一の子囊中に藏せらるゝ菌をいふ。

しなうたい(子囊體)Sporogonium 顯ミツゴケ、スギゴケ等の莖の上部に無葉の柄條ありて、

その頂端に雄器、雌器を具有し、卵子を生し卵子はそのまゝ發育して胞子囊を生じ、成熟して、胞子を散布す、柄の下部に鞘あり、柄の上部に帽ありて、胞子囊を被包す。

しのぶ 海州骨碎補)Davallia bullata wall 圖水龍骨科の草木なり、羊齒植物にして、深山溪谷に生するも、採りて、地下莖を球狀に纏へ庭前に垂下し、以て觀賞す、その葉緣に子囊群を生す、奥州著名の信夫文字摺は、この草の形を摺りたるものなり。

しばり(子房)Ovary 圖雌蕊の下部膨大し、胚珠を藏する所なり。

しばうちしき(脂肪組織) 圖纖維狀の結組織細胞中、時に或は脂肪を充滿することあり、この場合に於て、特にこれを脂肪組織といふ。

しばうへい(子房柄)Gynophore 圖子房の柄をいふ、これ花托の伸長せるものなり。

しばん(篩板)Madreporite 圖穿孔隆起、穿孔體さき稱す、棘皮動物特有器官の一部にして、肛門に接する所に位する、石灰質の板狀體にして、無數の孔を開き、以て自在に海水を出入せしめ、その接する所の石管を通して蓋に送る。

しばんめんぎり(四半面像)Tetrahedrism 圖完面像の四分一の面のみ發達せる、缺面像をいふ。

しび(鮪、金鈎魚)Thynnus Sibi 圖極鰭類に屬する、海魚にして、その體長、體色マグロに酷似し、能く同一視するものあり、肉もまた脂肪に富むも、その味マグロに及ばず。

しびたけ(椎茸)Tepiota shiitake 圖ナラ、シヒ等の如き樹木に生する、菌植物なり、マツタケの如く肥大ならず、菌傘黑褐色を帶び、菌傘と菌柄の區別あり、菌傘の內面は輻射狀の菌褶をなし、擔子細胞ありて、その小柄上に

胞子を生ず、これを乾燥して、食用とす、美味なり。

しびれうなぎ(Gymnotus) 圖喉鰭類の無腹鰭魚なり、淡水に產し、體長は六尺に達するものあり、體色は黃綠色にして、斑紋を散點す、發電機は、腹部下皮にありて、强力なる電氣を發し、自衛、擊敵の用をなす、ブラシル國アマゾン河に產し、これを捕ふるに馬に蹈ましめ、電氣の盡て後、捕獲すと。

しびれえび(木匂蝦)Astrape dipterygia, M & H. 圖横口類に屬する魚類なり、この魚は電氣を發する水邦產のものなり、體長二尺以上、黑色にして、電氣機は頭の兩側にありて數多の六角柱狀物より成し、これを應用して外敵に抗し、他魚を捕ふ、水邦沿海稀に產す

しぶつきせい(死生寄生)Saprophytism 圖常に生活力なき、腐敗物、腐植土等の如き死物に寄生して、以て自己の養料を採り、無機物を同化して、自己を養ふ能はざるものなり。

じふじくわしよくぶつ 十字科植物)Cruciferae 圖特徵は蕚二、花瓣四、雄蕊六ありて、二層に排列す、外層二にして、短小、內層は四にして長大、雌蕊二にして合一し、子房二室、その胎座は側膜にあり、また僞隔膜を生す、種子は胚乳あり、タンコン類、タチツケバナ類、イヌナヅナ類、ナツナ類、タイセイ類これに屬す。

じふにしちやう(十二指腸)Duodenum 圖小腸上部にして、幽門に始まり、數寸の部に終る、膽汁、膵液の注入する所なり。

じへいべん(自閉瓣)Valvulae conniventes 圖小腸の內面にある、淡紅色、半圓形をなせる粘膜瓣にして、血管に富み横皺多し、これ乳糜をして、小腸內を緩流せしめんがためなり

しぼふきがひ(鹽吹貝) Natra veneriform Desh 圖薄鰓類に屬する同柱二枚貝なり、そ

の殻は三稜形にして、左右同形なり、殻は外部淡色、内部白色、その肉は美味ならざるも食用に供すに足る。

しほまねき(招汐)Ocypoda dilatata De Haan 動十脚類に屬する、小蟹なり、體色淡黑、整の下面白し、かつ眼柄長し、常に海岸砂土中に穴居し、干汐の時出て、兩整を上下す、その狀汐を招くが如し故にこの名あり。

しまねずみ(金花鼠)Tamias 動齧齒類に屬する栗鼠族なり、體長二三寸、體色黄褐色、背に五條の縱線あり、尾は體より短く、四肢短くして、頰に囊を具す、亞、歐、米の北部及び北海道に產し、穴中に棲息す。

しまばえ(大麻蠅)Sarcophaga 動雙翅類に屬する蠅なり、その體黑白色を雜へ、胎生するものなり、糞桶中に生ずるカミサゲムシはその仔蟲なり。

しまみいうく(縞水兎)Bubo 動猛禽類に屬する夜鳥なり、前頭の兩側に最大なる、羽毛、耳立し、兩翼は長く、同族中の最大なるものなり、兎の如き小動物を捕食す。

しみ(衣魚)Lepisma 動彈尾類に屬する昆蟲にして、體楕圓形にして、扁く後體に三長尾を具し、放光の小鱗を被る、背部銀白色を呈す故にキラムシの別名あり、書籍、反古中に棲し、これを害食す。

しも(霜)Frost 動露の凍りたるものをいふ。

しもくれん 植雙子葉植物にして、木蘭科の落葉喬木なり、庭園に栽培して、花を賞す、春季開花し、蟲媒花なり、支那の原產なり。

しやうが(生薑)Zingiber officinale Rose 植薄荷科の草木なり、葉は長く地下の莖部肥大して、一種の香氣と辛味あり、これを辛料として、食し、また藥とす。

しやうかく(上顎)Mandible 動上顎、大顎、大顎とも稱す、節足動物の上顎をいふものにして、その下顎に比し大なり。

しやうかくこつ(上顎骨)Maxillary bone 生顎面部骨格にして、上方の齒を生せしむる骨なり。

しやうがん(晶巖) 鑛結晶は個々別々に生じ、その下端を岩石に著け數多相集るものなり、水晶にこの例あり。

しやうげんれう(滋養原料) 生植物、動物により、多少異るも、人類に於ては、蛋白質、類蛋白質、脂肪、澱粉、砂糖等、その主要なるものにして、蛋白質は窒素を含むにより、含窒滋養分、脂肪、澱粉、砂糖等は單に炭素、水素、酸素の三者より成り、窒素を含まざるを以て、無窒滋養分といふ、人類に於て生活上一日も缺くべからざるものなり、類蛋白質は窒素を含みて、幾分か蛋白質に似るも、滋養分少し。

しやうがくこつ(掌骨)Metacarpus 生掌を成す、五個の細長骨にして、逼密して、排列し、排指の掌骨は最も敏捷の開合運動をなす。

じやうさい(上顎)Mandible 動上顎をいふなり節足動物の口器中尤もよく發達せる部なり、昆蟲類、甲殼類にありては、堅硬かつ大形、ムカデ、クモ等は先端尖り、毒線を開口す。

じやうし(上肢)Fore limb 動四肢動物の前股、人類に於ては、手をいふ。

じやうしこつ(上肢骨)Fore limb bone 生手を成す骨にして、左右一對あり、肩部を基とし鎖骨、肩胛骨、上膊骨、撓骨、尺骨、腕骨、掌骨、指骨より成る。

しやうじやう(猩々)Pithecus 動狹鼻猴類に屬し、黑猩々に亞ぎ、人類に近似す、體長四尺許、毛色赤褐色、顏面黑色を呈し、皺紋あり耳は人耳の如く、前肢を下垂すれば、殆んど足部に達す、尾及び臀胝なし、性情、かつ怯

なり、ホルネオ、スマトラ等の林中に棲息す

じやうじゆきん(顳顬筋) Temporal muscle 圖頭部側面にありて、顳顬骨に起り、下顎骨の上縁突起に著位す、收縮すれば、顎を鎖し、咀嚼の運動をなす。

しやうじゆとつ(顳顬骨) Temporal bone 圖頭部の側面にあり、中央部は內方に厚く、この內に耳の諸官を藏す。

じやうしん(上唇) Labrum 圖昆蟲類の口器の一部にして、唇狀をなせる、薄膜をいふ。

しやうぎく(晶族) Druse 圖鑛物、晶群を成して岩石の周圍に沿ふものをいふ、石英等にその例多し。

じやうぼきん(釀母菌) 圖種々の糖分を、アルコホルに變ぜしむる、酵母にして、酒造等の釀母を成すものなり、稍大形にして、球狀、楕圓形をなり、原形質物質及び少數の空胞を含有す、繁殖法に種々あり、多數の胞子を作り、成熟して破裂分殖するものと、體の一方に發芽し、成熟して分離し、または芽を相結合し、多數の釀母相接連するものと、菌絲を生し、漸く膨大して、分離するものあり。

じやうみやく(靜脈) Vein 圖靜脈は、毛細管より集る血液を受くる血管にして、その壓力も動脈に比して、弱く、從ひてその壁薄く、かつ容易に扁平となる、皮膚に近き靜脈は處に瓣膜ありて、血脈の毛細管內へ逆流を防ぐ、靜脈は大抵皮膚の直下にあるも、動脈の如く、脈搏なきを以て、これを傷るも、危險少し、これを左の諸脈に分つ、

(イ)頭靜脈は、頭部以上を發ひたる血脈を集め、左右二脈あり、

(ロ)鎖骨下靜脈、左右の腕より來る、

(ハ)奇靜脈、胸部にあり、

(二)以上合して、下行大靜脈となる

(イ)腸骨靜脈、左右の脚にあり、合して、一脈となり、腎骨の前側を上行す。

(ロ)腎靜脈、腎臟より、出でゝ、腸骨靜脈と合す。

(ハ)門靜脈、各器官の細靜脈、漸次相合してなり、肝臟に入る。

(ニ)肝靜脈、肝臟より來る、門脈の肝臟に入りて、毛細管となり、更に一靜脈をなす。

(二)(イ)は(ロ)と合し、上行大靜脈となり、更に(ニ)を合して、右心耳に入る。

(三)肺靜脈、二脈相合して、肺より左心耳に連る、肺に於て、炭素を取りたる、血液を心臟に、還流せしむ。

しやうみやくけつ(靜脈血) 圖靜脈內の血液をいひ、體循環に於て、各組織を養ひたる動脈血は、酸素を奪はれ、還元して、炭酸瓦斯、老廢物を含有し、暗紅色を帶ふ、故に大靜脈より、心臟に歸し、而び肺に入るものなり、肺循環に於ては、清血なり、然れども、腎靜血脈は、尿なく、肺靜脈血は炭酸瓦斯を含ます。

じやかうしか(麝) Moschus 圖反芻偶蹄類なり、中央亞細亞に產し、形鹿に似て角なく、小形なり、性質は兎に似、飛躍巧にして、往々六十尺以上を飛超す、夜間出でゝ徘徊し、植物の葉、苔草等を食す、その體高さ二尺位、牡は長さ三寸許の牙を有し、唇外に露はし、かつ體腹部に線質の小囊を有し、內に所謂麝香を分泌す、冬季交尾の節は、その分泌量の增加するを見る、これその必用によるを知るべし、この獸は必ず群居せず、その產兒も各一頭づゝ別所に產するものなり、麝香は興奮藥、防臭藥、裝飾品として、高價なり。

じやかうれづみ(麝香鼠) Crocidura 圖食蟲類に屬し、普通の鼠より稍小形にして、その尾の

下部に二個線より、蘚香様の香氣を發する液を分泌す、長崎地方及び沖縄に產す。

じやがたらいも(馬鈴薯 Solanum tuberosum L. 圖茄科の草木なり、葉は羽狀をなせる複葉にして、地下の莖は、塊狀に肥大し、澱粉に富む、澱粉として、葛粉に代用す、また煮食すべし。

しやがん(砂岩)Sand-stone 圖砂層が長年月水底にありて、非常の壓力を受け、かつ粘土、炭酸石灰、酸化鐵乃至硅酸等の爲に、固結せるものにして、砂は石英の碎片なれば、主質は石英の集合物なり、その種類多く、含有化石により、時代の鑑定をなす、採取の易さと耐久の性あるを以て、築材、礎石、等となす、礎石原料は信濃大松產を最とし、その含有物質により、粘土質砂石、石灰砂岩、硅質砂岩に分ち、粘板岩、泥板岩、凝灰岩等これに屬す。

しやきん(砂金)Alluvial gold 圖砂金は黃金を含有せるものにして、細粒狀をなし、砂と混し、河底等より產す、これ岩石の破壞して砂となり、河底に沈澱したるものなり、採取法は、砂を樋中に入れ、水を流すときは、黃金は比重重きを以て、砂のみ、水と共に流る、本邦に於ては、北見枝幸、石狩十津川及び薩州より產す。

しやくとつ(尺骨)Ulna 圖腕にある骨にして、その內側に位し、纖維なる三角錐狀をなし、上端は强口以て上腕骨に連り、下端は疎鬆して、撓骨の下端の截痕とに接す。

じやくせき(錫石) 圖正方晶系に屬し、正方尖體と正方柱の集形に顯はれ、塊狀または砂粒をなす、成分は錫七八・六、酸素二一・三三、褐色、黑色にして、玻璃光、金剛光を放つ、硬度六乃至七、比重六・四乃至七・一なり、その結晶は花崗岩中にあり、河の砂中等に混して產す、英國コルンワールは世界著名の錫坑にして、本邦に於ては、周防豐後、常陸、美濃等有名なり、錫を製する唯一の鑛石なり。

しやくとりむし(尺蠖)Geometer 圖鱗翅類に屬する、尺蠖蛾の幼虫なり、その大小體色一樣ならざるも、軀幹延長概ね青色なり五對乃至六對脚を有し、尾端の二對脚を以て枝を攫み體を眞直して、枝梢に擬し、以て自己を保護す、その歩行するや、頭脚を以て、枝梢に固着せしめ、後體を進めて後、前體を延長し、再び頭脚を固着す、その狀恰も尺度を測るが如し、故にこの名あり、多く果樹を害す。

しやくなげ(石南 Rhododendron Metternichii. S. et Z. 圖石南科の常綠灌木なり、花は淺紅色にして、枝頭に簇る、本邦特有植物の一なり、常に深山に生じ、花に毒あり。

しやくやく(芍藥)Paeonia albiflora pall. 圖毛茛科の多年生草本なり、蟻植物にして、密を貯るといへども、蕾中にのみ多量に存し、開花にはなし、故に花密花にあらずして、花粉花なり、花は紅或は白色、甲虫及び蜂媒花なり、支那の原產にして、庭園に植へ觀賞す、果實の種子を藥用に供す。

しやこ Tridacna gigas L. 圖海鰐類に屬する、固柱貝にして、水管を有し、その殼は二枚にして、厚く三稜形をなす、殼緣相交錯す南海、琉球に產し、本邦產介類中至大なるものなり。

しやこ(蝦蛄)Squilla oratoria. De Haan 圖口脚類を代表する、甲殼類なり、(口脚類竟參照)その形エビに似、體長四寸五分、體は灰黃色にして、肢は黃褐色、尾節は紅色なり、東海に產し、美味にして、食用に供す。

しやしゆつもくずる(射出木髓)Medullar rays 圖莖幹の節間部を橫斷して、これを見れば、

維管束は輪狀に配列され、基木組織を內外の二部に分離するを知るべし、外部は皮層、內部は髓なり、また維管束相互の間には尙一帶の基木組織を殘留して、皮層と髓とを連絡するもの、即ち射出髓なり。

髓は材部と皮層を連絡して、養分を橫に流通する作用をなす、これ材輪を加ふるに從ひ、外部も成長し、絕へず、連絡するものなり。

しやうり(砂層)　圖砂が流水の爲に流され、水勢緩漫なる所、即ち河口、河底、湖底、海底等に沈澱堆積したるものなり。

しやちやうせき(斜長石)Plagioclase　圖長石の一種にして三斜晶系に屬し、硬度六乃至七、比重二・五乃至二・八、色は白、淡青、淡綠、黝色等にして、玻璃、脂肪、眞珠光澤あり、多く火成岩の主分をなす、正方石と共に廣く分布す。

しやはうしやうけい(斜方晶系)Rhombicsystem　圖三軸共にその長さを異にし、互に直角をなし、交叉するものをいふ、これに屬する五個の完面像と一個半面像とは、完面像、斜方尖體、斜方柱、斜方底面體、斜方頂面體、斜方側軸底面體。

半面像、斜方四面尖形體(斜方尖形の半面像)

じやもんせき(蛇紋石)Serpentine　圖普通溫石と稱し、非結晶にして、塊狀、片狀、纖維狀をなして現る、成分は硅酸四三・四八、苦土四三・四八、水分一三・〇四なり、色は暗綠色、橄欖綠色、綠黃色を帶び、時に黃色なるものあり、松脂光を放ち、脂感あり、劈開貝殼狀、條痕白色、蛇皮の如き、紋あるを以て、これを名く、硬度三乃至四、比重二・五乃至二・六五、原來單種の鑛物にあらずして、角閃石、柘榴石、尖晶石、橄欖石の分解より變成したるものなり、強熱を與ふれば、淡色となり、鹽酸を加ふれば、漸々溶解す、風雨の侵蝕に抵抗力强し、我國に於ては、閃綠岩の產地近傍に出て、美にして大岩石を成せるは肥後、上野、武藏の產にして、安房、伊勢、肥前よりも產す、建築裝飾の器、石碑、硯に製し、飾玉を作る。

しやりうにん(含利鹽)Epsom salt　圖斜方晶系に屬し、纖維狀、葡萄狀、塊狀をなす、成分は硫酸三二・五、苦土一六・三、水五一・二を含む硬度二乃至二・五、比重一・七五、銀白色を帶び、玻璃光を放つ、延性、展性を有す、吹管に苦味、水素の反應あり、水に溶け易く、濕氣に觸るれば、徐々酸化して、その色を失ふ、苦辛味を有す、英國エプソム、南米智利に產し、醫藥、寫眞用藥に用ゐる。

しやういしや(雌雄異株)Dioecious　圖雌花と雄花とを異株に生するものをいふ。柳等はその的例なり。

しやういたい(雌雄異體)　圖雌雄器、雌器が異る個體ありて、生殖を遂ぐるものをいふ、動物中、多く、最下等のものを除きては、大抵雌雄異體なり。

しやうがふしずゐ(聚合雌蕊)Syncarpous pistil　圖多くの雌蕊が多少、連合せるものをいふ、ユリにその例あり。

しやうけい(聚形)　圖一結晶もし異種の面相集りて、成るときはこれを聚形といふ。

しやうきんぶんし(聚繖分枝)　圖一枝成長する始めに、各側生軸、その起點上にありて、初軸よりも、一層盛に、成長作用を營むもの、即ち初軸より枝を出すこと多きものをいふ。

しやうせいしよく(雌雄生殖)Gamogenesis　圖雌雄の兩體が各生殖物相合せしめ、精蟲と卵に相合せしめて、成る生殖は、これを雌雄生殖といふ。

しゅうたうだ(雌雄淘汰)Sexual selection 動雄の形態彩色等が、雌の愛を買ひ、他の雄を排して、雌を獨占せんがために、漸々淘汰せらるゝ、自然淘汰の一種、ツジヤケ、ニハトリ等その他に於て例多し。

しゅうどうしゅ(雌雄同株)Monoecious 一株の植物に雌花と雄花共に有するものをいふ、胡瓜、栗等の如し。

しゅうどうたい(雌雄同體)Hermaphrodite 動一動物體内に、雌雄の兩器を具有し、交接して生殖するものをいふ、ミミス等の下等動物に例あり。

しゅが(珠芽)Bulbil 圖芽の變化したるものにして、母植物を離れ、地下に落ち、增殖す、ユリの葉腋に生するものは、鱗片葉を有し、ムカゴの葉腋より發するものは、塊狀なり、往々母植物にある間に根を生するもの、また花中に生するものあり。

しゅくしゅ(宿主)Host 動寄生虫の宿る動物をいふ、以て宿主より營養物を吸取するものなり、而して中間宿主と終結宿主の二種あり、例へばサナダムシは、一旦牛、豚等に寄生し牛、豚等を食したる人體に肉と共に入りて、寄生す、即ち牛、豚は中間宿主にして、人體は終結宿主なり。

しゅどん 圖貝 海馬を見よ。

しゅし 種子 Seed 圖胚珠が花粉の實質を受けて、受胎し、成熟したるものなり、これ新植物を生ずる、種なり、胚は幼軸、子葉、幼芽、幼根より成り、幼軸は莖となり、根となるべき、幼根はその下端にあり、子葉は、最初の葉を成すものにして、幼芽は、更に莖及び葉を生する、第一の芽なり、また胚乳を有するものと否らざるあり、種被を以て被はる、種子は成熟するや、直に萌出するもの即ち、モミゲ、コヒーの如きもの、七年後に至りて、萌出し得るもの、コムギの如し、マクワウリの如く、四十年に至るも、猶その力を存するもの、また數百年後も萌出し得るものあり、種子は、胚乳を有すると、否とあり。

じゅしん(珠心)Nucleus 圖胚珠より胚珠被を取除きたるもの、即ち珠心なり、一に胚珠心ともいふ。

じゅせい(受精)Fertilization 動雌性の生殖物即ち卵子が、雄性の生殖物即ち精蟲と、相合することをいふ、植物に於ても同一にして、胚珠が、花粉を受くるをいふ。

じゅせいなう(受精嚢)Seminal receptacle 動下等動物の雌が精虫を受けて、入るゝ器なり。

しゅちく(主軸)Principal axis 圖三軸を有する結晶系に於て、その中垂直なる軸を以て、主軸と稱す。

しゅつがはふ(出芽法)Budding 動下等動物體の一部より芽を發し、成熟して、その基部より、分離して、一動物となる、一種の繁殖法なり。

じゅてつ(鑄鐵)Cast iron 圖鐵鑛を燒き爐にて、熔解し、直に得たる、不純の鐵なり、その質脆く、熔け易し、故に、模型に注きて鍋、釜、鐵瓶を鑄製するに適し、建築用に使用す。

しゅとう(種痘) 圖天然痘に對する、豫防法にして、大凡百年前、英國のエドワート、シエンナーなる學者の發見にして天然痘は一種の傳染性の病菌にして、動物體及び人體を犯す、その害毒の輕重は、動物の種類により、異なるを以て、その比較的 病毒の輕き、牛にこの細菌を植へ、更にこれを人體に植うる時は、人間に起る病毒も、極めて輕、、爲めに人體中に一種の抗毒素を、新生して、病毒が外界より浸入するも、これを中化して 破壞するものなり。

しゅもくざめ(鯊鰐類)Zygaena 動横口類に屬する、鮫類なり、體長十二尺に達し、灰褐色を帶ぶ、體形サメに似るも、頭、兩側に延長し、木槌狀をなし、その末端に眼あり、その肉臭氣ありて、食料に適せざるも、その膠油及び體皮等有用なり。

しゅろ(棕櫚)Trachycarpus excelsa, Wendl. 顯椰子科にして、雌雄異株なり、徑六七尺の無枝莖を有し、苞毛が環生す 葉は大形にして、掌形をなし、長き葉柄を以て、稍頭に簇生す、果實は、核果狀をなし、蹄豆大なり、庭園に栽植せられ、材は裝飾用具を製し、苞毛はシュロナワに製し、水に腐蝕すること少なきを以て、船艦用、井戸綱、等に用ゐ、果實は食す支那の原產なり。

しゅんぎく(同蒿)Chrysanthemum Coronarium 顯菊科の草本なり、一種の香氣あり、葉は、細裂す、花は黃、白色の二種あり、葉を食用とす。

しゅんくわんき(循環器)Circulatory organs 動血液の循環をなさしむる、體腔、及び特別なる血管の總稱あり、即ち循環系統にして、人體に於ては、心臟、血管、(動靜脈)(毛細管)淋巴管、脾等なるも、下等動物にては、一部は血管にて、一部は組織が循環をなさしむることあり。

じゅんけいるね(鶉鷄類)Gallinacei 動鳥類の一目にして、單に鷄類とも稱す 嘴は短く、上嘴下方に彎曲して、その緣は下嘴を蔽ふ、鼻孔裂狀にして、鱗狀瓣の下にあり、翼は肥大の躰軀に比して、短小なるを以て、飛力強からず 足は疾走に適し、後趾短小にして、多くは他趾よりも、高く位す、往々頭頂に裸出部あり、即ち肉冠 肉瓣等を具ふ、雄は概ね距を有し 羽色雌よりも鮮美なり、この類は巢を地上に營みて棲み、穀物嫩葉、蟲類等を食す、概ね留鳥にして、一雄多雌の性あり、鞄卵は獨、雌の司る所にして、雛は脫殼するや、直に奔走し食を求む、その肉、卵は大抵美味なり、雉、鶉、錦雞、孔雀、七面鳥、松雞、鶉、野鷄、家鷄等なり。

じゅんさい(蓴)Brasenia purpurea Casp 顯睡蓮科の草本なり、葉は楕形をなし、恰も水面に浮ぶが如し、花は稍黑紫色、その新葉は、面に粘液あり、その味美なり。

しゅんまく(瞬膜)Nictating membrane 動鳥類の眼瞼と眼球の間にある白色の薄膜なり、人類に於ては、發達せずと雖、その痕跡あり。

しゅんらん(春蘭)Cymbidium virens Lindl 顯蘭科なり、葉は細長にして、堅く、花は白色なり、古來詩人の賞揚する所なり、庭園または盆栽す。

しょうにゅうせき(鐘乳石)Stalactite 顯炭酸瓦斯を含む水、石灰洞の上部に浸入し、その天井より滴り、その中に溶解せる、石灰を沈澱せしめ、氷柱狀をなして、垂下す、これ鐘乳石にして、石灰洞中、石筍と共に、頗る奇觀を呈す。

しょうはくくわしょくふつ(松柏科植物)Coniferæ 顯花は、單性或は複性、雄花は雌雌花よりなり、雌花は實葉より成る、その突出體より、一個以上の卵子を生す、果實は稀に核果樣あるも、一般毬果なり、葉は針狀、鱗狀にして、樹脂を貯藏す。モミ類、イチイ類、ヒノキ類、カヤ類、アスナロ類、コウヤマキ類等これに屬す。

じょうはつさよう(蒸發作用) 顯發散作用を見よ。

しょうろ(松露)Rhizopogon rubescens, Tul 顯菌類にして、徑一寸乃至一寸六分位、不正球狀なり、薄皮を被り、內部の髓質中の空胞內に、胞子を生して、蕃殖す、この菌の本體は

より滴り、その中に溶解せる、石灰を沈澱せしめ、氷柱狀をなして、垂下す、これ鐘乳石にして、石灰洞中、石筍と共に、頗る奇觀を呈す。

菌絲にして、外面を綾へり幼菌は、土中にありて白色なり、土上にあるものは褐色なり、四五月頃、海邊砂地の松樹の下に生じ、幼菌美味にして、食すべし。

しよくえん(食鹽)Common Salt 鹽、(岩鹽はその項に見るべし) 六面體の結晶をなし、その面階段狀に凹む、比重二・一六なり、食鹽は、人類、諸動物の生活上必要なるものにして、血液の循環を助け、胃液の含有鹽酸を作る等の外防腐料として、各種の鹽漬に用ひ、工業用有益なり、我國にては、岩鹽を產せず、海水より製す、鹽田法は我國在來の製法にて、降雨少なき、地方の海濱に、鹽田を作り、海水を引き入れ、日光に蒸發せしめ、鹽分の沈澱したる砂を採り、釜に入れ、煮詰め、白色の鹽を得、淺蟲溫泉にては、蒸發を助くるに溫泉を利用す、洋式法は水門を開きて海水を貯水池に入れ、汚物を沈澱せしめ、細濾を通過せしめて、水分を蒸發し、濃厚液を、鐵鍋中に熱し、蒸發す、海水千分中二十六を含み沿海と外海により含有鹽分に差あり、鹽泉、石鹽鑛中にも含有するも、以上は、海水鹽を說くものなり、播磨、讃岐、備前等最多量を產す。

しよくかく(觸覺)Touch sensation 生 腦より間接に、脊髓に入り、分布する、觸覺神經の末端、眞皮に分布し、痛、溫、壓覺を感するものなり、故に全身の皮膚は皆多少の知覺を具ふ、その銳鈍の部を次第に、順序すれば、舌端、指頭、唇、舌背、掌、指背、口內、頰、額、肘、脾、膊、股、背脊とす。

しよくかく(觸角)Antenna 動下等動物の觸覺器にして、大抵頭部に一對又は二對を有する綿狀物なり。

しよくくわかはほりるゐ(食果蝙蝠類) 動哺乳類の一亞目なり、晝間は古寺の暗所、樹洞、岩

風等に隱伏し、黃昏より出でゝ徘徊す、眼は極小にして、耳殼裸出し口吻突出して、口邊に鬚を有し、一見、狐面に似る、前肢は示指にも鉤爪を具へ、尾は極めて小、主として果實を食するも、時に鳥獸を害することなしとせず。

しよくきやくるゐ(觸角類)Pedipalpi 動蜘蛛類にして、その狀形、眞正蜘蛛類と蠍類の中間に位し、その腹は扁平にして、十一乃至十二環節より成り、上顎は鉤狀をなし、觸鬚は太く鉤狀或は螯狀なり、第一對脚は、細長にして觸角狀をなす、皆熱帶地方に產し、その咬傷は害毒を受く、本邦琉球諸島に產する、サソリモドキこれに屬す。

しよくしん(觸唇)Labial palpi 動二枚貝類の口の周圍にある、唇瓣狀物なり。

しよくせつしげきせい(觸接刺戟性) 植成長運動の一種にして、點頭作用とも稱す、アサガホ、ヒルガホ、インゲンマメ、の如く、莖を他物に纏ひ、或はブドウ、ヘチマ、の如く、ツルを以て他物に纏ふ時に、生する運動なりこれ等の莖は、その先端、未だ支柱に觸れざる間は、絕へず、徐々回轉し、一度支柱に會するときは、その相觸るゝ面は、成長遲く、表面は成長速なる、爲に支柱の周圍を纏絡するに至るものなり。

しよくだう(食道)Oesophagus 生 喉口より始り頸椎と背柱の前面を沿ひ、差々左側に偏りて下橫隔膜を貫きて、胃に達する一道管なり、口內氣喉に連る粘液膜の表面を、縱橫せる、肉纖維にて組織せる、筋質膜を以て被ひ、平素中空ならず、經纖維收縮して、短縮し、緯纖維收縮して窄狹し、兩纖維の作用により、食物を胃に送る、機能をなす。

しよくだうしんけい(食道周神經) 動蠕形動物、節足動物の食道周圍にある神經にして

その周邊には、食道神經節ありて、これと連る、その連絡表左の如し。

食道周神經 ｛上方 食道上神經節、食道上にあり、
　　下方 ｛食道下神經節、食道下にあり、食道を圍む

上神經節は即ち腦にして、下神經節は後方、胸腹部神經鎖に連る、

しよくちうかはほりるゐ(食蟲蝙蝠類) 動翼手類の一亞目にして、食果蝙蝠類に比して、遙に小なり、その習慣は粗々類似す、白齒は、鋭なる小突起を具へ、昆蟲類を嚙碎するに適す、耳は瓣膜ありて、鼻もまた瓣様の附着物あり、前肢は、拇指にのみ、鉤爪を具へ、その尾は長し、夜間人畜を襲うひ、その血液を吸取す、南米に產す。

しよくちうるゐ(食蟲類)Insectivora 動哺乳動物の一目なり、皆小獸にして、外觀齧齒類に似たり、四肢短く、各五趾を有し、全蹠地を踏む、鎖骨あり、口吻尖りて、眼及び耳殼は至りて小形なり、齒は三種共に存在し、食肉の形質ありと雖、犬齒は常に、强大ならず、この類は、昆蟲、蠕蟲、爬蟲等を食し、土中に穴居して、冬眠をなす、南米及濠洲を除くの外、各地に產す、モグラ、ヤマモグリ、カハネズミ、シヤカラネズミ、ハリネズミ、ザネズミ等これに屬す。

しよくちうしよくぶつ(食蟲植物) 植植物にして、蟲類をその營養に充つるものなり、これその根の發育不完全にして、或は全く根なきが爲に、その葉の同化作用のみを以て、自己營養を滿す、能はざる、必用上、これを昆蟲に需むるに至るものなり、昆蟲を捕獲するや、その葉面にある、許多の腺毛より盛んに、粘液を分泌し、以て消化吸收す、ヘイシサウ　マウセンゴケ、ムシトリスミレ、タヌキモ、ウツボカツラ等その重なるものにして、その捕ふる方法は各多少異るも、葉によりて捕ふるは、一軌なりその內の奇なるものは、マウセンゴケ、葉は匙狀をなし、蟲類來ればその葉を、一時に閉ぢ、消化液を注ぐ、ヘイシサウ、葉は管狀をなし、蓋あり、內に消化液を貯へ、蟲類來り投すれば、覆蓋すウツボカツラ、葉の一半、瓶狀をなし、その中に、水液を貯へ、蟲類この中に陷落すれば、出つる能はず。

しよくにくるゐ(食肉類)Carnivora 動中、大或は大形の哺乳類にして、專ら肉食をなす、所謂猛獸なり、その特徵は、齒の形質にして、門齒、犬齒、臼齒の三種完備す、門齒は、上下各六個あるを常とし、犬齒は頗る强大、且つ鋭利なり、臼齒は種屬によりて、その數を異にするも、要するに、皆鋭尖なる齒頭を有し、以て動物質食物を製碎するに適す、腸は頗る短し、趾は四或は五ありて、各鋭き鉤爪を具へ、距乃至趾のみを以て、地を踏む、感覺鋭敏、筋力强く、運動迅動なり、性慓悍にして、殺掠を嗜み、平居概れ、群居せず、濠洲を除くの外、全地球上に產し、熊族、鼬鼠族、犬族、猫族これに屬す。

しよくぶつがく(植物學)Botany 植植物學は、生物學の一分派にして、植物に關する、諸般の事項を研究する學にして、これを、左の五個學に分類す。

(一)植物形態學、植物體外部の形態、并に內部の構造を研究する學なり。

(二)植物生理學、植物體に於ける、生理現象及びその起因する所を研究する學なり。

(三)植物分類學、現今存在する植物、または古代生存して、現今は、只化石として、殘れるものを、總括分類して、その相互間の關係を攻究する學なり。

(四)植物生態學、植物生活の狀態を研究し、

殊にその外圍との關係を明にする學なり。

(五)植物應用學、植物學に於て、研究せる、結果を、實用的に利用する學にして、農業、藥用、園藝、山林植物學等なり。

しよくぶつえいやうきくわん(植物營養機官)　圓根、莖、葉の三部より成り、自己の營養を全くす。

しよくぶつびんき(植植物原器)　Vegetative Elementary organ　圓細胞、導管及び組織の三者をいふものにして、以て、莖、葉、根を形成す。

しよくぶつしつしよくもつ(植物質食物)　圓植物より得る主要食物は、穀類、豆類、菜蔬、果實にして、その内主なるもの、成分を示す

各種名稱	水分	蛋白質	抱炭水素	越斯幾分	脂肪	鹽類
千粱	一三、九	一三、三	一八、四	三、〇	—	一、九
小麥	一三、三	一二、九	三、〇	六、五	—	一、四
裸麥	一四、八	一三、五	三、〇	六、一	—	一、六
大麥	一四、八	一三、五	三、〇	六、一	—	一、六

各種名稱	水分	蛋白質	抱炭水素	越斯幾分	脂肪	鹽類
蕪菁	一〇、八	九、四	三、九	九、三	—	一、四
下蜀黍	一二、一	七、一	四、三	七、九	—	一、四
米	九二、〇	九、〇	五、七	八、四	—	一、六
小豆	一二、一	五、〇	七、三	七、一	—	一、六
蹴豆	一四、〇	六、九	五、八	八、四	—	一、六
大豆	一三、五	三、四	五、六	一、九	—	一、四
絲瓜	八〇、七	一、九	三、七	一、三	—	一、六
甘藍	八〇、七	一、四	三、七	一、三	—	一、六
馬鈴薯	七七、四	一、三	一八、〇	九、七	—	一、〇
花甘藍	九八、八	一、〇	一八、〇	九、七	—	一、〇
胡瓜	九七、四	一、三	一八、〇	〇、四	—	一、〇

菜蔬と果實とは、滋養分を含むこと、少きも食慾を進むる効あり。

しよくぶつせいしよくはふ(植物生殖法)　圓また動物と差なし。

生殖法
- 有性生殖法　(高等植物生殖法)
- 無性生殖法
  - 發芽法
  - 分裂法　(下等植物生殖法)

しよくぶつせいりさよう(植物生理作用)　圓左の分類あり、吸收作用、上騰作用、氣體の運行、發散作用、呼吸作用、養分、同化作用、排泄、成長、外力、感應、生殖作用とす。

しよくぶつのうんどう(植物の運動)　圓多く、成長に伴ふものにて、成長もまた一の運動たるを免れず、下等植物なるミトリムシ、パンドリナ、モーラムの如きは、動物と同樣の運動をなす、また高等植物は、その原形質が細胞膜内に運動し、またその組織は、水の有無によりて、運動す、その運動を三種に分つ。

(一)吸水彎曲運動、(二)成長彎曲運動、(三)膨壓變化運動とす。

また分類法に別に一說あり、

(一)全體運動、水中に棲息せる、下等植物藻類等は生殖時代に於て、游走子と稱し、活潑に水中を游泳し、雌雄の卵珠に達す、

(二)局部運動

(イ)睡眠運動、葉また、花が睡眠の爲に、開閉運動をなす、ネムノキ、ナツキサウ、フツソラマメ、カタハミ、ボタン等多し、

(ロ)觸接運動、葉に觸るれば、閉して、垂下す、オシギサウ、

(ハ)自發運動、定時間にその葉を回轉運動す、マヒハギ、

(三)成長運動、成長する爲に、伸延運動するもの、一般の植物の成す、所なり、

(ホ)點頭運動、莖植物に於けるが如く、莖の尖端を常に回轉運動して、他物に觸れ、纏絡す、アサカホ、フヂ、

(三)原形質運動、新陳代謝を盛にするため、體内の原形質が、流河の如く、滔々として、運動す、

(イ)回轉運動、細胞内の膜に沿ひ、一定の方向に環流するもの、シヤジクモ、クロモ、

(ハ)循環運動、櫻の毛は、その細胞内の原形

質、綱の如く、種々の方向に循環す、ムラサキガモトの雄蕊の毛、ウメ、ミミナグサの毛等なり。

しよくぶつのせいそんきやうさう（植物の生存競爭）圖植物は、自己の生存即ち、營養、生長呼吸、運動、生殖等の種々の要求を充たさんがため、その間に非常の激烈なる競爭を生し、互に餌食とし、強優者は、遂に他の發達生殖を妨げ、或は滅せしめ、獨その要求を專らにす、即ち生存競爭なり、植物もまた優勝劣敗の數に漏るゝ能はざるなり。

しよくぶつのせいじつき（植物の成實期）圖植物が發芽成長して、遂に開花結實の期に達するをいふものにして、その間一年乃至數十年を要するものあり。

しよくぶつのせいぶん（植物の成分）圖一般を通ずる成分

成分
- 有機化合物をなすもの（炭酸瓦斯、水アンモニヤ）
- 無機化合物をなすもの（燐、加里、クロール、カルシウム、マグネシウム、鐵、ナトリウム、リチウム、マンガン、硅素、臭素、アルミニウム、銅、亞鉛、コベルト、ストロンシウム、バリウム、

燃燒すれば、有機化合物は、飛散し、無機化合物は、灰色、白色の粉となりて殘留す。

しよくぶつのぶんぷ（植物の分布）圖

植物
- 溫帶地方植物
- 熱帶地方植物
- 寒帶地方植物

しよくぶつのにだいくべつ（植物の二大區別）圖花を有すると、否により分つ

植物
- 顯花植物（有花）梅、梨、柿、櫻等大概
- 隱花植物（無花）マツタケ、ワラビ、ゼンマイ、トクサ、ウラシロ、アサクサノリ、コンブ、バクテリヤ

しよくぶつばんしよくきくわん（植物蕃殖機官）Reproductive organ 圖花、果實、種子これなり。

しよくぶつぶんるゐ（植物分類）圖人爲分類、その項を見よ

植物分類
- 人爲分類
- 自然分類
  - 顯花植物
    - 裸子植物
    - 被子植物
  - 隱花植物
    - 變形菌部……變形菌類
    - 苔蘚部
      - 苔蘚植物
      - 羊齒植物
    - 藻菌部
      - 裂殖植物
      - 鞭毛植物
      - 藻植物
      - 菌植物

しよくぶつやうぶん（植物養分）圖植物は、炭酸及び、地中より、可溶性鑛物質を吸取して、その體を形成す、即ち有機物と無機物との變化するものなり、營養物質が、地中、または空中に缺乏するときは、枯死す、その物質は、大抵、化合物として、吸取するものなり、

植物養分
- （有機化合物を成すもの）、炭素、水素、酸素、窒素、磺黃、
- （無機化合物を成すもの）、燐、クロール、加里、カルシウム、鐵、マグネシウム

しよくぶつやうぶんきうしふはふ（植物養分吸取法）圖植物が、その養分を吸取するは、決して、固形體に於てせず、固形體は、重に流動體として、採り、一方に氣體を採る、顯花植物は、根、莖、葉の生活機官を有するも、隱花植物に於ては、不完全なり、而も、その流動體と氣體を吸取するは、一般なり、今その主要なるものを擧ぐれば、水素は、水の分解作用によりて採り、

窒素は、地中の有機物質即ち、植物の遺體中に、窒素化合物として、存するものを採り、硫黄は、地中の硫酸鹽類を採り、分解作用を以て、硫黄を、採る、

炭酸瓦斯は、葉が、空氣中より吸取す、

しょとつ（蹠骨）Metatarsus　生足を成す、骨にして、跗骨と、趾骨の間にあり、その數五個、第一乃至第五蹠骨と稱す、形狀細長、僅に弓形をなす。

じょとつ（鋤骨）Vomer bone　生鼻の奥にある、薄き、一小骨なり。

しらうを（白魚）Salanx　動喉鰾類に屬する、有腹鰭魚なり、體長二寸、白色にして、亞透明なり、その體細長にして、鱗なし、常に、岸に近き、海に棲み、その産卵期に至るや、群集して、河口に泝りて産卵す、武藏、攝津、伊勢、播磨、備前等最有名なり、美味にして、世人の賞する所なり。

しらかし（白樫）Quercus salicina Bl.　植殼斗科の常綠喬木にして、葉は、披針形をなし、鋸齒狀の細刻あり、かつその裏面は、灰青色なり、花は、淡綠色、初夏開花す、風媒花なり、材は、白色樣にして、甚だ堅く、また射出木髓の大にして、明なるを特徴とす、俗に、その柾目と稱するは、その實、板目、板目と稱するは、柾目なり、この誤は、射出木髓を年輪と、誤認するによる、暖帶に多く産し、豆衡、車輪、體育用具、銃床等を製し、必用の材にして、薪材にも用ゆ。

しらぎす（鼠頭魚）Sillago　動硬鰭類にして、その頭、殆んど圓錐狀をなし、背鰭二あり、體色は灰綠色、西南に産し、食すべし、その一種灰綠色のものアナギスあり。

しらくもさん（白雲菌）Agaricon　植多く、小兒の頭部に、寄生する菌なり、白き、粉を塗りたる如き、有樣なり、その害毒は髮を犯すにあり。

しらさぎ（鷺）Herodias　動涉禽類に屬し、頂に長羽を生じ、羽色は純白色にして、背に長羽あり、嘴は長く、脚は青色にして、かつ長し、その體長三尺位、沼池に立ちて、小魚、爬蟲等を捕食す、その背羽は、裝飾用として、歐米人に貴重せられ、價貴し。

しらぬひ（不知火）　動九洲地方に於て、一奇觀を以て、有名なる不知火は、主として夜光虫及びこの種の小動物の作用により、起るものにして、即ち水の動搖に從ひ、その刺戟により、發する光なり。

しらみ（蝨）Pediculus　動昆虫類に屬するも、翅なし、吻を有し、その色灰白色または、汚白色、人類の頭部等に、寄生し、血液を吸吮する、小蟲なり、扁平にして、頭胸部は小、腹部楕圓形にして、大なり、脚は三對より、成り、脚端屈曲して、毛を握るに、適す、この蟲は變態せず、一雌にして、卵數五十を産し、毛或は衣類の縫際に附著し、六日乃至八日にて、孵化し、十八日を經て、生殖す、頭蝨衣蝨の二種あり、陰毛、腋下毛等に生ずる、方形、肉色なる、毛蝨の一種あり、皆身體の不潔より生ず。

しらみばえ（蝨蠅）Pupiparae　動雙翅類に屬する、昆蟲類にして、翅は全く闕くものあり、或はこれあるものあり、胎生にして、その幼蟲は産出後、速に蛹に變ず、寄生虫なり、馬の蝨蠅は翅なく、羊の蝨蠅、蜂蝨は有翅にして、蜂蝨は蜂の胸部に附着す。

しりあげむし Panorpa　動脈翅類に屬し、その體長三四分ありて、長し、黑褐色を帶び、雄の後體に、鋏あり、敵に會へば、後體を上げて、挾む故にこの名あり、常に林中に棲す。

しろあり（白蟻）Termes　動脈翅類にして、體長

二三分、黑褐色なり、前後翅同大にして、靜息するときは、體と併行せしむ、その脚は短し、上顎は能く發達す、亞非利加に產し、家屋、家具等を害して、その外壁を餘すのみ、故にその外觀完全なるも、內部は空洞をなし、これに觸るれば、粉壞す、蟻一般の習性にある如く、無數一社會を團結し、生殖器の發達せる、雌雄の外に、無翅の兵卒、職蟻等ありて、造巢、子孫の保護、食物の運搬、外蟲の攻擊等を司る、雌は八萬六千個を產卵し、產卵期には、その體平素に比し、二千倍の大さに至る、粘土、砂等を以て、高十五尺、周六十尺の巢塔を築きて、棲す。

しろくま(白熊)Ursus Maritimus Desm 動食肉類にして、體長九尺に達し、熊族中の最大なるものなり、柔軟白色の長毛を、全身に被り、頭長く、體軀長狹なり、能く游泳、潛行し、また巧に疾走す、雌は冬眠をなさず、特に魚類、海獸を捕食す、北洋の諸沿岸、並に本邦千島等に棲息す。

しろつめぐさ Trifolium repens L, 植豆科の草本なり、葉は、三小葉より成る、複葉にして、花は、白色、短き、總狀花序になり、原野に自生して、家畜の養料とす、オランダゲンゲともいふ。

しろてう(粉蝶)Pieris rapae L, 動鱗翅類に屬する、蝴蝶類なり、後翅卵圓形、前翅三稜形にして、白色若くは淡黃色なり、但、前翅の一部は灰色にして、暗色點二あり、その幼虫は、俗に菜蟲といふ、この蝶をツマグロラウとも稱す。

しろぬ Lycopus europaeus, L. 植唇科の草本なり、花は小、數個を葉腋に簇生す、その地下莖の先端肥大して、白色をなし、以て食用に供す。

しろねずみ(白鼠)Mus minutus, 動齧齒類に屬する鼠族なり、その形狀鼠と異なるなきも、體毛白色なり、歐洲、西比利亞に產し、本邦に於ても、また多く玩養す。

しろはなむしよけぎく Pyretherum cinerariaefolium 植菊科の多年生草木なり、花は大形、白色なり、花部密生す、蟲媒花なり、夏時開花す、花は、乾燥して粉末とし、除蟲粉を製し、蚤、蚊等を驅除するを得、農業上の驅蟲劑に用ひ。

しをん 植菊科の多年生草木なり、花は紫色、秋開花す、蟲媒花なり、栽培して賞觀するも、家畜に有毒なり。

じん(仁)Nucleus 植種子中に被包せらるゝ、種核なり。また細胞中の核中小體をいふ。

じん(仁)Nucleolus 動細胞の核中にある、小核にして、點狀をなし、原形質の分化より生す。

しんきん(心音) 生心臟は、その伸縮により、固有の音を發す、心音これなり、長くして、濁れるは、心室の筋肉收縮する音にて、收縮の止む間に生ずる、短、鋭音は、動脈の、半月瓣膜の閉づる響なり、この發音して、動くを、鼓動といふ。

しんくわ(進化)Evolution 動植生物生活の狀態は、萬世を通じ、一定不易のものにあらず、外界の變遷に從ひて、これに適する、生活狀態を形成するものにして、その生物の機官も、多少の變遷をなし、或る機官の必用起るに從ひ、漸々、發達發育し、遂に或時代中に一機官を、生ずる如く、簡單なる構造より、複雜なる構造に變遷するをいふ。

しんくわざんがん(新火山岩) 鑛新火成岩とも稱し、火成岩の一分類なり、地球內部の、熔融岩が、地殼の表面の、逆出して、冷却凝固せるものにて、含有瓦斯が、脫出せるにより、有孔質なるもの多し、安山岩、玄武岩、粗面

岩の類はこれに屬す。

しんくわろん(進化論) Evolution theory 動進化論の概要は、その體形、骨骼、大小等、千差萬別なる、數十萬の動物は、皆單一の祖先より、生じたるものにして、その各自に於ける、生存競爭、自然淘汰、優勝劣敗等種々の原因により、その長年月の間に、進化、退化をなし、遂に千態萬別の、動物を生じたるものなりといふにあり、例へば、人類に於ても、その先祖は同一なるも、風土、食物、地勢等その他の原因により、その容貌、大小、骨骼等を異にする、各種の人種を生ずると、同一理にして、現今に於て、生物學の基礎をなす、一大法則となれり、西暦一八五八年、英國の學者ダーウイン氏の創説にかゝる。

しんけい(神經) Nerve 生神經の元質は、神經細胞及び神經纖維より成る。細胞は、細微にして、多數の小突起あり、これより出づる、玲瓏白質にして、至細の纖維を以て成る、前者は、生理的中樞の要位を占め、後者は、傳波器なり。

しんけいけい(神經系) Nervous system 生腦、脊髓、腦神經、脊髓神經及び交感神經より成る。

しんけいさ(神經鎖) Nerve chain 動節足動物、蠕形動物等の腹面にありて、鎖狀をなせる、神經をいふ。

しんけいさう(神經叢) 生交感神經系の、第二屬を神經叢といふ、即ち、神經節より生ずる支別と、腦神經及び脊髓神經の支別と交錯して成る、この神經は、血行器、呼吸器、消化器、及び分泌器に備りその器質に終るもの多し。

しんけいせつ(神經節) 生神經中樞の一部にして、索節をなし、多數なり、その支別は、交感神經をなす、その分布せる所は、頭部の上頸神經節、頸部の頸神經節等なり。

しんけいちうしう(神經中樞) Nervous centres 生腦髓、脊髓及び神經節は、即ち、神經力の存する所なるを以て、中樞と稱す、總ての神經は、中樞部より、派出せるものにして、意識運動の中央局なり、神經はなほ、電信線の如し。

じんとうじゐせい(人工受精) 圖この法は極めて、簡單なる方法にして昆虫、風水、等に代りて、花粉の媒助をなすものなり、成熟せる、花粉を採り、始より昆虫等の媒助を妨げて保護せし、雌花の雌蕊柱頭に付し、その花を、紙等に包み、保護す、然らざれば、昆虫媒助をなすの、憂あり、翌年その種子を播かば、兩花の相の子を生ずべし、この法は農業上應用さるゝ所にして、アサガホに最多く用ゐらる。

しんぞう(心臓) Heart 生胸腔の左乳線部にある、筋肉質の器官にして、その形、蓮花の蕾の如し、人拳大なり、心臓と稱する、漿膜囊を以てこれを被ふ、その内部は、中央に一縦壁ありて、心腔を左右に分ち、左右ともに、瓣膜を以て、上即ち心耳、下即ち心室に、横隔さる、心耳は靜脈、心室は動脈に連る、心耳、心室には、數個の瓣膜ありて、心臓に於て、血脈を、逆流せしめざる、裝をなす、右心耳と右心室間に、三尖瓣膜といふ、三葉膜片あり、左心耳と右心耳の間には、相對する二枚の僧帽瓣あり、血脈は、全體を循環して、靜脈より歸りて、右心耳に入り、更に右心室を經て、肺に入り、酸素を取り、炭酸を捨て、左心耳を經て、左心室に入り、更に大動脈を經て、全身を繞る、如斯、心耳收縮すれば、心室擴張し、心室收縮すれば、心耳擴張して、終生間斷なく、血脈を交換せしむ、成人一分間に七十回乃至七十五回の伸縮をなす、即これを鼓動といふ、鼓動によりて、固有の音を

發するを、心音といふ、脈搏も、伸縮により血脈が、逸出して、その壓力が血管壁を、擴張する、現象なり、その一鼓動毎に、各心室より、動脈へ、輸出する、血液量は、大凡壹合許にして、二十三秒時間に、全身を循環して、心臓に歸る、故に血液は、全身を一周するには、再度心臓に入るものにして、この全身運動を、大循環といひ、心臓より、出でゝ肺に入り、再び、心臓に歸るを、肺循環、または小循環といふ。

じんざう(腎臓)Kidney, 腎臓は、左右一對ありて、腹腔の後部に位し、その形鶯豆の如く、長さ大凡三寸五分に達す、内緣は、凹みて、互に相對す、脊柱の前面なる、大動脈と、下行大靜脈より、兩腎に向ひて各一枝脈を派して、相連絡す、卽ち腎動脈、腎靜脈、これなり、内緣の腔所より、内部に通ず、腔所を腎門と稱し、輸尿管は漏斗狀をなして、腎門に開口す、腎の構造は、その外部を皮質部、内部を髓質部といふ、腎腔は、その中央にありて、稍廣し、髓質部は數多の圓錐形の突起をなして、その内面に突出す、腎臓の組織は、極めて、緻密にして、その細尿管の如きは、一旦髓質部より出でゝ、皮質部に入り、更に髓質部より、皮質部に入り、終りに、一小膜嚢となるマルピキ氏嚢これなり、故に腎は、無數のマルピキ氏嚢と、細尿管とより形成せるものなり、マルピキ氏嚢は、外部にあるを以て、内部、外部は、稍外觀を異するため、髓質部、皮質部の區別あるなり。腎動脈より、派する、血液は、マルピキ氏嚢中の毛細管球を通過する時、血漿中の水分、水分中に溶解せる、鹽分の一部とは、毛細管の壁を滲透して、マルピキ氏嚢中に入り、更に細尿管を通過して、腎腔に達す、細尿管の壁にある、細胞は、排泄作用を成すものにて、毛細管内の血液中より、老癈物殊に窒素を含有する、尿素を、濾取して、細尿管を通過する、水分に混入す、この時の水分は、未だ、充分に尿の成分を具へざるも、長き細尿管を通過する間に、その壁の細胞より、多くの排泄物を採り、腎腔に達するに至り純然たる、尿となる、而して、毛細管は集りて、小靜脈をなし、更に左右の腎靜脈となり、腎を出づ、腎靜脈より心臓に送らるゝ、血液は既に老癈物を、除去らるゝものなれば、他の靜脈を過ぐる、血脈よりも、甚だ清潔なり。

しんじ(心耳)Auricle 心臓の部を見よ。

しんしきん(伸指筋)Extensor digitorum 撓骨の基部より、起り、腕の背面に延長して、拇指を除く、四指に著し、掌を伸し、指を伸す用をなす。

しんしつ(心室)Ventricle 心臓の部を見よ。

しんしゃ(辰砂)Cinnabar 鹽六方晶系、紅色なるも、或は土狀を爲して、產す、條痕紅色、金剛光を放つ、硬度二乃至二、五、比重は九、なり、酸類に溶解せず、墺太利、西班牙、北米に產し、本邦にては伊豫、大和に產す、粉碎し、曹達を混じて熱し、精製して、水銀を取採す、また朱の原料とす。

しんしよくさよう(侵蝕作用)Erosion 鹽風、水、空氣の作用により、地殼の漸次に破壞さるをいふ。

しんせいくもるる(眞正蜘蛛類)Araneida 鬼蜘蛛類の一目にして、頭胸と胸の間に緊縮ありて、その分界明なり、上顎は、二節よりなり、その末節、鉤狀にして、尖頭に毒線の孔を開き、一齧毎に、毒液を注出す、下顎は、小板狀にして、數節より成れる脚狀の觸鬚を携ふ、その雄にありては、その末端、稍膨大し、以て交尾の用をなす、脚は七節よりなりて、長く、その末端に、二個の櫛狀鉤爪、並に數多

の小爪を具ふ、腹の下面、前部に生殖門ありて、その後に一對の裂狀氣孔ありて、必ず、肺囊と通ず、時としては、その直後に、更に一對の氣孔を開くことあり、これ肺囊、或は氣管系に通ずるものなり、肛門は、腹の下面、尾端に位し、その周圍に四個乃至六個の疣狀小突起あり、これを紡績突起といふものにして、數多の小孔を穿ち、腹内の紡績線に生ずる、粘液は、この小孔より適出し、相合して、一條となり、かつ凝固して、蛛絲を成す、この類は、後脚の鉤爪を以て、該絲を紡出し、種々これを利用す、神經系は、食道前に位せる、腦及び、大なる星形をなせる、胸神經球及び、諸神經より成り、頭上に六個乃至八個の單眼あるを常とす、皆卵生にして、その卵子を、蛛絲を以て、造れる、囊中に藏め、善くこれを看守す、その性貪食にして、同類相食し、かつ昆蟲類を捕食して、これを喰ふ、その性の奇なるもの多し、螳螂、タナゴモ、トタデグモ、水蜘、蠅虎、フクログモ、捕鳥蜘、壁錢、喜蛛、絡新婦、コミグモ等これに屬す。

しんせいたい(新生代)・圖 岩石、碎屑岩、噴岩、植物、闊葉樹、殆んど現今の有樣をなす、動物、哺乳類、(馬、犀、象、巨角鹿)の始祖現はれ、人類この末葉に出づ、時代、石器、銅器、鐵器時代。

しんせいなんたいるゐ(眞正軟體類) 圖軟體動物の大別類にして、更に分つて、四目とす、(一)頭歩類、翼歩類、腹歩類、蒲鰓類。

じんたい(靱帶)Ligament 圖骨の兩端相接する處は、悉く、その外を固繫す、これを、關節靱帶といひその質柔軟にして、帶黄白色の纖維より成り、また關節を被包するに、囊狀に彷彿たるを以て、囊狀靱帶と名るものあり、これを靱帶と總稱す、内面に骨膜液ありて、關節運動を、圓滑ならしめ、かつ兩骨を離れざらしむ。

しんちう(眞鍮)Brass 黄銅とも稱し、銅二、亞鉛一の合金なり。

しんちんたいしゃ(新陳代謝)Substitution 圖圖新陳代謝とは、一般に先の者は、後の者と順次に間斷なく、交替することを、意味するものにして、用語に於ても、同意味なり、即ち、總ての有機體なる、生物は、その體より、各種の排泄物を排出せしめ、保續と構造とのの必用なる、養物を、攝取して、これを類化せしめ、常に出納に過不及なく、一致平均せしむ、この兩作用を稱して、新陳代謝の機能といふ

しんなう(心囊)Pericardium 圖心臟を包む、膜囊にして、心臟との間にあり液を充ず。

じんもん(腎門) 圖腎の凹部の陷落せる處にして、血管、及輸尿管、これに出入す、輸尿管の漏斗形をなせる、上端を、腎盂といふ。

しんぴ(眞皮)Bermis or chorium 圖皮膚の部を見よ。

じんぴぶ(靱皮部)Best 圖緣皮膚の内面に位し、三部より、成る。

- 柔軟組織
- 靱皮部
  - 篩管 養料を成長部に送り、貯蓄部の通路をなす、
  - 靱皮組織 此部分を、強固にす。

じんるゐ(人類)omoH 圖二手類、または、猿類と合して、靈長類の一目を爲す學者あり、要するに、人類は、智識を有し、道理を辨へ、言語を以て、思想を通じ、前肢は手、後肢は足にして、全躰地に接し、行くに直立する、有胎盤の哺乳類なるも、猴類と異なるは、主として、智識發達の度にありて、形體上の差

異は、甚だ些少なり、この類を分類し、その來歴、萬物との關係を、研究するは、人類學に於て、成すべきものなるを以て、茲に説明せず。

じんぞうたうた(人爲淘汰)Artificial selection 圖 人類がなす、淘汰をいふものにして、吾人が、自己の理想生物を作らんが爲に、その理想を以て、或る種のみを、採りて、繁殖せしめ、數代、數十代を經て、その理想なる、變種生物を形質せしむるをいふ、動物にては、ニハトリ、キンギョ、植物にては、キク、アサガホ等に變種多きは、皆人爲淘汰の結果なりとす。

じんぞうぶんるゐ(人爲分類)Artificial classification 圖 植物生物の天然の親族、即ち、形態、構造、發生の如何を問はず、その外形上の同類により、分類するものにして、動物學必要のものにあらず、植物學に於ては、その分類法の完全なるもの四法あり、

(一)英國の學者ベンザム、フッカーの兩氏の共同考出によるもの、雙子葉門、單子葉門の二大別となす。

(二)現今獨、墺國間に行はるゝ、アイヒレル氏分類式、エングレル氏分類式の二とす。

(三)ヴルミング氏分類表にして、

(イ)水生植物群界、A浮游界、B氷雪植物群界、C顆毛類群界、D水鹽群界、E著石藻群界、F海草群界、G淡水草群界、H分生類群界、I鹹沼、J沼澤、K蘆沼、L蘚沼、M蘚野、N沼林、

(ロ)乾燥植物群界、A岩生界、B乾地帶、C矮樹林、D沙生群界、E熱帶沙漠、F荒野帶、G岩野、H乾燥濕木林、I乾燥樹木林、

(ハ)鹽生植物群界、A熱帶海岸植物、B岩上鹽生類、C鹽沼、D鹽地草木帶、E砂地F熱帶砂地海岸、G砂地無葉樹林、H鹽湖、I鹽野、J海濱原野、

(ニ)常態植物群界、A北極帶、B原野、C牧場、D常態植物體、E暖帶落葉樹林、F常綠濶葉樹林、

す

すうきよく(皺曲)Folding 圖 褶曲または、皺襞ともいふ、地球の漸次冷却し、體積を縮小するに際し、地殼が横壓力を受けて生じたる、地層の皺をいふ、これを向斜、背斜の二種に分つ。

すうは(皺波)Wrinkle 圖 極めて、僅少の距離に於て、生せる、褶曲をいふ。

すうゐ(皺胃)Abomasus 動 反芻類の、第四胃にして、その内面には、多數の細皺あり、重瓣胃より、來る食物を受け、これを腸に送る用をなすものなり。

すぎ(杉)Cryptomeria japonica Don. 圖 松柏類の松杉科にして、常綠喬木なり、葉は、針狀、花は單性異花、風媒花なり、種子は裸子、陽木なるも、濕地に適し、高二十丈、周三丈に至るものあり、我國にては、唯一種あるのみ、その幹、直なるを以てスギの名あり、材は邊材白色、心材淡褐赤色にして、淡黑色を含む、木理は通直、堅軟、その度に適するを以て、その用途非常に廣大なり、小器具より、各種の建築用、橋梁用、船舶、家屋等、吾人の生活上缺くべからざる、有用材なり、その皮は屋根葺に用ひ、葉は、乾燥精製して、線香、抹香となす、本邦到る處に產するも、秋田、木曾等の杉林は廣大なるものあり、本邦山林樹木中、最重要なるものなりとす。

すぎごけ(土馬綜)Polytrichum commune L. 圖 蘚類に屬し、多年生なり、葉は不完全にして、